田野町文化財調査報告書第11集

丸野（まるの）第2遺跡

県営農地保全整備事業七野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

宮崎県宮崎郡
田野町教育委員会

丸野第２遺跡正誤表

（図版目次）

図版15　　ＳＩ11・13検出状況　→　（削除）

図版16　　ＳＩ11・13検出状況　→　（挿入）

（本文）

２　ページ　10行　　２軒検出された　→　２軒が検出された

４　ページ　６行　　灰ヶ野・１基　→　灰ヶ野・２基

〃　　〃　　高野原・２　→　高野原・１

11～12ページ

Ⅱｂ層の２行　　大きは破片は　→　大きな破片は

Ⅲ　層の３行　　黄褐色破質土層も　→　黄褐色砂質土層も

Ⅴ　層　　暗褐色色シルト質土。　→　暗褐色シルト質土。

Ⅵ　層　　シルト土質　→　シルト質土

23　ページ　10行　　61は57とは異り　→　61は57とは異なり

53　ページ　12行　　南西105cm離れて　→　南西に105cm離れて

61　ページ　17行　　孤状の２条　→　弧状の２条

94　ページ　11行　　１条に沈線を　→　１条の沈線を

109　ページ　第79図　　２　→　３

〃　　〃　　３　→　２

112　ページ　４行　　ＳＩ１　→　ＳＩ１（第70図）

〃　　８行　　ＳＩ２（第70図）　→　ＳＩ２（第84図）

〃　　12行　　ＳＩ３（第70図）　→　ＳＩ３（第84図）

116　ページ　４行　　遺物は伴わない。　→　（削除）

119　ページ　７行　　遺物は伴なっていない。　→　遺物は伴っていない。

166　ページ　10行　　１　石皿（第130・131図１～４）

→　１　石皿（第130～132図１～６）

〃　　25行　　２　台石（第132図５～８）

→　２　台石（第132図７～８）

181　ページ　22行　　厚み3.0cm　→　厚み0.3cm

183　ページ　６行　　第141図199・200　→　（削除）

〃　　表７　打製石鏃　　Ｌ…６、Ｍ…４、Ｎ…１、Ｏ…１

186　ページ　第141図　石鏃のスケール　　20cm　→　10cm

194　ページ　11～17行　　191～197の最大厚

4.7→0.47、3.5→0.35、3.7→0.37、5.2→0.52、

2.5→0.25、3.5→0.35、3.0→0.3

〃　　19行　　のみ状石斧　→　のみ状石器

198　ページ　５行　　15・16の　→　14・15の

207～210ページ　第145図～第148図　竪穴住居変遷図　→　竪穴住居変遷図

田野町文化財調査報告書第11集

丸野（まるの）第2遺跡

県営農地保全整備事業七野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

宮崎県宮崎郡
田野町教育委員会

序

田野町は現在、113ケ所もの遺跡が確認されており、自然の豊さはもとより、歴史的環境にも恵まれた町であります。しかし、近年、開発行為等の増加に伴い、徐々に消滅しつつあります。教育委員会では文化財保護に努力しているところでありますが、工事の都合上、やむをえず消滅する部分については発掘調査による記録保存の措置をとっております。

このたび刊行しました「丸野第２遺跡」は県営農地保全整備事業に伴い実施した発掘調査の記録を報告するものです。

丸野第２遺跡は縄文時代早期から弥生時代後期にかけての複合遺跡で、宮崎県の歴史を解明する上でも、欠くことのできない貴重な資料が多数発掘されました。

本書の刊行を機に、皆様の埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただければと願うものであります。

発掘調査並びに本書作成に際し、並々ならぬご理解とご協力をたまわりました関係者各位には、ここに記して感謝の意を申し上げる次第であります。

平成２年３月３１日

田野町教育委員会
教育長　鍋　倉　政　信

例　　言

1　本書は田野町七野地区の県営農地保全整備事業に伴ない、昭和６１・６２年度に実施した丸野第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、田野町教育委員会が主体となり、一次調査を県文化課主任主事長津宗重が、二次調査を主任主事菅付和樹が担当した。

3　調査組織は次の通りである。

調査主体　田野町教育委員会
　　教育長　　種子田栄幸（昭和６１年度～平成元年度）
　　鍋倉　政信（平成元年度）
　　社会教育課長　妹尾　博（昭和６１年度）・川口昭七（昭和６２年度）
　　北尾光雄（平成元年度）
　　補佐兼
　　社会教育係長　新坂政光（昭和６１年度～６３年度）
　　社会教育係長　長友啓泰（平成元年度）
　　主任主事　後藤哲男（昭和６１年度～６３年度・調査事務担当）
　　櫛間泰子（平成元年度・調査事務担当）
調査員　県文化課主任主事　長津宗重（一次調査）
　　主任主事　菅付和樹（二次調査）
調査補助員　　寺師雄二（現山田町教育委員会）
調査協力　　県文化課　面高哲郎・永友良典・北郷泰道・近藤　協・谷口武範

4　遺物の復元・実測図作成・拓本・トレースは、[redacted]に協力を頂いた。

5　本書の執筆は、後藤・長津・菅付が分担し、文責については目次に明記している。

6　本書の編集は長津・菅付が担当した。

7　石器の石材は文化課主査宍戸　章の鑑定による。遺物の実測で県文化課主事長友郁子の協力を頂いた。

8　土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

第１節　発掘調査に至る経緯 ……（後藤）…… 1

第２節　丸野第２遺跡周辺の歴史的環境 ……（長津）…… 1

第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 6

第１節　調査区の設定と概要 ……（長津）…… 6

第２節　包含層の状態 ……（長津）…… 6

第３節　縄文時代早期の遺構と遺物 ……（長津）…… 13

第４節　縄文時代前期の遺構と遺物 ……（菅付）…… 13

第５節　縄文時代後期の遺構と遺物 …… 14

(1)　竪穴住居 ……（長津）…… 14

(2)　土　　坑 ……（長津・菅付）…… 94

(3)　集石遺構 ……（長津・菅付）…… 112

(4)　土器密集区 ……（菅付）…… 121

(5)　縄文土器 ……（菅付）…… 122

(6)　土器片錘 ……（菅付）…… 151

(7)　土器片加工円盤 ……（長津）…… 160

(8)　石　　器 ……（長津）…… 160

第６節　弥生時代の遺構と遺物 ……（長津）…… 195

(1)　竪穴住居 …… 195

(2)　弥生土器 …… 195

第Ⅲ章　ま　と　め ……（長津）…… 200

挿　図　目　次

第１図　丸野第２遺跡及び周辺遺跡分布図 …… 3
第２図　Ａ～Ｃ地区遺構分布図 …… 7～8
第３図　丸野第２遺跡周辺地形図 …… 9
第４図　Ａ地区第３トレンチ西壁土層断面図 …… 10
第５図　Ｅ地区Ａ－Ａ'地点土層断面図 …… 11～12
第６図　Ａ地区遺構分布図 …… 15～16
第７図　Ａ地区ＳＡ１・ＳＡ２実測図 …… 17
第８図　Ａ地区ＳＡ１・ＳＡ２遺物出土状況図 …… 18
第９図　Ａ地区ＳＡ１～ＳＡ３土層断面図 …… 20
第１０図　縄文土器実測図（１） …… 21
第１１図　縄文土器実測図（２） …… 22
第１２図　Ａ地区ＳＡ３・ＳＣ１・ＳＣ２実測図 …… 24
第１３図　Ａ地区ＳＡ３遺物出土状況図 …… 25
第１４図　縄文土器実測図（３） …… 26
第１５図　縄文土器実測図（４） …… 27
第１６図　縄文土器実測図（５） …… 28
第１７図　縄文土器実測図（６） …… 29
第１８図　縄文土器実測図（７） …… 30
第１９図　縄文土器実測図（８） …… 31
第２０図　Ｂ地区遺構分布図 …… 33～34
第２１図　Ｂ地区竪穴住居分布図 …… 35～36
第２２図　Ｂ地区ＳＡ１・ＳＡ４実測図 …… 37
第２３図　Ｂ地区ＳＡ２・ＳＡ３実測図 …… 39～40
第２４図　縄文土器実測図（９） …… 41
第２５図　Ｂ地区ＳＡ３遺物出土状況図 …… 43～44
第２６図　Ｂ地区ＳＡ３土層断面図 …… 45
第２７図　縄文土器実測図（10） …… 46
第２８図　縄文土器実測図（11） …… 47
第２９図　縄文土器実測図（12） …… 48
第３０図　縄文土器実測図（13） …… 49

第３１図　縄文土器実測図（14）…… 50
第３２図　Ｂ地区ＳＡ２・ＳＡ４遺物出土状況図 …… 51
第３３図　縄文土器実測図（15）…… 52
第３４図　Ｂ地区ＳＡ５・ＳＡ６実測図 …… 54
第３５図　Ｂ地区ＳＡ５遺物出土状況図 …… 55
第３６図　Ｂ地区ＳＡ４～ＳＡ６土層断面図 …… 56
第３７図　縄文土器実測図（16）…… 57
第３８図　縄文土器実測図（17）…… 58
第３９図　縄文土器実測図（18）…… 59
第４０図　縄文土器実測図（19）…… 60
第４１図　Ｂ地区ＳＡ６遺物出土状況図 …… 62
第４２図　縄文土器実測図（20）…… 63
第４３図　縄文土器実測図（21）…… 64
第４４図　縄文土器実測図（22）…… 65
第４５図　Ｂ地区ＳＡ７・ＳＡ９実測図…… 67
第４６図　Ｂ地区ＳＡ７遺物出土状況図…… 68
第４７図　Ｂ地区ＳＡ６～ＳＡ９土層断面図 …… 69
第４８図　縄文土器実測図（23）…… 70
第４９図　縄文土器実測図（24）…… 71
第５０図　Ｂ地区ＳＡ８・ＳＡ10実測図 …… 73
第５１図　Ｂ地区ＳＡ８遺物出土状況図 …… 74
第５２図　Ｂ地区ＳＡ６・ＳＡ８土層断面図 …… 75
第５３図　縄文土器実測図（25）…… 76
第５４図　縄文土器実測図（26）…… 77
第５５図　縄文土器実測図（27）…… 78
第５６図　Ｂ地区ＳＡ９，Ｃ地区ＳＡ２・ＳＡ３遺物出土状況図 …… 79
第５７図　縄文土器実測図（28）…… 80
第５８図　縄文土器実測図（29）…… 81
第５９図　Ｃ地区遺構分布図 …… 83～84
第６０図　Ｃ地区ＳＡ１実測図 …… 85
第６１図　Ｃ地区ＳＡ１遺物出土状況図 …… 86
第６２図　縄文土器実測図（30）…… 87

第６３図　縄文土器実測図（31）…… 88
第６４図　Ｃ地区ＳＡ２・ＳＡ３実測図 …… 90
第６５図　Ｃ地区ＳＡ２・ＳＡ３土層断面図、ＳＣ１実測図 …… 91
第６６図　縄文土器実測図（32） …… 92
第６７図　Ｃ地区ＳＡ４・ＳＡ５実測図 …… 93
第６８図　Ｃ地区ＳＡ６・ＳＡ７実測図 …… 95
第６９図　Ａ地区南東部遺構分布図 …… 97
第７０図　Ａ地区ＳＣ３・ＳＣ10・ＳＣ11・ＳＣ17・ＳＩ１実測図 …… 98
第７１図　Ａ地区ＳＣ12・ＳＣ13実測図 …… 99
第７２図　Ａ地区ＳＣ14実測図 …… 100
第７３図　Ａ地区ＳＣ15・ＳＣ16・ＳＣ18・ＳＣ19・ＳＣ20実測図 …… 102
第７４図　Ｂ地区ＳＣ１実測図、ＳＡ２土層断面図 …… 104
第７５図　Ｅ地区遺構配置図及び遺物分布図 …… 105～106
第７６図　Ｅ地区ＳＣ４遺物出土状況及び遺構実測図 …… 107
第７７図　Ｅ地区ＳＣ４出土遺物実測図 …… 108
第７８図　Ｅ地区ＳＣ５遺構実測図 …… 108
第７９図　Ｅ地区ＳＣ５出土遺物実測図 …… 109
第８０図　Ｅ地区ＳＣ８遺物出土状況及び遺構実測図 …… 109
第８１図　Ｅ地区ＳＣ８出土遺物実測図 …… 110
第８２図　Ｅ地区ＳＣ10遺構実測図 …… 111
第８３図　Ｅ地区ＳＣ10出土遺物実測図 …… 111
第８４図　Ａ地区ＳＣ21・ＳＩ２・ＳＩ３実測図 …… 113
第８５図　Ｅ地区ＳＩ１～６遺構実測図 …… 114
第８６図　Ｅ地区ＳＩ７～10・12遺構実測図 …… 115
第８７図　Ｅ地区ＳＩ11・13～16遺構実測図 …… 117
第８８図　Ｅ地区ＳＩ17～21遺構実測図 …… 118
第８９図　Ｅ地区ＳＩ22～25遺構実測図 …… 119
第９０図　Ｅ地区ＳＩ26～27遺構実測図 …… 120
第９１図　Ｅ地区集石遺構出土土器実測図 …… 120
第９２図　Ｅ地区土器密集区下部半完形土器出土状況実測図 …… 121
第９３図　縄文土器実測図（33）…… 123
第９４図　縄文土器実測図（34）…… 124

第　95図　縄文土器実測図（35）…… 125
第　96図　縄文土器実測図（36）…… 127
第　97図　縄文土器実測図（37）…… 128
第　98図　縄文土器実測図（38）…… 129
第　99図　縄文土器実測図（39）…… 130
第100図　縄文土器実測図（40）…… 132
第101図　縄文土器実測図（41）…… 133
第102図　縄文土器実測図（42）…… 134
第103図　縄文土器実測図（43）…… 135
第104図　縄文土器実測図（44）…… 136
第105図　縄文土器実測図（45）…… 137
第106図　縄文土器実測図（46）…… 138
第107図　縄文土器実測図（47）…… 139
第108図　縄文土器実測図（48）…… 141
第109図　縄文土器実測図（49）…… 142
第110図　縄文土器実測図（50）…… 143
第111図　縄文土器実測図（51）…… 144
第112図　縄文土器実測図（52）…… 145
第113図　縄文土器実測図（53）…… 146
第114図　縄文土器実測図（54）…… 147
第115図　縄文土器実測図（55）…… 148
第116図　縄文土器実測図（56）…… 149
第117図　縄文土器実測図（57）…… 150
第118図　縄文土器実測図（58）…… 152
第119図　縄文土器実測図（59）…… 153
第120図　縄文土器実測図（60）…… 154
第121図　縄文土器実測図（61）…… 155
第122図　縄文土器実測図（62）…… 156
第123図　縄文土器実測図（63）…… 157
第124図　縄文土器実測図（64）…… 158
第125図　縄文土器実測図（65）…… 159
第126図　土器片加工品実測図（1）…… 161

第１２７図　土器片加工品実測図（２）…… 162
第１２８図　土器片加工円盤分布図 …… 163
第１２９図　石器分布図 …… 169
第１３０図　石器実測図（１）…… 170
第１３１図　石器実測図（２）…… 171
第１３２図　石器実測図（３）…… 172
第１３３図　石器実測図（４）…… 174
第１３４図　石器実測図（５）…… 175
第１３５図　石器実測図（６）…… 177
第１３６図　石器実測図（７）…… 179
第１３７図　石器実測図（８）…… 180
第１３８図　石器実測図（９）…… 182
第１３９図　石器実測図（10）…… 184
第１４０図　石器実測図（11）…… 185
第１４１図　石器実測図（12）…… 186
第１４２図　Ａ地区弥生ＳＡ１実測図 …… 196
第１４３図　弥生ＳＡ１内ＳＨ１実測図、弥生ＳＡ１土層断面図、弥生遺物実測図… 197
第１４４図　弥生土器実測図 …… 199
第１４５図　竪穴住居変遷図（Ⅰ期） …… 207
第１４６図　竪穴住居変遷図（Ⅱ期） …… 208
第１４７図　竪穴住居変遷図（Ⅲ期） …… 209
第１４８図　竪穴住居変遷図（Ⅳ期） …… 210

表　　目　　次

表1　竪穴住居観察表 …… 103
表2　土器片錘計測表 …… 160
表3　土器片加工円盤計測表 …… 162
表4－1　土器片加工円盤重量表（1） …… 164
表4－2　土器片加工円盤重量表（2） …… 165
表5　土器片加工円盤重量グラフ …… 167～168
表6　石器組成表 …… 166
表7　石器石材組成表 …… 183
表8　石器観察表 …… 188
表9　丸野第2遺跡竪穴住居変遷表 …… 204
表10　縄文土器観察表 …… 215

図　版　目　次

図版 1　A地区遠景，A地区ＳＡ１ …… 247
図版 2　A地区ＳＡ２，A地区ＳＡ３遺物出土状況 …… 248
図版 3　A地区ＳＡ３，A地区ＳＣ15 …… 249
図版 4　A地区ＳＩ３，A地区ｉ－８グリッド遺物出土状況 …… 250
図版 5　A地区ＳＡ１（弥生），B地区竪穴住居検出状況 …… 251
図版 6　B地区竪穴住居群 …… 252
図版 7　B地区ＳＡ２，B地区ＳＡ３ …… 253
図版 8　B地区ＳＡ４，B地区ＳＡ５ …… 254
図版 9　B地区ＳＡ７，B地区ＳＡ８ …… 255
図版１０　B地区ＳＡ９，B地区ＳＡ10 …… 256
図版１１　C地区竪穴住居検出状況，C地区竪穴住居群 …… 257
図版１２　C地区ＳＡ１，C地区ＳＡ２・ＳＡ３ …… 258
図版１３　E地区遠景，E地区遺構検出状況，土器密集区出土状況，土器密集区土層断面，土器密集区包含層下部及び集石遺構の検出状況 …… 259
図版１４　土器密集区下部の半完形土器出土状況，集石遺構及び精製鉢形土器等の検出状況，精製鉢形土器及び市来式系土器の出土状況，土器密集区最下部の曽畑式土器出土状況，E地区ＳＣ４完掘状況 …… 260
図版１５　E地区ＳＣ５完掘状況，E地区ＳＣ８完掘状況，E地区ＳＣ10完掘状況，E地区中央部集石遺構検出状況，ＳＩ１・ＳＩ２検出状況，ＳＩ11・13検出状況，ＳＩ３検出状況 …… 261
図版１６　ＳＩ４・６・７検出状況，ＳＩ８・９・10検出状況，ＳＩ12検出状況，ＳＩ14検出状況，ＳＩ15検出状況 …… 262
図版１７　ＳＩ16検出状況，ＳＩ17検出状況，ＳＩ18検出状況，ＳＩ19検出状況，ＳＩ20検出状況，ＳＩ21検出状況 …… 263
図版１８　ＳＩ22検出状況，ＳＩ23検出状況，ＳＩ24検出状況，ＳＩ25検出状況，ＳＩ26検出状況，ＳＩ27検出状況 …… 264

図版１９　Ａ地区ＳＡ１出土土器，ＳＡ２出土土器，ＳＡ３出土土器 …… 265
図版２０　Ａ地区ＳＡ３出土土器 …… 266
図版２１　Ａ地区ＳＣ２出土土器，ＳＣ16出土土器，ＳＣ15出土土器，Ｂ地区ＳＡ１出土土器 …… 267
図版２２　Ｂ地区ＳＡ２出土土器，ＳＡ３出土土器 …… 268
図版２３　Ｂ地区ＳＡ３出土土器 …… 269
図版２４　Ｂ地区ＳＡ３出土土器，ＳＡ４出土土器，ＳＡ５出土土器 …… 270
図版２５　Ｂ地区ＳＡ５出土土器，ＳＡ６出土土器 …… 271
図版２６　Ｂ地区ＳＡ６出土土器，ＳＡ７出土土器 …… 272
図版２７　Ｂ地区ＳＡ７出土土器，ＳＡ８出土土器 …… 273
図版２８　Ｂ地区ＳＡ８出土土器，ＳＡ９出土土器，ＳＡ10・ＳＣ１出土土器 274
図版２９　Ｂ地区ＳＣ１出土土器，Ｃ地区ＳＡ１出土土器，ＳＡ２・ＳＡ３・ＳＡ４・ＳＡ５・ＳＡ６・ＳＡ７・ＳＣ１出土土器 …… 275
図版３０　Ａ地区ＳＣ15・ＳＣ17出土土器，Ｅ地区ＳＣ４・５・８・10・ＳＩ５・８・９・20・24出土土器，Ｅ地区ＳＣ８出土土器，縄文時代早期・前期土器 …… 276
図版３１　Ⅰ・Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅲａ・Ⅲｂ類土器，Ⅲｂ・Ⅲ類土器，Ⅲｂ類土器，Ⅳａ，Ⅳｂ類土器 …… 277
図版３２　Ⅴａ・Ⅴｂ類土器，Ⅴｂ・Ⅴｃ類土器，Ⅴｃ類土器，Ⅴ類土器 … 278
図版３３　Ⅵａ類土器（内面・外面），Ⅵｂ・Ⅵｃ・Ⅳａ・Ⅵｄ1・Ⅵｄ2・Ⅶａ類土器（内面・外面） …… 279
図版３４　Ⅶａ類土器，Ⅶａ・Ⅶｂ類土器，Ⅶａ類土器，Ⅶｂ類土器 …… 280
図版３５　Ⅶｂ類土器 …… 281
図版３６　Ⅶｂ類土器，Ⅶｂ・Ⅶｃ類土器，Ⅶｃ類土器 …… 282
図版３７　Ⅶｃ類土器 …… 283
図版３８　Ⅶｄ類土器 …… 284
図版３９　Ⅷａ類土器，Ⅷｂ類土器 …… 285
図版４０　Ⅶｂ類土器 …… 286
図版４１　Ⅷｂ類土器，Ⅸ類土器，Ⅸａ・Ⅸｂ類土器 …… 287

図版４２　Ⅸａ類土器，Ⅸｃ類土器，Ⅸ類土器，Ⅹ類土器 …… 288
図版４３　Ⅹ・Ⅺ類土器，Ⅺ類土器 …… 289
図版４４　Ⅶａ類土器，Ⅶｃ類土器，Ⅷａ類土器，Ⅷｂ類土器 …… 290
図版４５　Ⅺ類土器，脚台付浅鉢（外面・内面） …… 291
図版４６　脚台付浅鉢（脚台），脚台付浅鉢 …… 292
図版４７　底部 …… 293
図版４８　土器片錘・土器片加工円盤 …… 294
図版４９　石皿 …… 295
図版５０　台石，磨石，敲石，敲石，磨製石斧 …… 296
図版５１　磨製石斧，打ち欠き石錘，切目石錘，打製石鏃・石刀 …… 297
図版５２　石刀・有孔軽石加工品・スクレイパー・鑿状石器・円盤形石器・
黒燿石，石皿 …… 298
図版５３　石皿 …… 299
図版５４　台石，磨石 …… 300
図版５５　磨石，敲石，磨製石斧 …… 301
図版５６　磨製石斧，磨製石斧，鑿状石斧，磨石（住居出土），弥生時代
ＳＡ１出土磨製石鏃 …… 302

第Ⅰ章　序　説

第１節　発掘調査に至る経緯

宮崎県宮崎郡田野町において、昭和６１年度から、七野地区の県営農地保全事業が行われている。それに先立ち、事業区内の埋蔵文化財の発掘調査として昭和６０年１２月に田野町教育委員会が分布調査を行い遺跡の存在が確認され、更に県教育委員会文化課によって再確認が行われた。調査により事業区内に遺跡の存在が判明したため、宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護についての協議が行われたが、事業施行上、保存が困難な部分が多くとりわけＡ～Ｄ地区は、高台にあり、事業との並行発掘が困難だということで、昭和６１年度に記録保存の措置をとることになった。昭和６１年３月に地元との協議も終わり、同年５月６日～９月３０日まで一次調査が行われた。

また一次調査の北側斜面（農道を含む）の保護について、中部農林振興局と協議を行ったが、事業施行上、保存が困難な地区であり、高台のため農地保全事業との並行発掘が難しいということで、６２年度に記録保存の処置をとることとなった。６２年８月に地元との協議も終わり、同年８月２５日～１０月２９日まで二次調査が行われた。

第２節　丸野第２遺跡周辺の歴史的環境

田野町は宮崎県の中南部の宮崎市より南西約20*km*に位置する。田野盆地は南那珂山地に属し、標高120～140*m*の台地を形成している。田野盆地の北西部の山地が標高200～280*m*と低いのに対して、南部の山地は標高600*m*級である。盆地の北部の山地裾を清武川が南西方向から北東方向へ流れている。

丸野第２遺跡は田野盆地の北西部の南に伸びる台地の最高位（標高220*m*）に位置する。当遺跡の北北西約1.5*km*には丸野第１遺跡があり、縄文時代後・晩期の土器が出土している。丸野第２遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観する（第１図）。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては萩ケ瀬第２遺跡（大字三角寺字萩ケ瀬・旧名称萩ケ瀬遺跡）と町内でナイフ形石器(1)、沓掛で細石核(2)が表採されていたが、昭和５８・５９年に前平地区の芳ケ迫第１・３遺跡(3)（大字前平字芳ケ迫）、札ノ元遺跡(4)（大字前平字札ノ元）で調査が行われた。芳ケ迫第１遺跡では、２基の集石遺構間の径５*m*の範囲にナイフ形石器３・剥片尖頭器１・三稜尖頭器１・彫器１・掻器１などが出土している。芳ケ迫第３遺跡では石核２・剥片を伴った集石遺構１基と剥片尖頭器１が出土している。札ノ元遺跡では１基の集石遺構を中心として径３*m*程度の範囲で石核２・ナイフ形石器１・剥片などが出土している。

３遺跡とも姶良丹沢火山灰直上から旧石器が出土しており、札ノ元遺跡の焼石の熱ルミネッセンス法による年代測定法によれば20920年Ｂ．Ｐ．の年代が得られている。長薮遺跡(5)（大字七野字長薮）ではＡ地区南端のトレンチのⅥ層（褐色ローム層）から石核・剥片などが約80点出土している。

縄　文　時　代

縄文時代の早期の遺跡としては、貝殻条痕文土器の前畑第４遺跡(6)（大字八重字前田・旧名称前畑遺跡）が知られていたが、前平遺跡群の芳ケ迫第１・３遺跡・札ノ元遺跡・又五郎遺跡(7)（大字前平字又五郎）、長薮遺跡、権現谷遺跡(8)（大字八重字権現谷・旧名称八重地区遺跡）で発掘調査が行われた。その結果、芳ケ迫第１遺跡で集石遺構54基、同第３遺跡で集石遺構104基、札ノ元遺跡で集石遺構84基・竪穴住居２軒検出された。札ノ元遺跡の竪穴住居は２ｍ×３ｍの隅丸長方形プランと2.5ｍ×2.5ｍの隅丸方形プランであり、小型の竪穴住居である。又五郎遺跡でも竪穴住居が検出されており、早期の竪穴住居としては県内に検出例がないので注目される。また集石遺構は計242基も調査されており、県内では最大規模であり、タイプも多種多様である。前平地区遺跡群の４遺跡とも押型文土器が出土しているが、吉田式・前平式土器は芳ケ迫第３遺跡では全く出土していない。また手向山式・平栫式土器は札ノ元遺跡だけで、塞ノ神式土器は又五郎遺跡だけで出土している。以上のように遺跡間の距離が180～300ｍと近距離でありながらそれぞれ土器群の様相を異にしている。石器の組成としては打製石鏃の割合が高く、特に芳ケ迫第１遺跡からは磨製の環状石斧が出土しており、発掘調査例としては小山尻東遺跡(9)（清武町）に次いで２例目である。長薮遺跡では山形文の押型文土器が出土している。権現谷遺跡では山形と楕円形の押型文土器・貝殻条痕文土器・撚糸文土器・前平式土器が出土している。

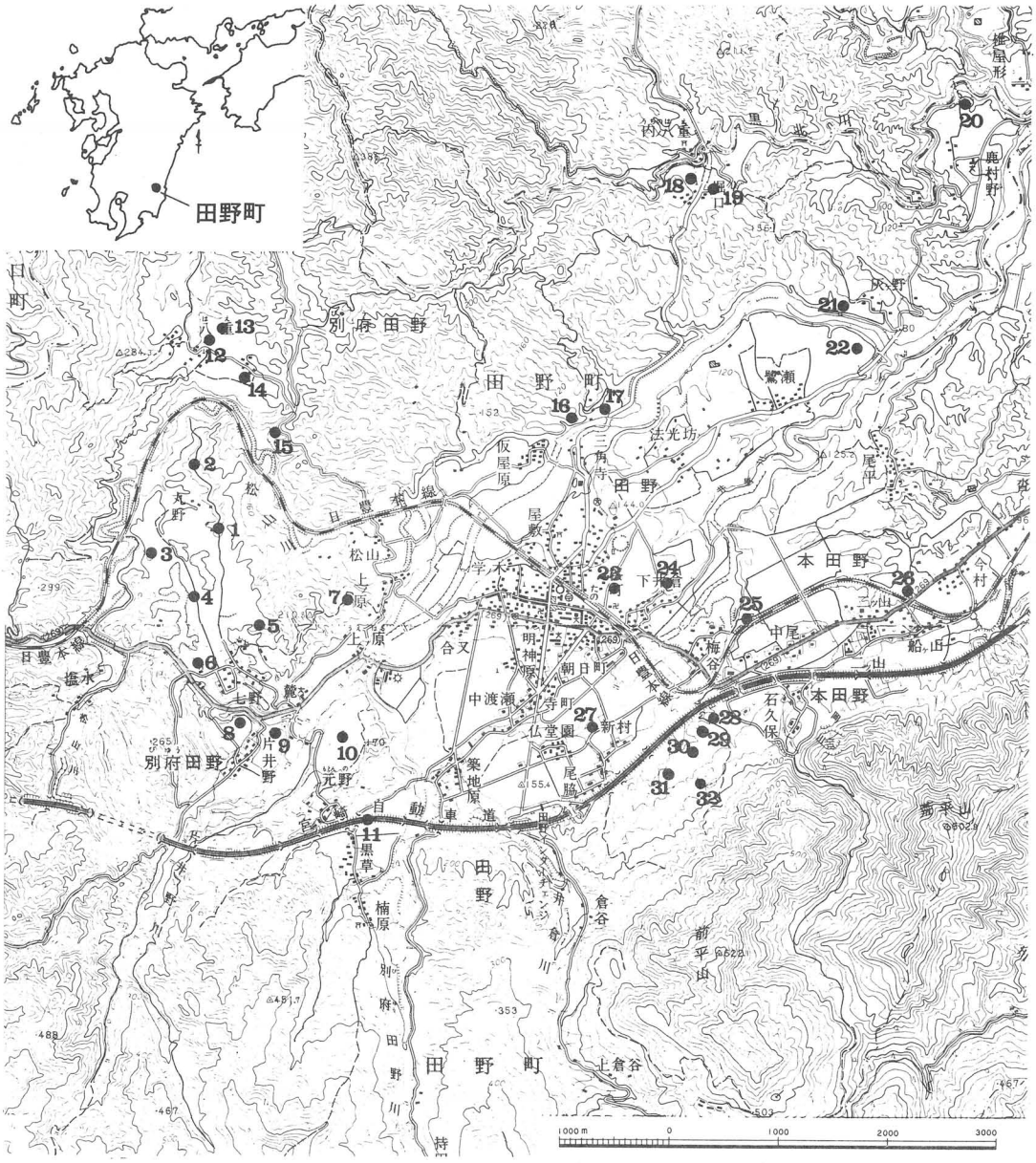
前期の遺跡としては、丸野第２遺跡・長薮遺跡・権現谷遺跡が調査され、曽畑式土器が出土した。長薮遺跡では100基の土坑が検出され、共伴土器は全くなかったが、埋土の御池ボラと遺構検出状況から前期を中心とする時期に比定されている。権現谷遺跡でも土坑が検出されており、そのうちのＳＫ53は御池ボラが埋土に含まれ、曽畑式土器が出土している。

中期は県内全域的に非常に少なく、当地域においても発見されていない。

後期になると、遺跡が急激に増え、後期初頭～中頃の指宿式・綾式・下弓田式などが出土した青木遺跡(10)（大字新村字青木）では、配石遺構や貯蔵穴が検出された。また黒草第１遺跡(11)（大字黒草字黒草・旧名称黒草遺跡）でも同時期の土器が出土している。

弥　生　時　代

弥生時代の遺跡としては、黒草第１遺跡で終末期の土器が出土しているだけであったが、権現谷第１遺跡と当遺跡が調査された。権現谷第１遺跡では３軒の後期初頭の竪穴住居が検出され、そのうちのＳＢ45は長さ4.7ｍ、幅3.0ｍの規模で長方形プランであり、壁際に柱穴



第１図　丸野第２遺跡及び周辺遺跡分布図

1．**丸野第２遺跡**	9．ヒダカン城址	17．萩ヶ瀬遺跡	25．梅谷城址
2．丸野第１遺跡	10．高野原地下式横穴墓	18．堀口Ａ遺跡	26．船ヶ山遺跡
3．長薮遺跡	11．黒草遺跡	19．堀口Ｂ遺跡	27．青木遺跡
4．七野第１遺跡	12．八重Ｂ遺跡	20．ズクノ山遺跡	28．又五郎遺跡
5．七野第２遺跡	13．八重Ｃ遺跡	21．灰ヶ野地下式横穴墓	29．札ノ元遺跡
6．七野第３遺跡	14．八重Ａ遺跡	22．灰ヶ野遺跡	30．芳ヶ迫第１遺跡
7．天建神社址	15．前畑遺跡	23．桜町遺跡	31．芳ヶ迫第３遺跡
8．片井野遺跡	16．田野城址	24．井倉洞穴遺跡	32．芳ヶ迫第２遺跡

を持つ2本柱である。ＳＢ45からはくの字口縁部の下位に一条の刻目突帯を有する中溝式の甕形土器が出土している。今回の調査で後期前半の方形プランの竪穴住居が検出され、石器製作の工房の性格が想定されるのは注目される。

古　墳　時　代

古墳時代の前方後円墳も円墳も確認されておらず、集落も調査されていない。しかし、地下式横穴墓は灰ケ野[12]（大字灰ケ野字灰ケ野・１基）と高野原[13]（大字元野字高野原・２基）が調査されている。灰ケ野地下式横穴墓群は清武川の支流である松山川と井倉川が合流する地点を南に臨む標高約90ｍの丘陵の舌状部に立地し、昭和４７年に畑の整地作業中に２基発見された。１号地下式横穴墓は平入り隅丸方形プランで、アーチ型の天井である。人骨は１体で、副葬品は蛇行剣１・鉄斧１・鉄鏃10・刀子１である。２号地下式横穴墓は羨門石閉塞の平入り不定形プランである。人骨は痕跡を残す程度で、副葬品は刀子１・鉄鏃８である。１号地下式横穴墓と２号地下式横穴墓との距離は約10ｍである。高野原地下式横穴墓群は片井野川と井倉川に挟まれた標高約170ｍの舌状台地東端に立地し、昭和５４年に耕作中に１基発見された。１号地下式横穴墓は羨門石閉塞の平入り長方形プランである。副葬品としては鹿角製刀装具付き剣１のみである。

当地域の地下式横穴墓の特徴は平入り長方形プランで、竪坑は長方形である。６世紀代の地下式横穴墓である。

歴　史　時　代

平安時代の遺跡としては布痕土器が表採された合子ケ谷第１遺跡（大字合子ケ谷・旧名称合子ケ谷遺跡）が知られているのみである。中世の遺跡としては遺構は検出されなかったが、東播系の片口鉢・備前焼きの甕を出土した芳ケ迫第２遺跡[14]がある。

以上のように当地域は旧石器時代から縄文時代後期に多くの遺跡が存在すると共に、各時代各時期のうねりを受けながら独自の対応を行っている。

註

(1)　二宮忠司　「九州におけるナイフ形石器」『考古学論叢』１　1973

(2)　茂山　護・大野寅夫　「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』３号
　　宮崎考古学会　1977

(3)　面高哲郎・寺師雄二　「芳ケ迫第１～３遺跡」『田野町文化財調査報告書』第３集
　　田野町教育委員会　1986

(4)　寺師雄二　「札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第３集
　　田野町教育委員会　1986

(5)　森田浩史　「長薮遺跡」『田野町文化財調査報告書』第６集
　　田野町教育委員会　1989

(6) 茂山　護　「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」『宮崎考古』第４号
宮崎考古学会　1978

(7) 昭和５８年度　田野町教育委員会が調査を行った。伊東　但氏の御教示による。

(8) 森田浩史　「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第７集
田野町教育委員会　1989

(9) 近藤　協　「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第３集
宮崎県教育委員会　1985

(10) 鈴木重治　「宮崎郡田野町青木遺跡の調査」『日本考古学協会第28回大会発表要旨』
日本考古学協会　1963

(11) 岩永哲夫・北郷泰道　「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3)
宮崎県教育委員会　1979

(12) 田中　茂　「宮崎郡田野町灰ケ野地下式横穴」『宮崎県総合博物館研究紀要』１
宮崎県総合博物館　1972

石川恒太郎「田野町灰ケ野地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第17集
宮崎県教育委員会　1973

(13) 日高正晴　「高野原地下式１号墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集
宮崎県教育委員会　1981

(14) 註８の文献より

第Ⅱ章　遺構と遺物

第1節　調査区の設定と概要

丸野第２遺跡（田野町赤松乙）は、宮崎市の南西約20㎞にある田野盆地の北西部の南に伸びる標高220ｍの台地上に位置する（第３図）。当遺跡の北北西約1.5㎞には周知の遺跡である丸野遺跡があり、縄文時代後・晩期の土器が出土している。

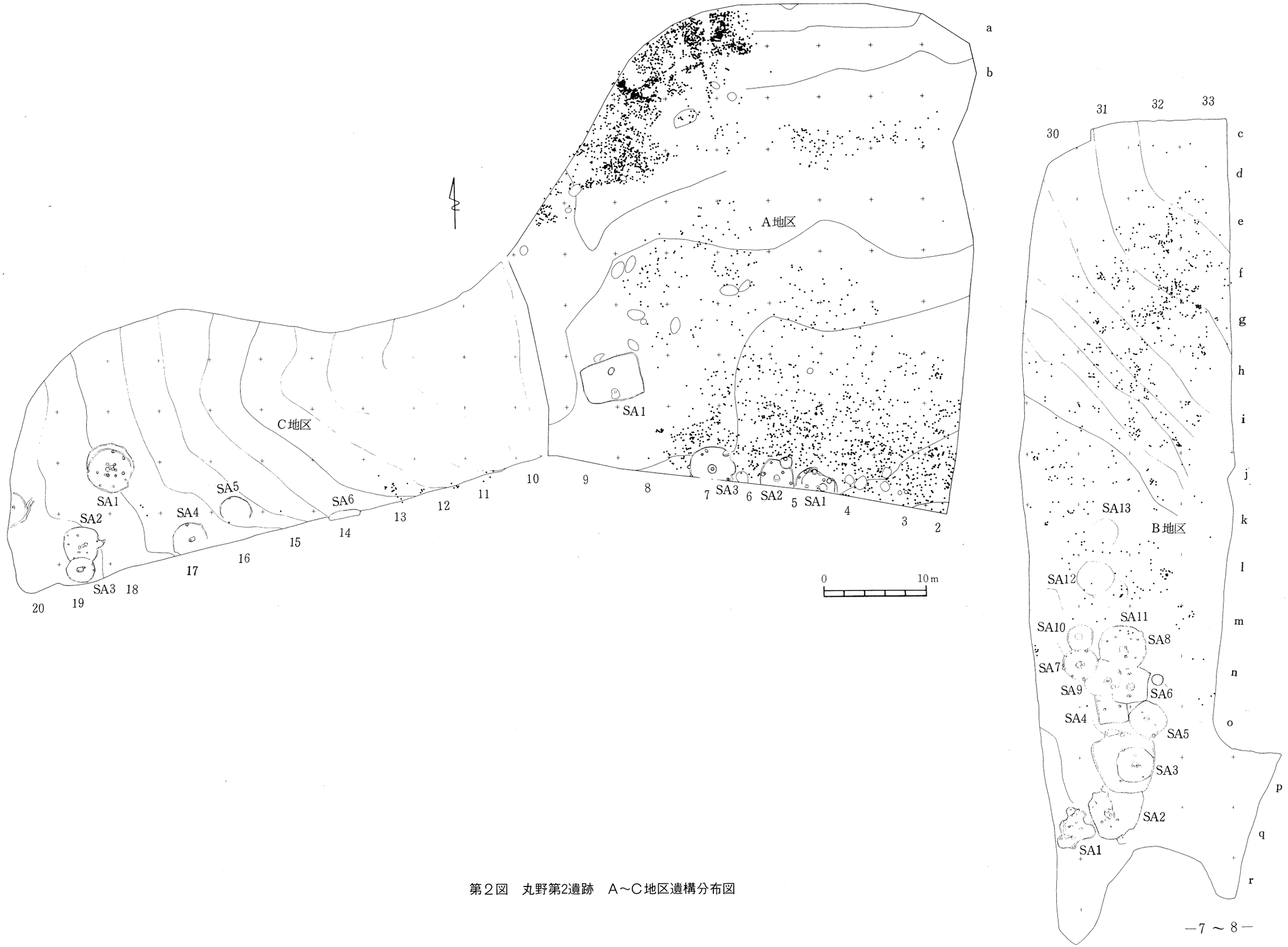
七野地区の県営農地保全整備事業に伴って一次調査が昭和６１年５月６日～９月３０日まで5,600㎡の調査が田野町教育委員会によって行われた。南北方向に５ｍ方眼のグリッドを設定し、調査した順番で東からＢ・Ａ・Ｃ地区とした。縄文早期の土器としてはＡ地区で口縁部直下にヘラ状施文具による押圧文を有する貝殻条痕文土器が、Ｂ地区で山形押型文土器が若干出土している。縄文時代後期の竪穴住居がＡ地区で４軒、Ｂ地区で15軒、Ｃ地区で７軒検出された。また、Ａ地区の北端部の土器密集区のＤ地区から同時期の土器がかなりの量出土し、南東部ではピット群と土坑群が検出された。縄文時代後期の土器群としては指宿式・松山式・市来式・草野式・小池原上層式・鐘崎式などが出土し、石器としては磨製石斧・切目石錘・打製石鏃・石刀などが出土した（第２図）。

昭和６２年８月２５日～１０月２９日まで行われた二次調査では1,060㎡が調査された（Ｅ地区）。一次調査のＤ地区の北側に続く畑地の土手と農道になっている部分を中心に多量の土器を集中して包含する層と、その北西側下位において焼礫を集積あるいは配石した遺構が27基検出された。そのほかに、土器包含層の下層や斜面側から土坑も検出している。遺物としては、縄文時代後期前葉を中心に一部中期に遡る可能性のある土器や前期、弥生時代中期後半の土器などが出土している。また一次調査と同様に石器の出土量は極端に少ない。土器片転用加工品では円盤が多く出土し、土器片錘はわずかに１点確認したにすぎない。前期の曽畑式土器も出土している。

第2節　包含層の状態

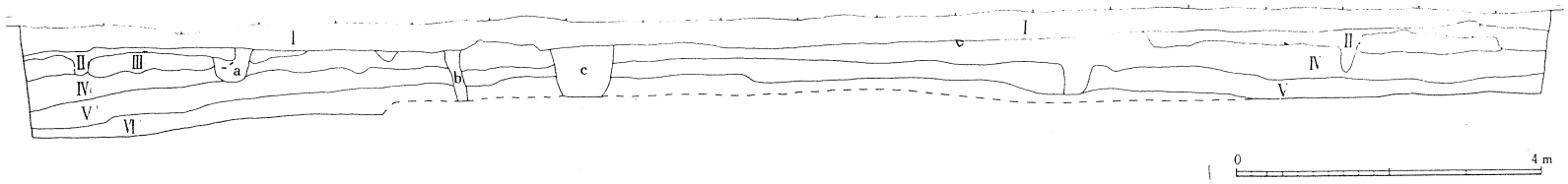
当遺跡では、アカホヤ層はＡ地区の南端部、Ｂ地区の南半分、Ｃ地区の南半分、Ｅ地区の北西斜面の一部で残存していた。

当遺跡の基本層序は、Ⅰ層が暗褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　3/4・耕作土・粘性が弱い）、Ⅱ層が黒褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　2/2・Ⅰ層より粘性があり、固くしまっている。）、Ⅲ層が黄褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　5/6・アカホヤ層）、Ⅳ層が褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　4/3・粘性が強く、１～３㎝の小礫をわずかに含む）、Ⅴ層が黄褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　5/8・粘性は中程度、３～５㎝の細礫を多量に含む）、Ⅵ層が暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ



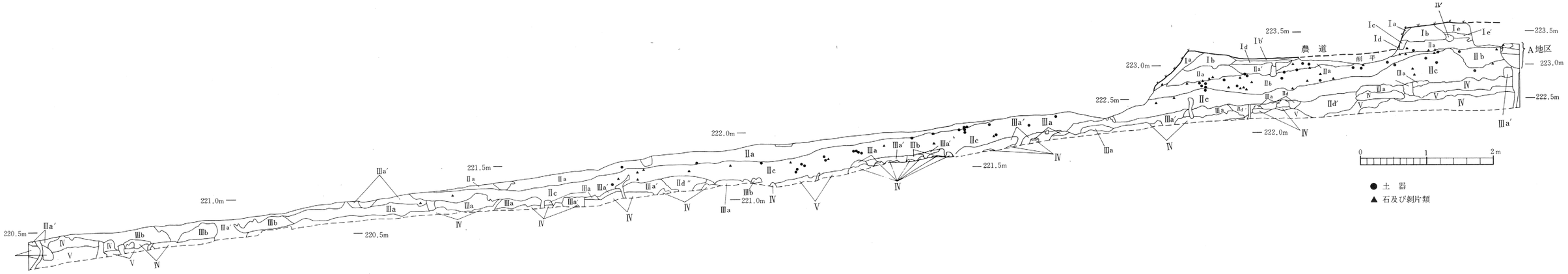
第２図　丸野第2遺跡　A～C地区遺構分布図

第３図　丸野第２遺跡周辺地形図



第４図　Ａ地区第３トレンチ西壁土層断面図

Ⅰ	暗褐色土層（7.5YR7/8）	黄橙色（7.5YR7/8）のパミスを多く含み粘性は弱くフカフカしている。 耕作土
Ⅱ	黒褐色土層（7.5YR2/2）	Ⅰ層より粘性があり固くしまっている。パミスを僅かに含み，3～5mmの小礫も含む。また，土器も包含している。 暗褐色の粘土粒を含む。 炭化粒を僅かに含む。
Ⅲ	黄褐色土層（10YR5/6）	黄橙色（7.5YR7/8）のパミスを多量に含む。アカホヤ層に比定される。 粘性弱く，乾燥すると脆くくずれる。
Ⅳ	褐色土層　（7.5YR4/3）	粘性強く，乾燥すると固くしまる。1～3cm程度の小礫を僅かに含む。土器は包含せず。
Ⅴ	黄褐色土層（10YR5/8）	粘性は中程度，3～5mmの細礫を多量に含む。Ⅳ層よりしまりが強い。土器は包含せず。手ざわりがザラザラしている。
Ⅵ	明黄褐色土層（10YR6/6）	粘性強く，ヌメリがある。数mmの細砂粒を多く含む。土器は包含せず。
a	明褐色土（7.5YR5/6）	粘性強く固くしまる。1～3cmの小礫を含み白色粒子が多い。黄橙色のブロックを僅かに含み細粒を多く含む。 後期土器を包含する。炭化物も僅かに含む。
b	にぶい黄褐色土（10YR5/3）	黄橙色の細粒を僅かに含むがブロックは含まない。粘性強いが乾燥すると脆い。土器は出土せず。
c	褐色土（10YR4/4）	粘性は中程度で固くしまる。黄褐色のブロック及び細粒を多く含む。3～5mmの細礫も多い。後期の土器が出土。



第5図　E地区　A－A′地点土層断面図

0 層…農道。砂利を含む暗黄褐色砂質土層。パサパサしている。
Ⅰa層…表土。斜面にのみ残る。黒褐色砂質土。パサパサしている。Ⅰbよりやや明るく粘性は弱い。
Ⅰb層…表土。黒褐色砂質土。やや粘性をおび、1mm前後の黒っぽい砂粒を含む。最も黒い。
Ⅰb′層…耕作(または撹乱)土。ⅠbとⅠé の混在した層。Ⅰe′よりやや黒っぽい。
Ⅰc層…表土。黒褐色シルト質土。粘りがありやや締まっている。Ⅰaより黒くⅠbより明るい。
Ⅰd層…農道。暗褐色砂質土。粘性はないがかたく締まっていて白い砂粒が見られる。0層より黒っぽい。
Ⅰe層…耕作土。黒褐色砂質土。やや粘性をおび砂粒が多い。Ⅰa、Ⅰbより明るい。
Ⅰé層…撹乱土。前年度の発掘による撹乱土(表土)が残ったものと思われ、暗黄褐色の小ブロックや砂粒が多い。やや明るい黒褐色砂質土。Ⅰeとほぼ同色。

Ⅱa層…0層に近い色でやや暗い黄褐色砂質土。粘性をおびる。Ⅱb層より少ないが遺物や山礫を包含する。
Ⅱa′層…Ⅱa層とほぼ同色。シルト質土層でやや暗褐色の撹乱が見られる。土器の色に近い赤褐色の1mm前後の粒が見られるが、土器片粒かアカホヤ粒かは不明。堅く締まる。Ⅰd同様に水の作用を受けているものと思われ、農道の轍の跡かもしれない。
Ⅱb層…暗褐色シルト質土。主包含層。多くの遺物や礫を含む。Ⅰeより明るくⅡaより暗い。Ⅱcよりも農道の影響を受けているものと思われる。遺物のうち比較的大きは破片はこの層の下部かⅡcの上部で出土している。
Ⅱc層…黒褐色シルト質土。強い粘性あり。この層の上部にまで遺物が包含されている。下部にはアカホヤから浮いた状態かもしくは接して配石遺構が検出される。Ⅱbよりやや黒っぽい。
比較的安定した層と思われる。
Ⅱd層…暗褐色シルト質土。遺物を包含し、アカホヤに似て粒のきめが細かい。
Ⅱd′層…黒褐色シルト質土。白色や黄色の細かな粒が見られる。堅く締まる。Ⅱcの色に近い。
Ⅱd″層…暗褐色シルト質土。1mm以下の黄色っぽい細砂粒を含む。Ⅱd′よりやや明るい。

Ⅲ 層…　黄褐色砂質土層(アカホヤ層)。標高の高い方のアカホヤはアカホヤ層の下部に近いと思われ、かなり撹乱(風化か)の多い乱れた層(＝Ⅲa)である。下部はやや粒が大きくなり、パミスとⅣ層のブロックとが混じる。また、比較的純粋な黄褐色破質土層も残っており(＝Ⅲb)、これはⅢaより明るい黄色である。Ⅲ層全体としては傾斜面上に堆積した状況を残している。
Ⅲa′層…暗褐色砂質土。Ⅱdに色が近い。Ⅲaがさらに風化されたものと思われる。ⅡdとⅢaはアカホヤ層に交互に割り込むことから、形成過程を同じくするものと思われる。
Ⅳ 層…暗褐色砂質土。弱い粘性あり。灰色をおびた堅い砂質のブロックを含む。自然層と思われる。
Ⅴ 層…暗褐色色シルト質土。自然層。
Ⅵ 層…暗黄褐色シルト土質。強粘性。Ⅴ層より明るく柔らかい。自然層。

6/6・粘性が強く、数mmの細砂粒を多く含む）である（第４図）。

なお縄文時代後期の土器包含層はⅡ層である。

第３節　縄文時代早期の遺構と遺物

アカホヤ層まで削平されたＡ地区の北側で縄文早期の土器、Ｂ地区北側で山形押型文土器が出土した。遺構としてはＡ地区で集石遺構が１基検出された。アカホヤ層が残存していたＡ～Ｃ地区の南側は、作物作付の関係で早期の包含層の調査は残念ながら断念せざるを得なかった。

(1)　集石遺構

ＳＩ１（第70図）

ＳＩ１は長径70cm、短径65cm、深さ14cmの不定形プランの土坑に、長さ65cm、幅45cmの範囲に小礫が集石している。

(2)　縄文土器（第93図）

Ａ地区から前平式土器が、Ｂ地区から押型文土器と撚糸文土器が出土している。

ℓ－32出土の727は一つの山形の幅が1.1cm、高さが0.4cmの山形押型文土器である。

ｂ－７出土の728とｉ－５出土の729は口縁部の外面にヘラ状施文具で２段に押圧或は刺突し、その下位に貝殻条痕文を施した前平式土器である。土器密集区出土の730は口唇部に刻みを施している。

Ｅ地区出土の731は口縁部が斜め上方に伸び、内外面を横・斜目方向の粗い貝殻条痕を施している。口径20.0cm。

ℓ－31出土の732とｊ－30出土の733は２～３条の沈線の下位に撚糸文を施しており、塞ノ神式土器である。

第４節　縄文時代前期の遺構と遺物

この時期の確実な遺構は検出されていないが、Ｅ地区において曽畑式土器片が25点出土している。これらの殆どは、土器密集区包含層の北西よりの最下部において出土したものである。そのほか、試掘や表土除去の際に、二次堆積のアカホヤ層の中や表土の中からも出土している。このうち、口縁部から胴部下半まで接合できた734など数点を図化した（第93図734～737）。

734は、土器密集区包含層の最下部から出土した。ほかの土器片も、殆どこれと同一個体と思われる。ただ、735は、口縁部外面の２条の横方向の沈線文の下にも短沈線文が施されている点、734とは別個体である可能性がある。736～737は、あまり曲面をなさないことやほかの土器片と文様が異なることから、ここでは底部として掲載した。これらの土器には、九州北部で通常みられる滑石は、全く含まれない。また、734のように口縁部と胴部では沈線文の太さや深さに違いが見られるなど、全体的に施文の粗雑さが目立っている。

第５節　縄文時代後期の遺構と遺物

後期の遺構はＡ～Ｃ地区の南側に竪穴住居がＡ地区で４軒、Ｂ地区で15軒、Ｃ地区で７軒の計26軒検出され、特にＢ地区では方形プランと円形プランが切りあっているのは注目される。Ａ地区の北端部のａ・ｂ－６～９、ｃ・ｄ－８・９、ｅ－９の土器密集区から同時期の土器が多量に出土し、南東部ではピット群と土坑群が検出された。土器密集区の北側斜面のＥ地区からは27基の集石遺構が検出されている。縄文後期の土器群としては指宿式・松山式・市来式・小池原上層式・鐘崎式・草野式などが、石器としては磨製石斧・石錘・打製石鏃・石皿・軽石製石製品・石刀などが出土している。遺構出土の土器分類は後述する(5)縄文土器の分類による。

(1)　竪穴住居

竪穴住居は、Ａ地区のｊ－４～７に４軒、Ｂ地区のℓ～ｑ－30～32に17軒、Ｃ地区のｉ～ℓ－14～21に８軒分布しており、南部は削平されているが、３グループに分かれ、ドーナッツ状に分布していた可能性もある。Ｃ地区がすべて円形プランであるのに対してＡ地区とＢ地区は方形プランと円形プランが混在している。

Ａ地区（第６図）

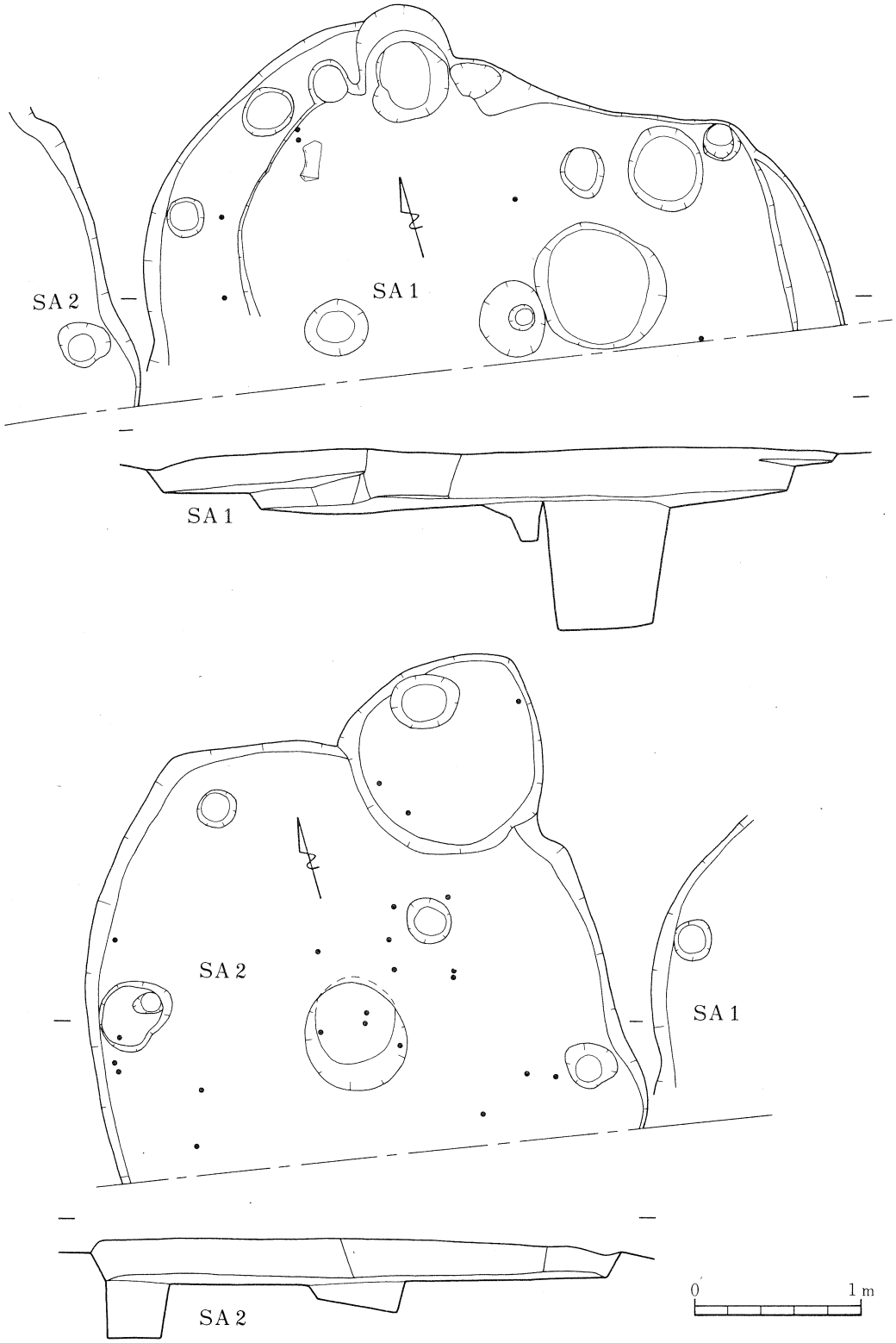
Ａ地区の竪穴住居はｊ－４～７区に４軒分布しており、ＳＡ１は建て替えを行っている。住居群の南側は宅地で削平されている。

ＳＡ１（第７～10図）

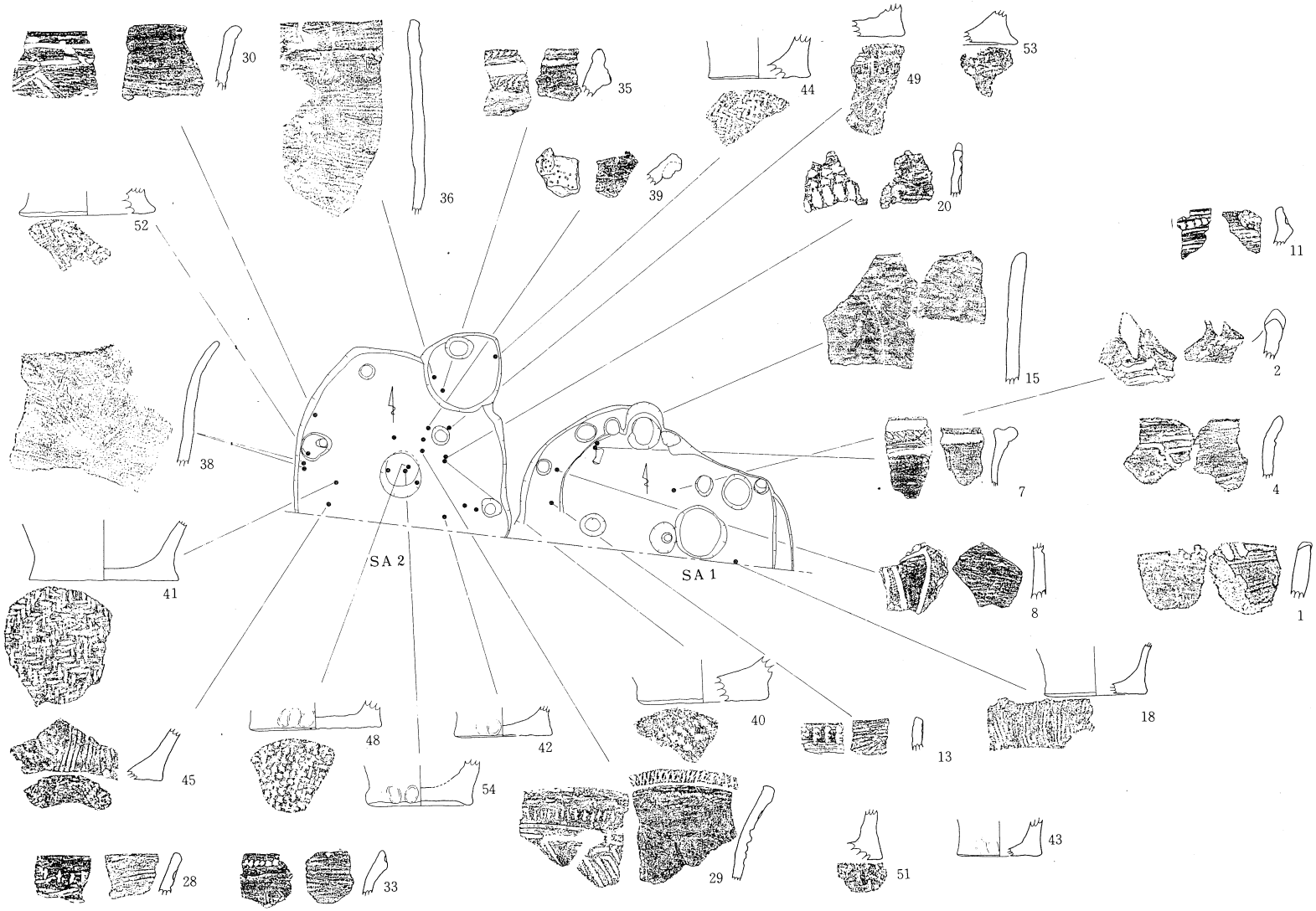
ＳＡ１はｊ－４・５に位置し、南側が削平されている。この住居は土層断面によれば建て替えを行っている。焼土が西側の壁際にある。古段階の住居（ＳＡ１Ａ）は長径330*cm*、短径185*cm*＋α、深さ28*cm*の隅丸方形プランである。この住居の真ん中には長径45*cm*、短径40*cm*、深さ24*cm*のピットがあり、このピットを中心として西に115*cm*離れて、長径40*cm*、短径35*cm*、深さ24*cm*のピットがある。この住居は北部を長径70*cm*、短径55*cm*、深さ84*cm*の土坑が、真ん中のピットの東の際に長径80*cm*、短径70*cm*、深さ78*cm*の土坑が切っている。新段階の住居（ＳＡ１Ｂ）は長径415*cm*、短径210*cm*＋α、深さ18*cm*の円形プランである。壁際に径25*cm*、深さ30*cm*のピットが３個巡る。ＳＡ１の埋土は２～５*cm*大のアカホヤブロックを含む暗褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　3/3）である。

遺物の出土量は非常に少ない。２は波状口縁の波頂部に刻みを有し、平行沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。４は口縁部がやや外反する平口縁のＶｃ類である。６・７は口縁端部が肥厚し、口唇部に縄文と沈線を施しており、Ⅸａ類に相当する。５は２本の沈線文間の幅が狭く、縄文帯の幅も狭く、Ⅸｂ類に相当する。９・10は沈線文間に貝殻刺突文を施している。11は口縁部文様帯幅の比較的狭いもので、一条のＤ字形連続刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。13は口縁部に縦方向に貝殻刺突文を施しており、Ⅱｂ類かＶａ類であ

第６図　Ａ地区遺構分布図



第 7 図　A 地 区 SA1・SA2 実 測 図



第8図　A 地 区 SA1・SA2 遺 物 出 土 状 況 図

る。15は無文土器で、口縁部がほぼ真直に伸びており、内外面ともナデを施している。底部は3点出土しているが、網代底はない。底部の形態は18・19のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの2点、17のように底面から真直に立ち上がるもの1点である。18は底径が8.4cmである。

土器片加工円盤は31.8gが1点出土している。

ＳＡ１Ａの時期は２のＶｃ類の時期で、Ⅱｂ期である。磨消縄文のⅨ類もこれに伴う。ＳＡ１Ｂは11のⅦａ類の時期で、Ⅲａ期である。

ＳＡ２（第７～11・14図）

ＳＡ２はｊ－５・６に位置し、長径320cm、短径250cm＋α、深さ21cmの隅丸方形プランである。南側が削平されている。この住居の真ん中には径60cm、深さ20cmのピットがあり、このピットを中心として東西に140cmと120cm離れて、径35cm、深さ50cmの２本のピットが壁際に配置されている。住居の埋土は２～５cm大のアカホヤブロックを含む暗褐色土層（Ｈｕｅ 7.5ＹＲ　3/3）である。北東部は長径130cm、短径125cmの土坑に切られている。

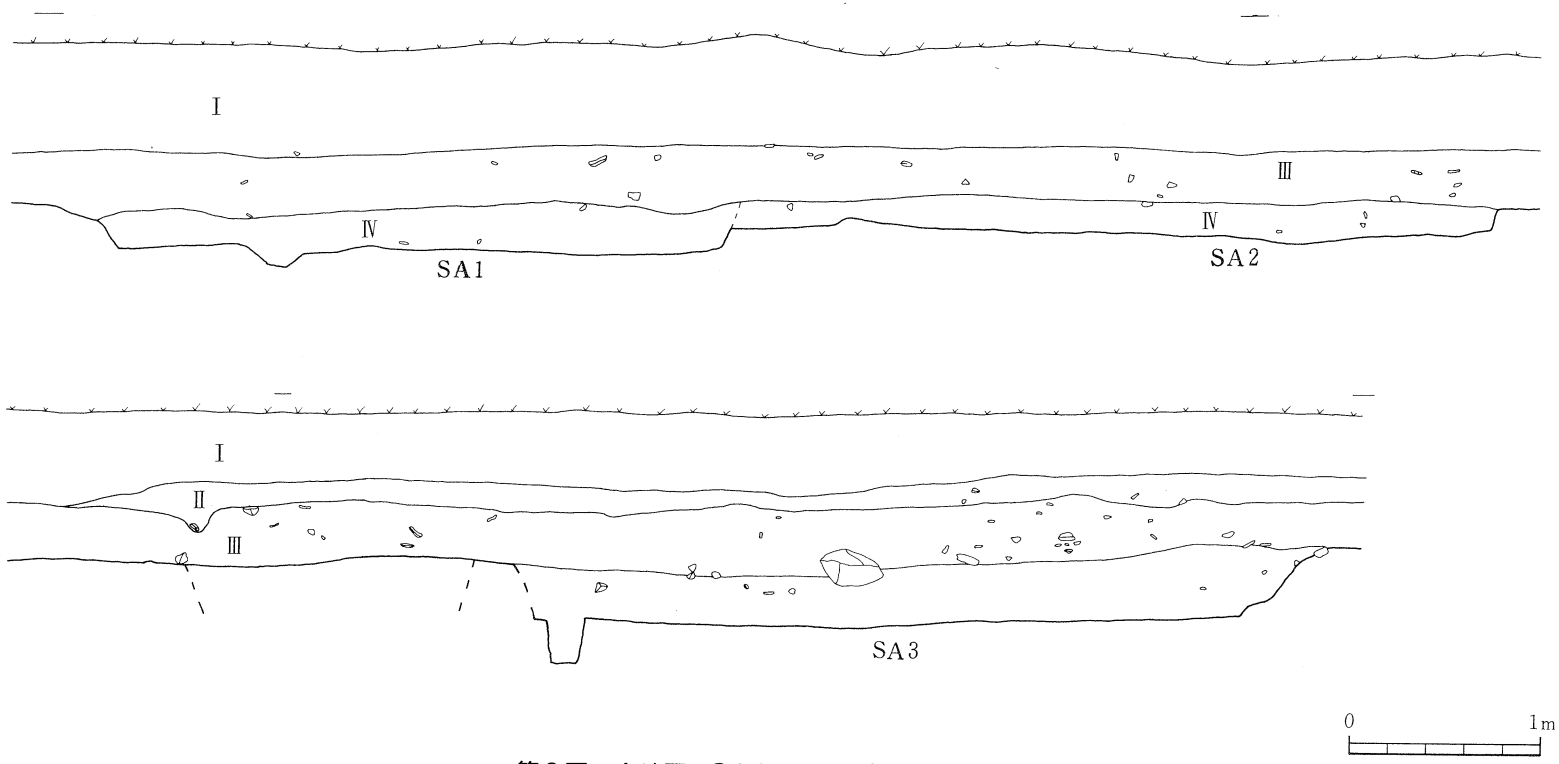
遺物は住居の中央部と西端部に集中して出土している。20は口唇部に指で押えたような押圧刻みを持ち、口縁部は竹管状工具による太めの連続刺突文、その下に一条の沈線を施しており、Ⅱａ類に相当する。21は波状口縁の波頂部に５個の刻みを入れている。23は口唇部に斜め方向の刻みを入れている。29は口縁部が緩やかに外反し、口縁部上部に連続刺突文を、その下に沈線文を施すと共に、口唇部にＸ字状の刻みを施しており、Ｖｂ類に相当する。30は口唇部で若干外反し、沈線文だけを施しており、Ｖｃ類に相当する。33は口縁部文様帯幅の比較的狭いもので、一条のＤ字形連続刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。39は口縁部外面にこぶ状の突起があり、外面全面に刺突文を施している。38は無文土器で口縁部が途中で緩やかに外反している。13点の底部のうち10点が網代底である。底部の形態は41のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているものが８点、45のように底面から真直に立ち上がるものが４点、54のように明瞭な上げ底が１点である。底径は6.8cmが１点、7.9cmが１点、8.6cmが１点、10.7～10.9cmが３点、12.2cmが１点である。

土器片加工円盤は6.0～39.8gが22点出土している。

石器としては磨石２点（81・82）が出土している。

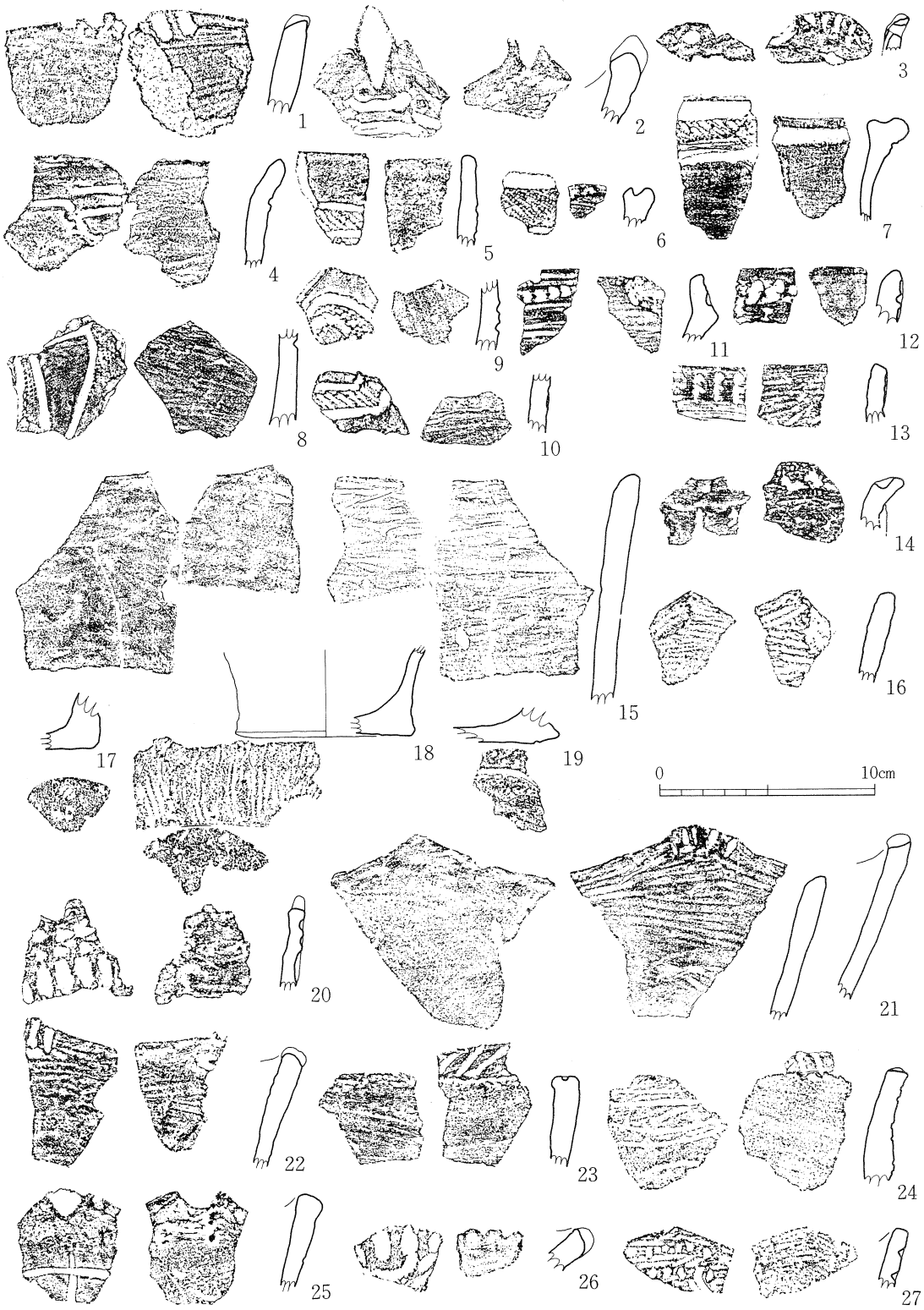
この住居を切っている土坑からは35・36・44が出土している。35は口縁部の断面が三角形で、一条の沈線の上下にヘラと貝殻腹縁による刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。36は無文の「く」字状口縁部で内外面とも貝殻条痕を施し、Ⅶｂ類である。44は底径8.3cmの網代底である。

ＳＡ２の時期は29のＶｂ類の時期で、Ⅱａ期である。土坑の時期は35のⅦｂ類の時期で、Ⅲａ期である。

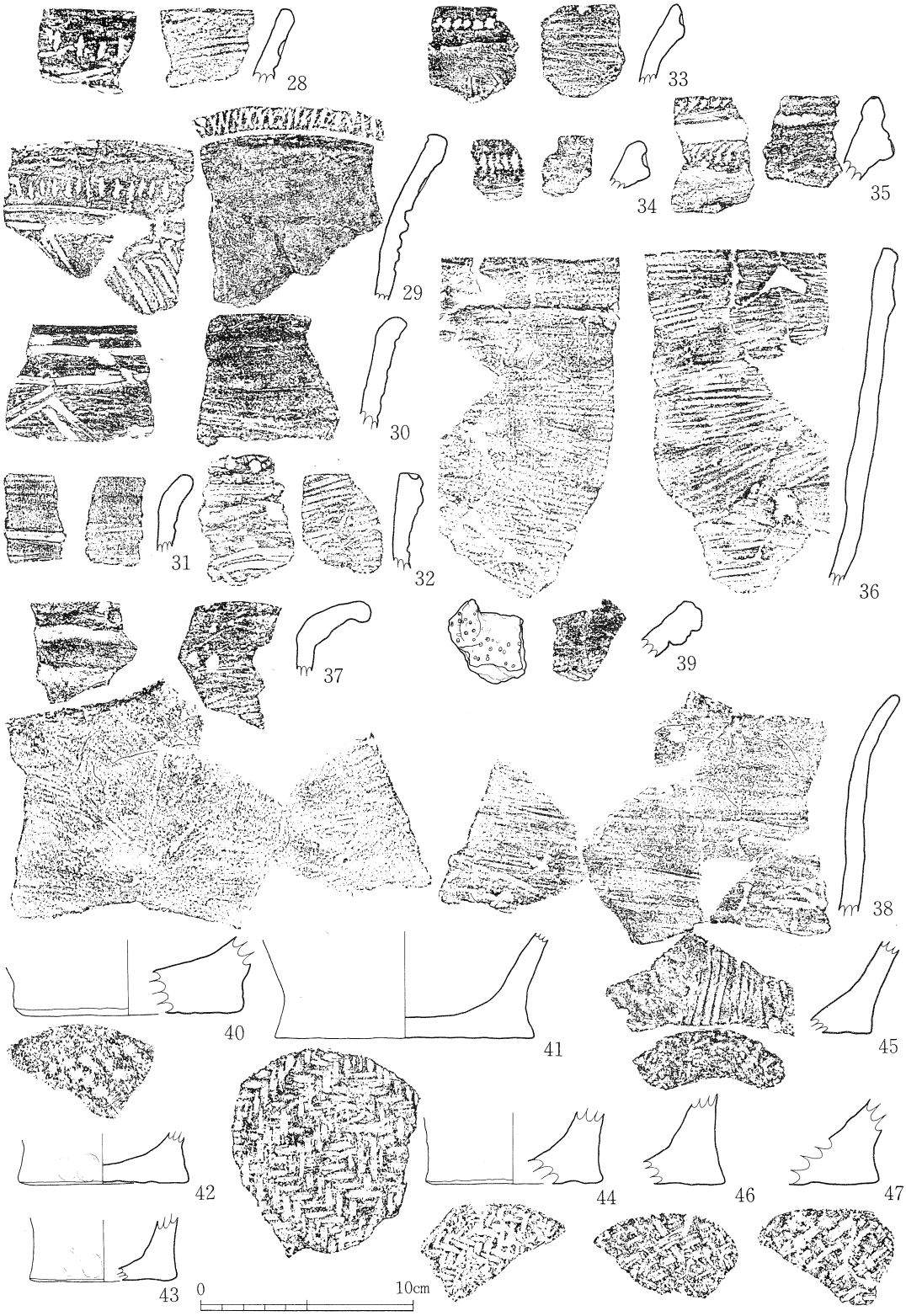


第9図　A地区　SA1～SA3 土層断面図

Ⅰ.黒 色 土（7.5YR 2/1）　耕土・砂粒を多く含み、砂質。土器細片を含む。
Ⅱ.黒褐色土（7.5 YR 3/1）　Ⅲ層への漸移層・シルト質で少量の砂粒を含む。
Ⅲ.暗褐色土（7.5YR 3/3）　遺物包含層・シルト質で少量の褐色土粒を含む。
（アカホヤか？）軽石質の粒を含む。
Ⅳ.暗褐色土（7.5YR 3/3）　アカホヤブロック（2～3cmから5cm大）を含む。



第10図　縄文土器実測図（1）　　1～19　A地区 SA 1　　20～27　A地区 SA 2



第11図　縄文土器実測図（2）　　28～47　A地区 SA2

ＳＡ３（第９・12～17図）

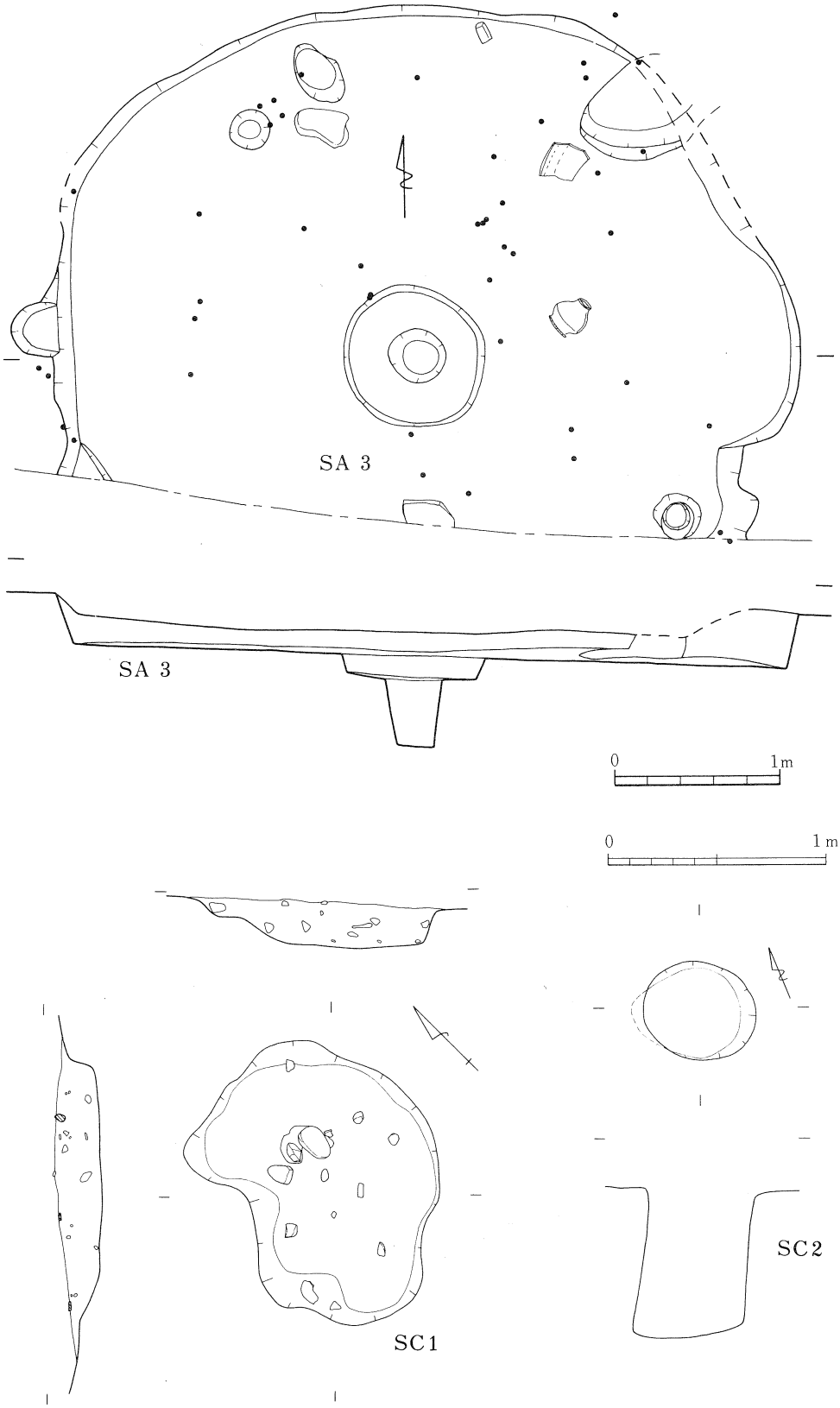
ＳＡ３はｉ・ｊ－６・７に位置し、長径455cm、短径320cm＋α、深さ33cmの円形プランである。南側は削平されている。住居の真ん中に二段掘りのピットがあり、一段目が径85cm、深さ11cm、二段目が径35cm、深さ41cmである。真ん中のピットから南東へ180cm 離れて径25cm、深さ31cmのピットが、北西へ175cm 離れて径25cm、深さ45cmのピットが壁際に配置されている。住居の埋土は２～５cm大のアカホヤブロックを含む暗褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ3/3）である。北東部の壁際を径60cm、深さ46cmのピットで切られており、埋土には焼土を含んでいる。北西部には長さ30cm、幅20cmの台石が出土している。

遺物は全体的に出土している。57は波頂部に刻みを有する波状口縁がやや外反し、沈線文と平行沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。61は57とは異り平口縁部で平行沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。63は沈線文間に小さい連続刺突文を施した擬似縄文で、Ｖａ類に相当する。66は比較的に狭い口縁部文様帯にＤ字形の連続刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。このタイプの破片が多く出土している。82は住居の中央ピットの東側で横位の状態でほぼ完形で出土した脚台付深鉢である。比較的に狭い口縁部文様帯に二段の円形刺突文を、脚台の脚端部外面に一段の円形刺突文を施している。胴部上半部は横方向の貝殻条痕を、同下半部には縦方向の貝殻条痕を、底部はナデを施している。胴部上半部には煤が付着している。口径15.5cm、頸部径14.4cm、胴部径15.9cm、底径7.4cm、器高18.0cmであり、Ⅶａ類に相当する。83は口唇部をわずかに拡張させたような、比較的幅の狭い口縁部文様帯に円形の連続刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。84は口縁部文様帯がやや広くなり、沈線の上下にＤ字形の連続刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。92は口縁部断面が顕著な「く」字形を呈し、口縁部下に貝殻腹縁による刺突文を一条施しており、Ⅶｃ類に相当する。95は波状口縁の波頂部に沈線を、２条の沈線間に刺突文を施している。105は口縁端部が肥厚し、口唇部に一条の沈線を施している。106は口縁部内面上部及び外面口唇部に列点文と貝殻刺突文を施した内面施文土器でⅥｂ類に相当する。64は沈線文間の幅が狭く、縄文帯も幅が狭く、Ⅸｂ類に相当する。無文土器には口縁部が大きく外反する116とほぼ真直に伸びる117がある。14点の底部のうち網代底は８点である。底部の形態は118・122のように底面から真直に立ち上がるものがほとんどであり、131のみが底面が外へ張り出してその上部が若干くびれている。内外面とも貝殻条痕とナデを施している。122の底面には白色物の付着が見られる。底径は7.4cmと7.9cmが各１点、8.7cmと9.0cmが各１点、10.0～10.4cmが５点、12.6cmが２点である。

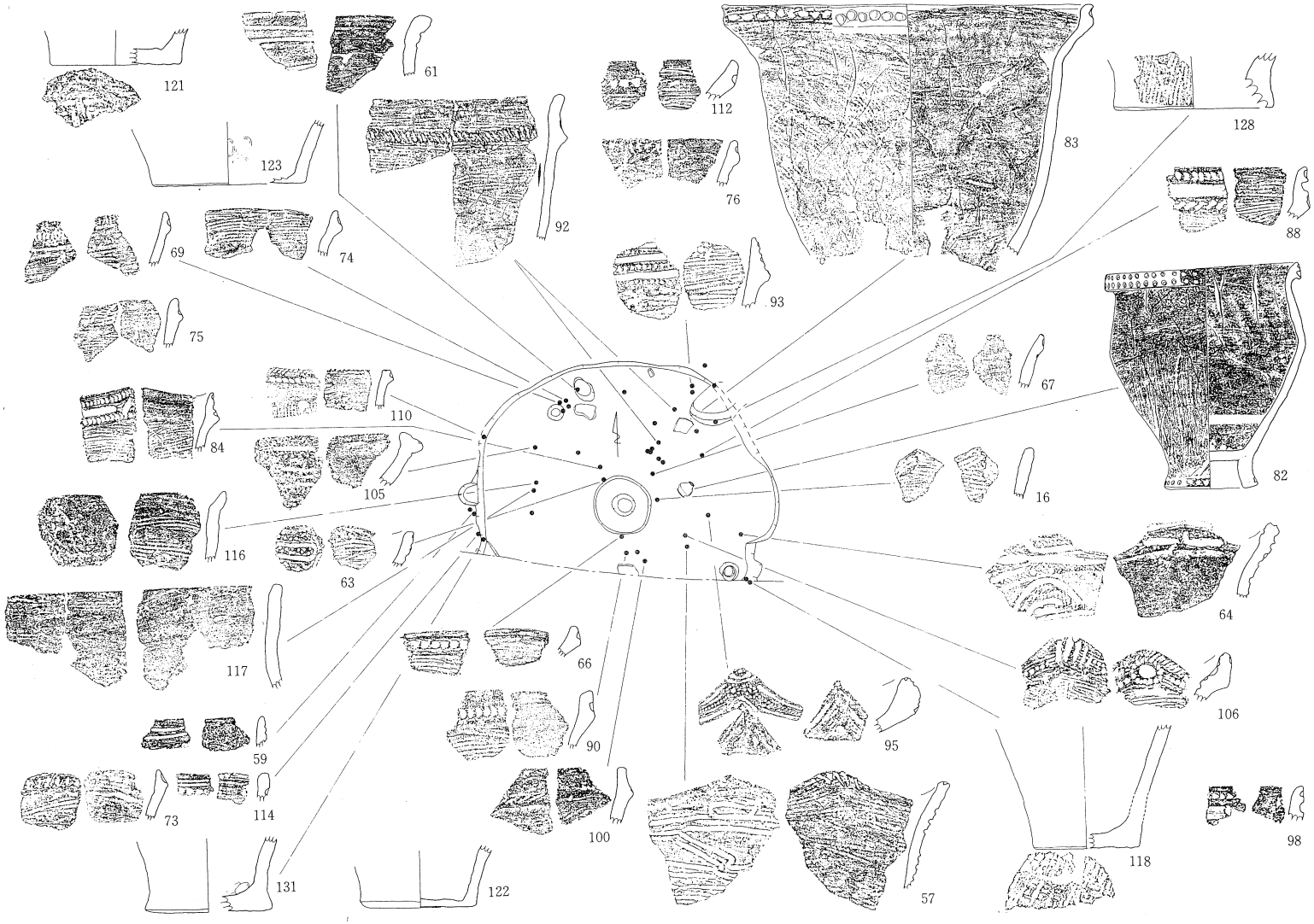
土器片加工円盤は6.2～39.8gが17点出土している。

石器としては北部の壁際で磨製石斧１点（139）が出土している。

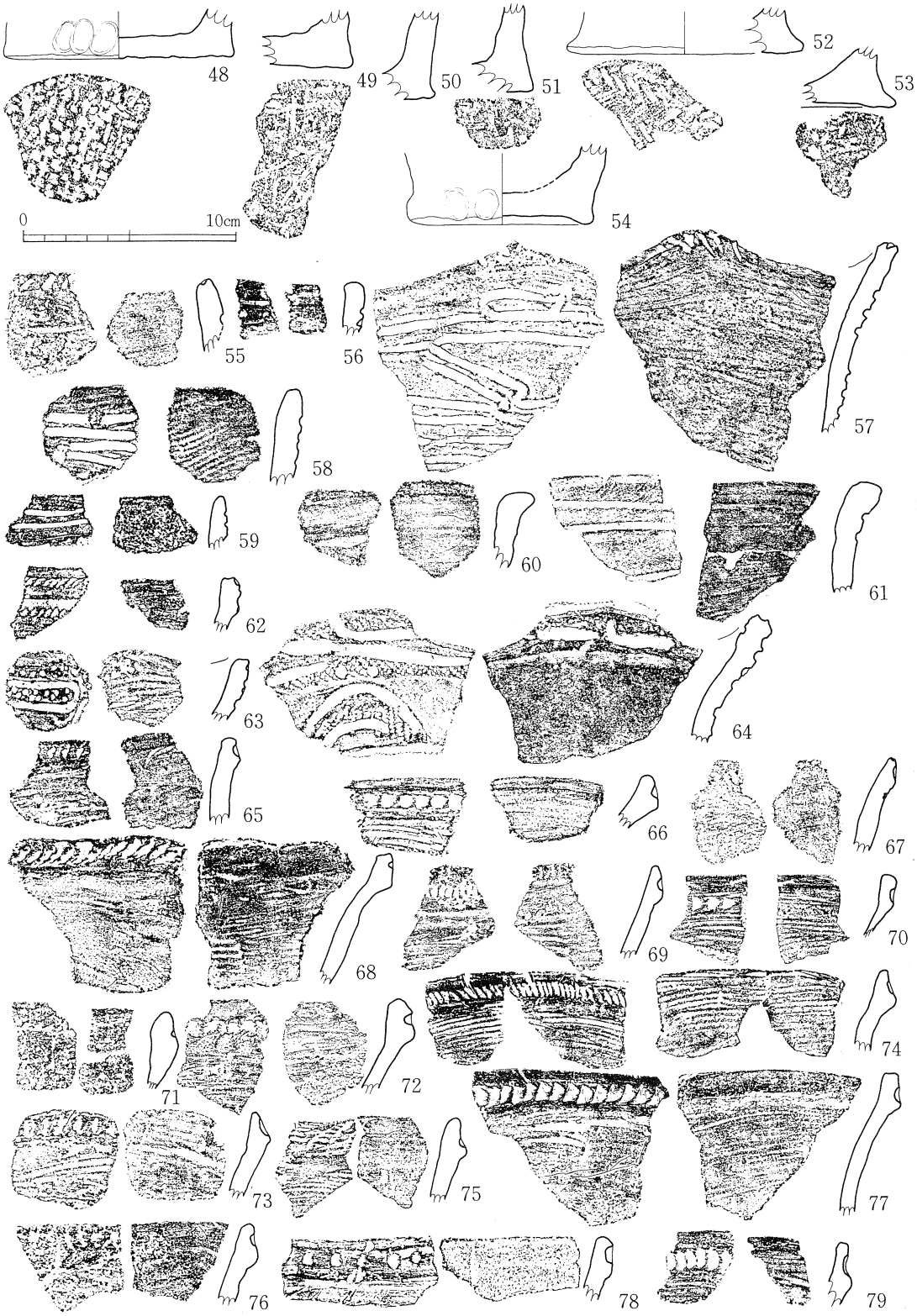
ＳＡ３の時期は83のⅦａ類の時期で、Ⅲａ期である。



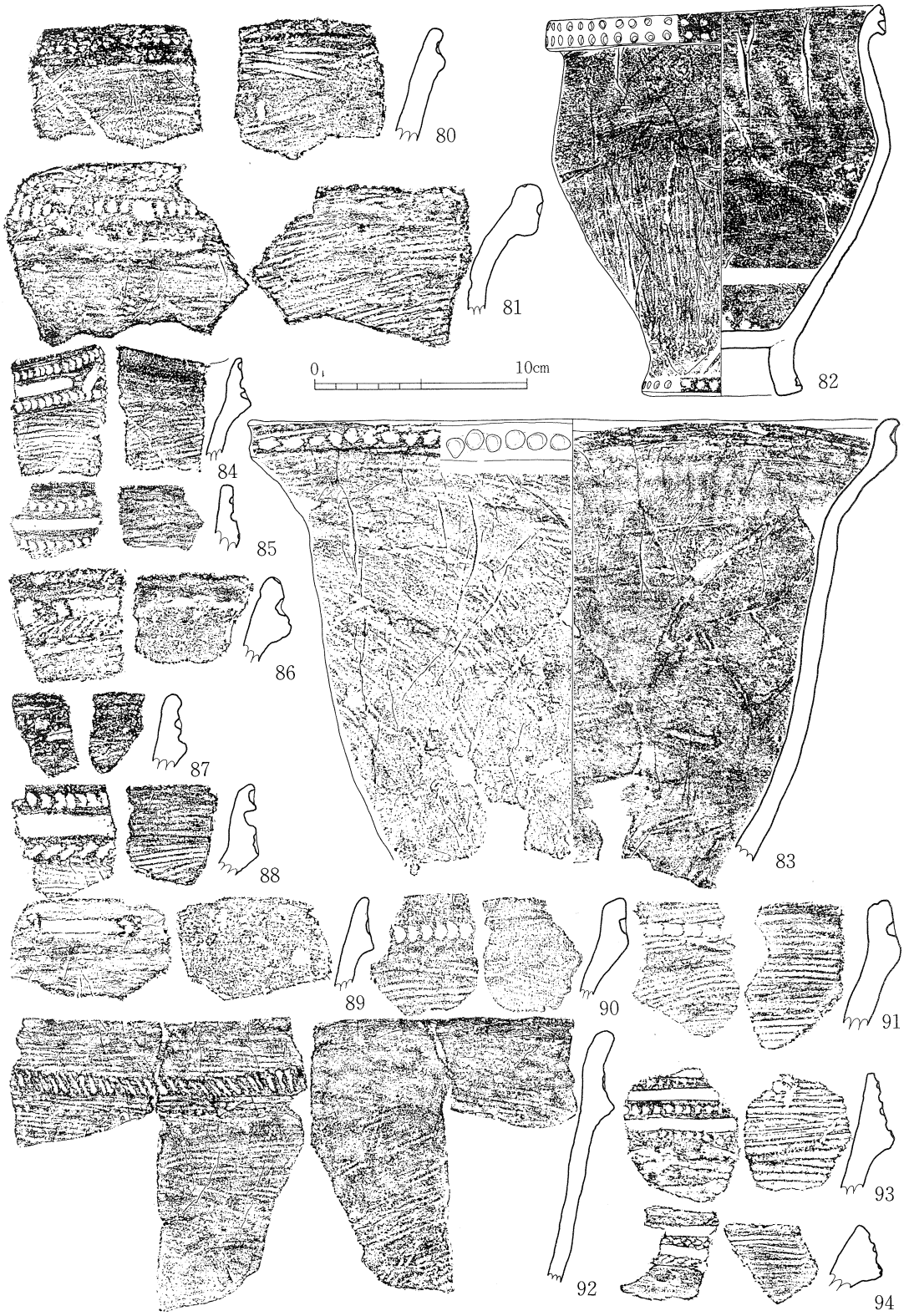
第12図　A地区　SA3・SC1・SC2 実測図



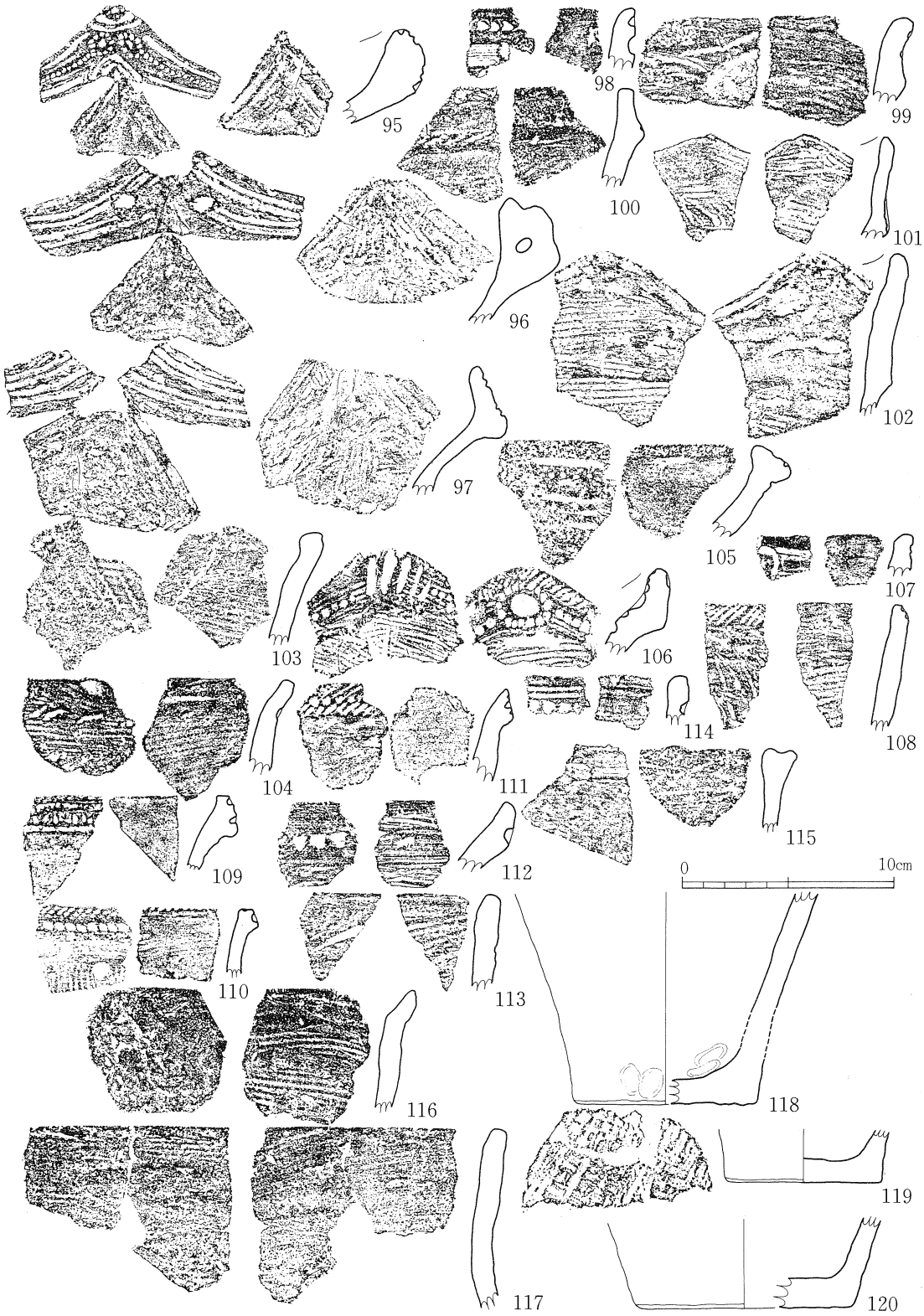
第13図　A地区 SA3 遺物出土状況図



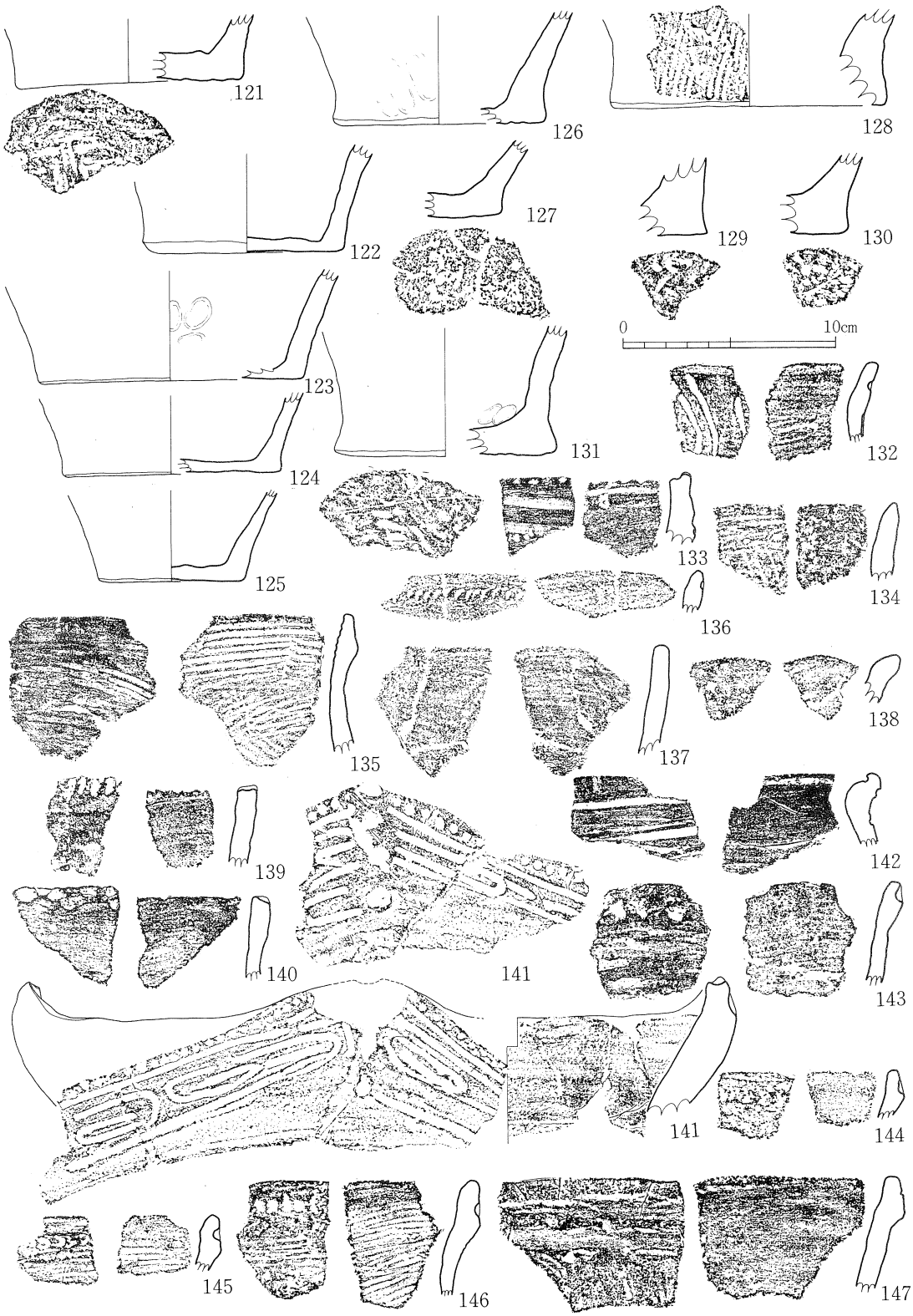
第14図　縄文土器実測図（3）　　48～54　A地区 SA2　　55～79　A地区 SA3



第15図　縄文土器実測図（4）　　80～94　A地区 SA3



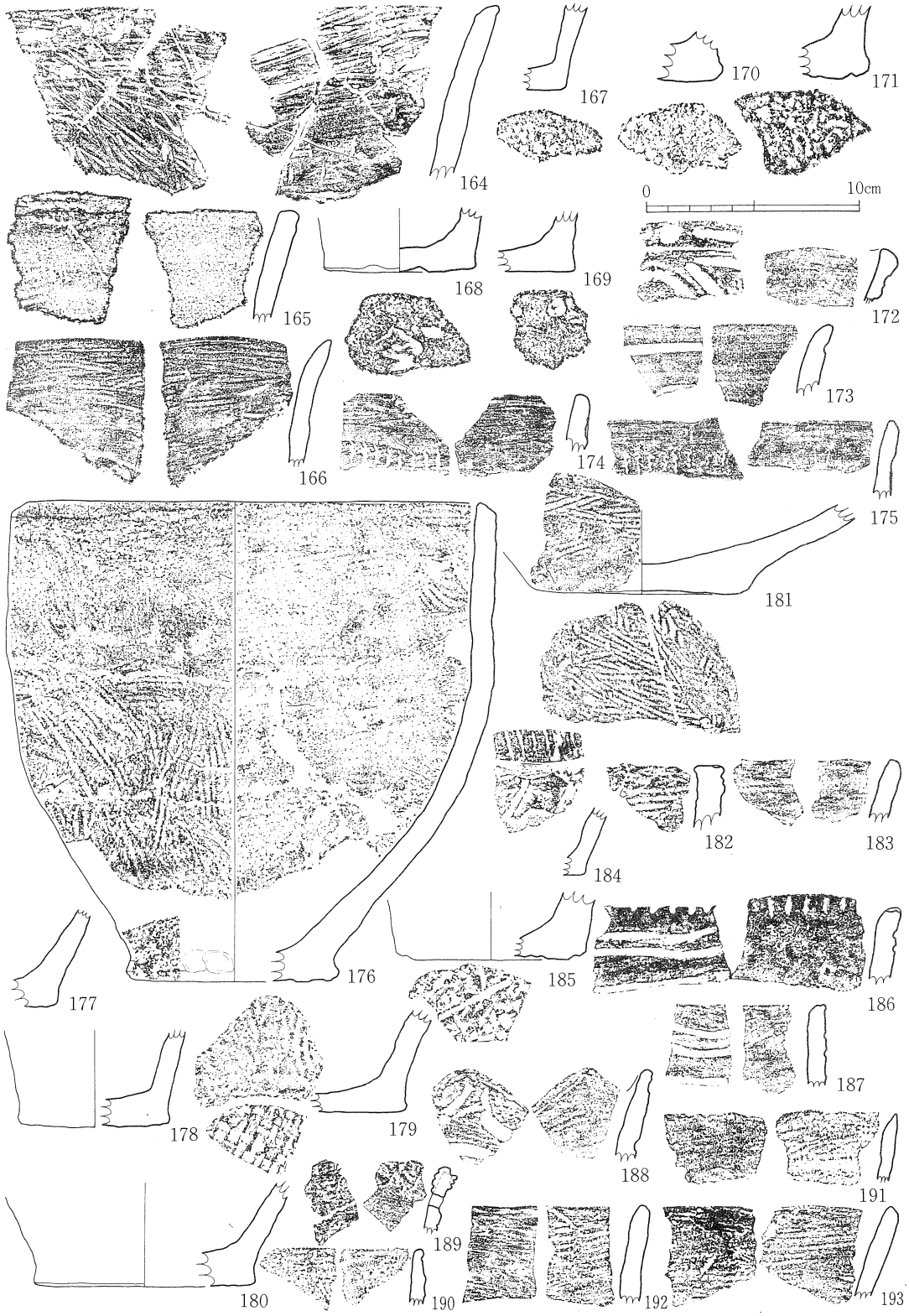
第16図　縄文土器実測図（５）　　95～120 Ａ地区 ＳＡ３



第17図　縄文土器実測図（6）

121～131　A地区 SA3　　132～138　A地区 SC2
139～147　A地区 SC4

第18図　縄文土器実測図（7）　　148～163 A地区 SC 4

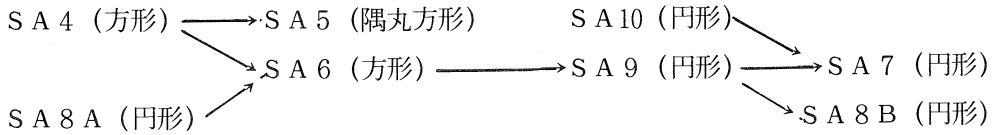


第19図　縄文土器実測図（8）

164～171　A地区 SC 4　　172～181　A地区 SC18
182～185　A地区 SC19　　186～193　A地区 SC17

B地区（第20・21図）

B地区のｉ～ｑ－30～32に17軒の住居が分布しており、方形プランと円形プランが切り合っている。ＳＡ２・ＳＡ３・ＳＡ７・ＳＡ８が建て替えを行っている。ＳＡ６の西に近接してＳＣ１がある。B地区の切り合い関係は次のようになる。



ＳＡ１（第22・24図）

ＳＡ１はｑ－30に位置し、長さ390cm、幅360cm、深さ25cmの不定形プランである。径30cm、深さ36cmのピットと径25cm、深さ15cmのピットが北西～南東方向に並んでいる。

197は口唇部に押圧刻みを有している。198は口唇部に押圧刻みを、口縁部に沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。199は沈線文と刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。201は沈線間に連続刺突文を施しており、Ｖａ類に相当する。206は口唇部に貝殻腹縁による刻みを有している。207は口縁部文様帯下部の肥厚が強調されず、形骸化したような低い段の上下に貝殻腹縁による刺突文を施しており、Ⅶｄ類に相当する。208は棒状工具を縦方向に動かして浅い連続文を施している。209はほぼ真直に伸びる波状口縁の無文土器である。211は全面ナデを施した底径10.1cmの底部である。

石器としてはチャート製の凹基無茎鏃(195)が１点出土している。

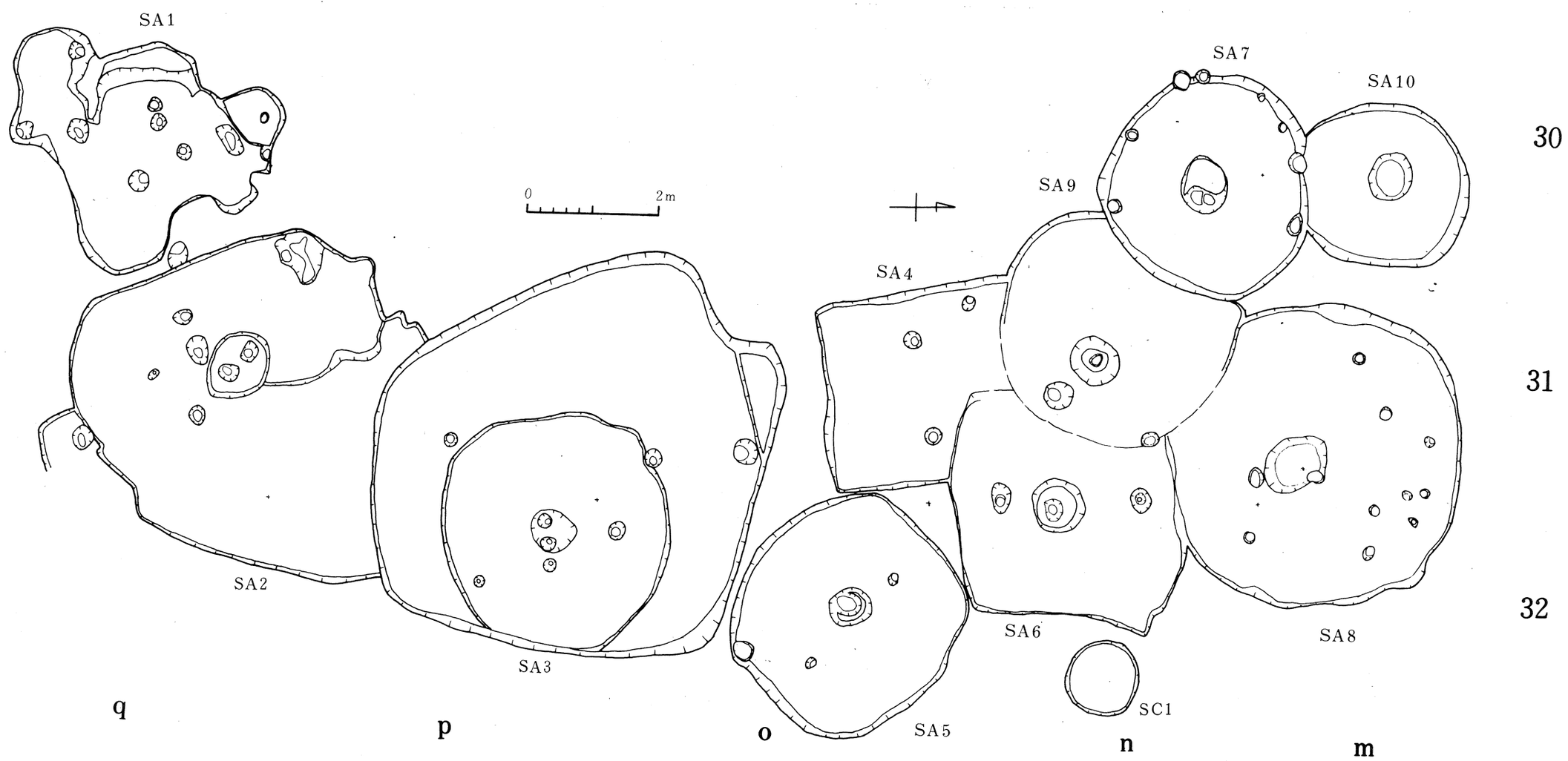
ＳＡ１の時期は207のⅦｄ類の時期で、Ⅲｂ期である。

ＳＡ２（第23・24図）

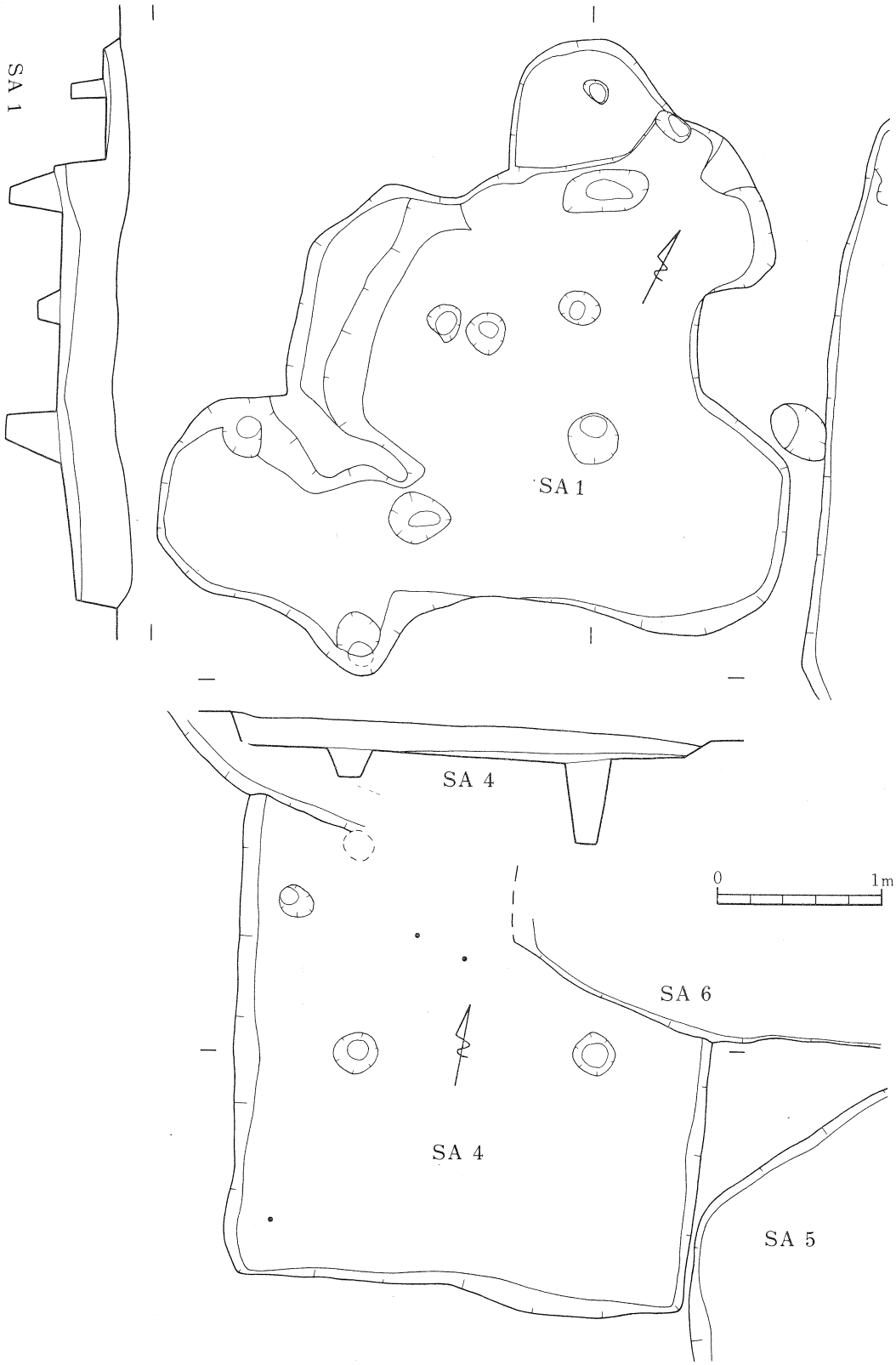
ＳＡ２はｐ・ｑ－31に位置し、土層断面から判断すると１回の建て替えを行っている。古段階の住居（ＳＡ２Ａ）は長さ475cm、幅340cm、深さ13cmの方形プランである。この住居の真ん中には二段掘りのピットがあり、一段目は長径115cm、短径90cm、深さ７cm、二段目に長径30cm、短径23cm、深さ17cmのピットと、長径30cm、短径23cm、深さ45cmのピットの２個がある。新段階の住居（ＳＡ２Ｂ）は長さ400cm、幅400cm、深さ９cmの方形プランである。ＳＡ２Ａの埋土はやや黄色を帯びる暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/3）、ＳＡ２Ｂは白・黄色の細粒を含む暗褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　3/3）である。ＳＡ３によって切られている。

遺物は西端部と中央部で出土している。213・214は２段に刺突文を施している。215は口唇部に一条の沈線と刻みを、竹管文・刺突文・沈線文を施している。216は口唇部に刻みを、口縁上部に連続刺突文を、その下に沈線文を施しており、Ｖｂ類に相当する。217は口唇部に貝殻腹縁による刻みを、口縁部に沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。220は口唇部に刻みを、口縁部に貝殻腹縁刺突文と沈線文を施している。221はヘラ状工具による沈線を斜方向に施しており、Ⅲｂ類に相当する。223は口縁部が肥厚し、口縁部文様帯幅の比

第20図　B地区　遺構分布図



第21図　B地区　竪穴住居分布図



第22図　B地区　SA1･SA4　実測図

較的狭いもので、一条のD字形連続刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。224は波状口縁の波頂部で、口縁部が断面三角形に肥厚し、沈線の上下に連続刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。３点の底部のうち１点が網代底である。底部の形態は226のように底面から真直に立ち上がるものが２点、底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの１点である。底径は9.0cmが２点、9.5cmが１点である。

土器片加工円盤は21.5ｇと21.9ｇが各１点出土している。

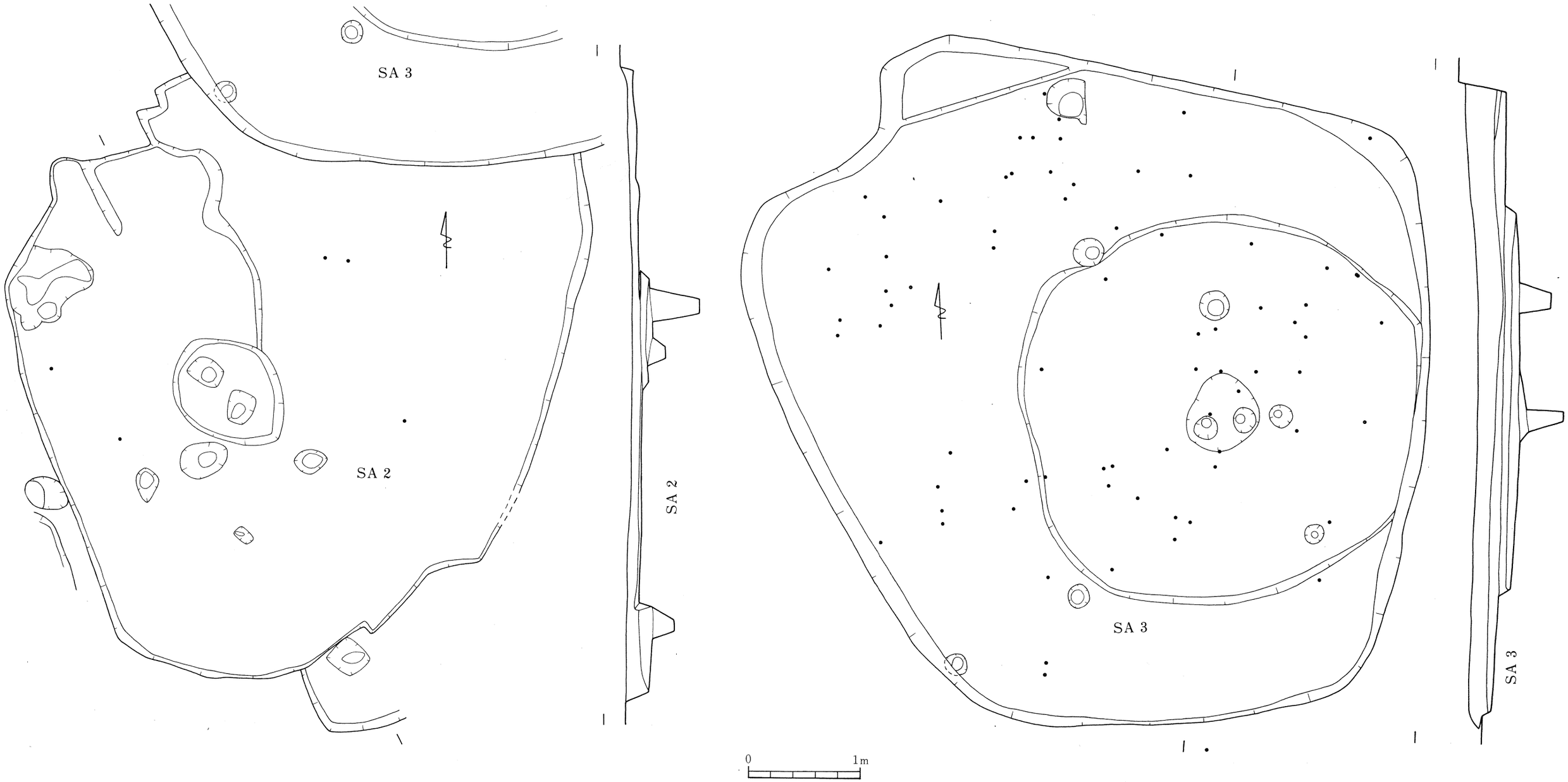
ＳＡ２Ａの時期は216のⅤｂ類の時期で、Ⅱａ期である。ＳＡ２Ｂの時期は223のⅦａ類の時期で、Ⅲａ期である。

ＳＡ３（第23・25〜33図）

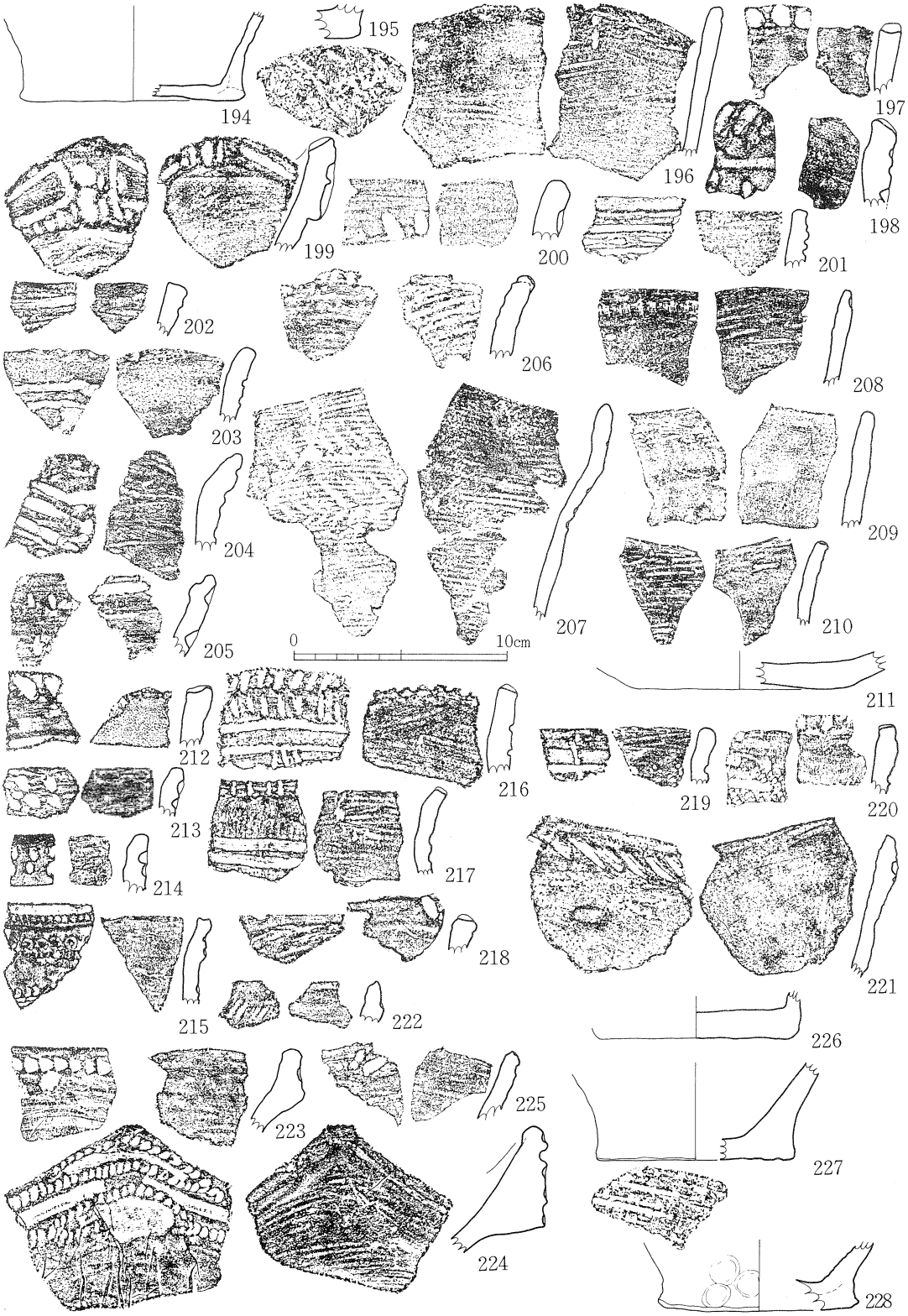
ＳＡ３はｏ・ｐ－31・32に位置し、土層断面から判断すると２回の建て替えを行っている。古段階の住居（ＳＡ３Ａ）は方形プラン、中段階の住居（ＳＡ３Ｂ）は方形プラン、新段階の住居（ＳＡ３Ｃ）は円形プランである。ＳＡ３Ａは長さ480cm、幅350cm、深さ22cmの規模である。ＳＡ３Ｂは長さ570cm、幅485cm、深さ43cmの規模である。この住居の真ん中の径20cm、深さ38cmのピットを中心として北東に135cm離れて径36cm、深さ32cmのピットを、南西に195cm離れて径20cm、深さ27cmのピットを、北西に径25cm、深さ54cmのピットが配置されている。ＳＡ３Ｃは長径360cm、短径350cm、深さ43cmである。この住居の真ん中には径20cm、深さ27cmのピットがあり、このピットを中心として北に100cm離れて径27cm、深さ18cmのピットが、南東に125cm離れて径18cm、深さ８cmのピットが配置されている。埋土はＳＡ３Ａがアカホヤを多く含む褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　4/4）、ＳＡ３Ｂがアカホヤをわずかに含む褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/4）、ＳＡ３Ｃが暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/3）である。

遺物は北西部・南西部・東部に集中して出土している。

北西部－229は内湾する口縁部に５条の沈線を施している。239・240は縦方向の貝殻腹縁刺突文の下位に２条の沈線を施しており、Ⅱｂ類に相当する。260は平口縁がほぼ真直に伸び、口縁部に一条の列点文と沈線文を施しており、Ⅴｂ類に相当する。口径21.5cm。261は３個の押圧刻みを有する波頂部が４ケ所あり、口縁部が短く大きく外反し、頸部に２条の平行沈線を、その下位に平行沈線を単位とする文様を施している。口径は19.5cmで、Ⅴｃ類に相当する。263は波頂部に４個の刻みを有し、口縁部に２条の平行沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。268は口唇部に１条の沈線を、口縁部に沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。274も口縁部が短く大きく外反するが、平口縁で、頸部に２条の平行沈線を、その下位に２条の平行沈線を単位として文様を施しており、Ⅴｃ類に相当する。301は口唇部に刻みを、口縁部に縦方向の貝殻腹縁刺突文を施している。321は口縁部がほぼ真直に伸び、貝殻条痕を消さずに沈線文を施している。323は２条の細い沈線を施している。



第23図　B地区 SA2･SA3 実測図



第24図　縄文土器実測図（9）

194～195 A地区 SC17　196～211 B地区 SA 1
212～228 B地区 SA 2

南西部－234は波頂部に３個の刻みを有する。247は口唇部に刻みを、口縁部に貝殻腹縁刺突文を施している。284・285は磨消縄文土器の胴部片である。271は口縁部が短く外反し、２条平行沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。293は口唇部に１条の沈線を、口縁部に縦方向の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅲａ類に相当する。297は１条の沈線と刻みを施している。327は縦方向の貝殻腹縁刺突文の間に列点文を施している。

東部－230は口唇部に刻みを、口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文を施している。242は口唇部に刻みを、口縁部は２段の列点文の下位に沈線文を施している。256・258は口唇部に刻みを、口縁部に刺突文と沈線文を施しており、Ⅱａ類に相当する。287・308・311はヘラによる刺突文を施しており、Ⅲｂ類に相当する。251は口唇部に刻みを、口縁部に平行沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。315は大きく外反する口縁部内面に３条の沈線と列点文と貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅵａ類に相当する。314は上向きの口唇部に２条の沈線を施している。289は口唇部にヘラによる刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。306は口縁部文様帯幅が最も広くなり、ヘラによる刺突文と３条の沈線と貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅶｃ類に相当する。304・305は沈線だけを施しており、Ⅶｃ類に相当する。312は口縁部が短く大きく外反し、頸部に１条の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅷｂ類に相当する。328は縦方向の貝殻腹縁刺突文の間に列点文を施している。341は口縁部がほぼ真直に伸びる無文土器で、口径14.8*cm*である。351は口縁部が緩やかに外反し、口唇部にいくほど肥厚し、口径29.2*cm*である。366は上げ底の底部で、底径は9.2*cm*である。

15点の底部のうち網代底は８点である。底部の形態は361のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているものが10点、357のように底面から真直に立ち上がるものが４点、上げ底は366の１点である。底径は6.5*cm*が１点、7.0～7.9*cm*が３点、8.6*cm*と8.8*cm*が各１点、9.2*cm*と9.4*cm*が各１点、10.0～10.8*cm*が４点である。

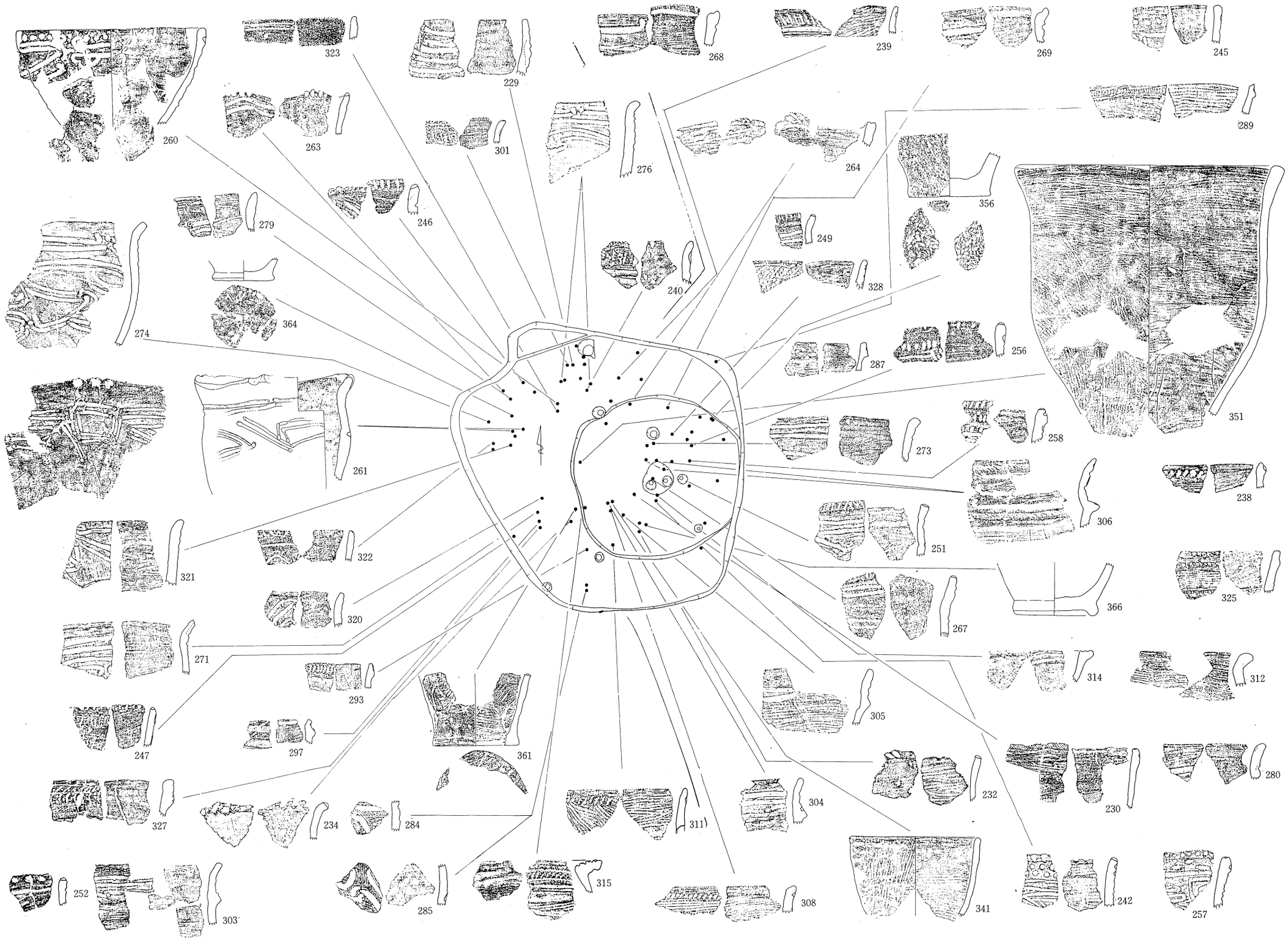
土器片加工円盤は9.8～34.0*g*が11点出土している。

石器としては磨石２点（117・118）、敲石１点（136）、磨製石斧１点（160）、切目石錘１点（183）が出土している。

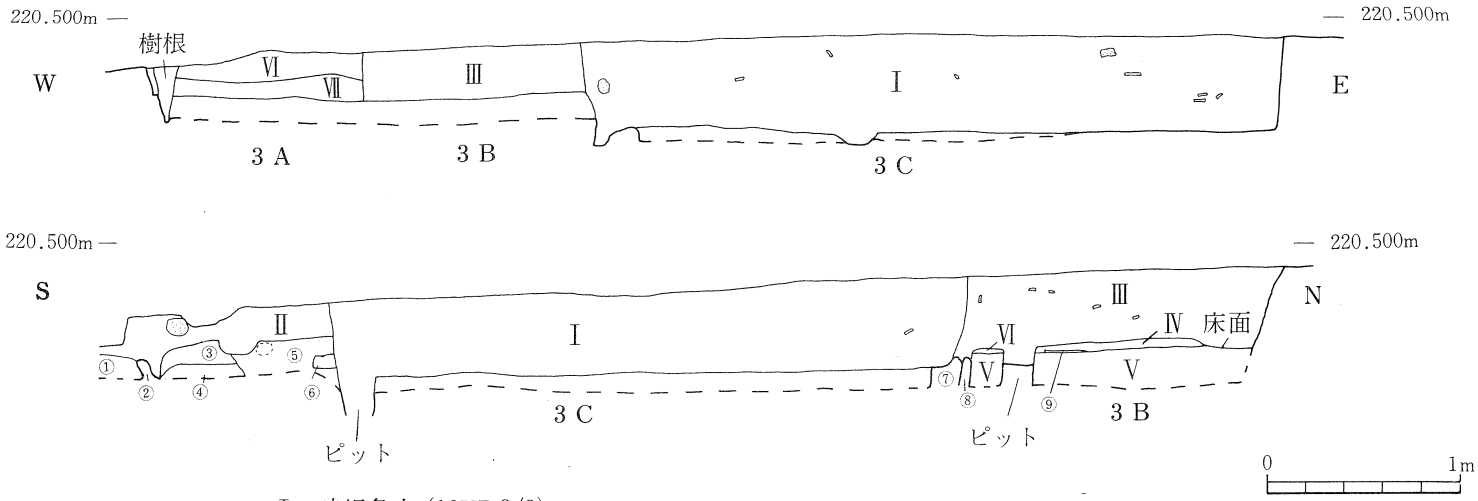
ＳＡ３Ａの時期は240のⅡｂ類の時期で、Ⅰｂ期である。ＳＡ３Ｂの時期は251のⅤｃ類の時期、Ⅱｂ期である。ＳＡ３Ｃは306のⅦｃ類の時期で、Ⅲｂ期である。

ＳＡ４（第22・32・33・36図）

ＳＡ４はｎ・ｏ－31に位置し、長さ300*cm*＋α、幅290*cm*、深さ13*cm*の方形プランである。短軸の東西方向に長径27*cm*、短径24*cm*、深さ17*cm*のピットと長径27*cm*、短径24*cm*、深さ52*cm*のピットを配置している。２個のピットの間隔は145*cm*で、壁際から70*cm*である。この住居はＳＡ５とＳＡ６に切られている。住居の埋土はアカホヤのブロックを含む暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/3）である。



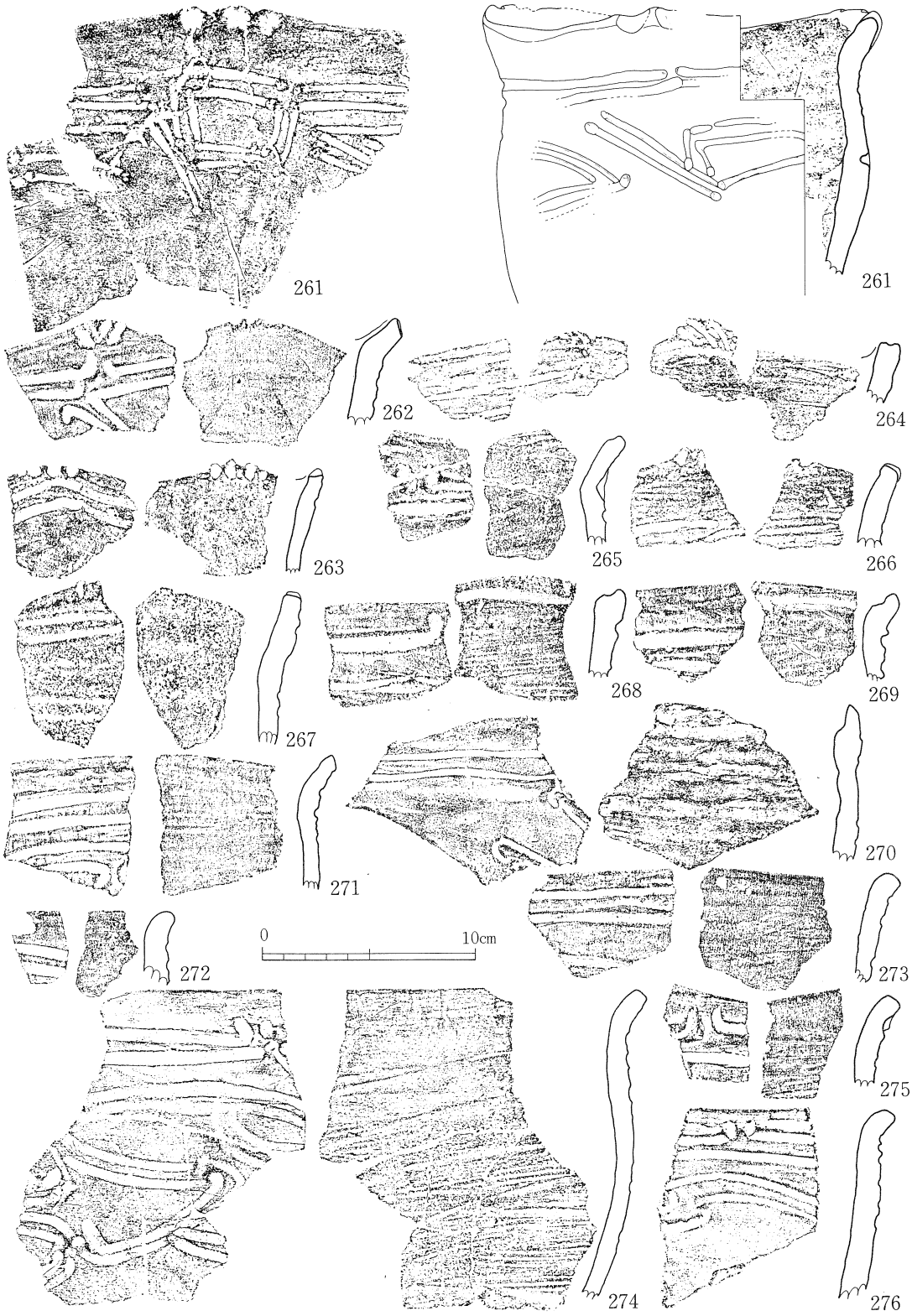
第25図　B地区　SA３遺物出土状況図



Ⅰ　暗褐色土（10YR 3/3）
Ⅱ　褐 色 土（10YR 4/6）
Ⅲ　暗褐色土（10YR 3/4）　Ⅰに比べややしまりなし。わずかにアカホヤを含む。
Ⅳ　暗褐色土・黒褐色土が薄い層をなし、アカホヤをわずかに含む（床面？貼床？）
Ⅵ　褐 色 土（10YR 4/4）
Ⅶ　褐 色 土（10YR 4/4）　アカホヤを多く含む。
①　暗褐色土（10YR 3/4）
②　明黄褐色土・黒褐色土・アカホヤ
③　明褐色土（7.5YR 5/6）　アカホヤ・黒褐色土を含む。
④　暗褐色土（10YR 3/4）に明褐色土（7.5YR 5/6）が混ざる。
⑤　明褐色土（7.5YR 5/6）
⑥　若干明るい。
⑦　砂粒状にしまりのない暗褐色土。
⑧　粘質の黄褐色土。
⑨　薄い黄褐色

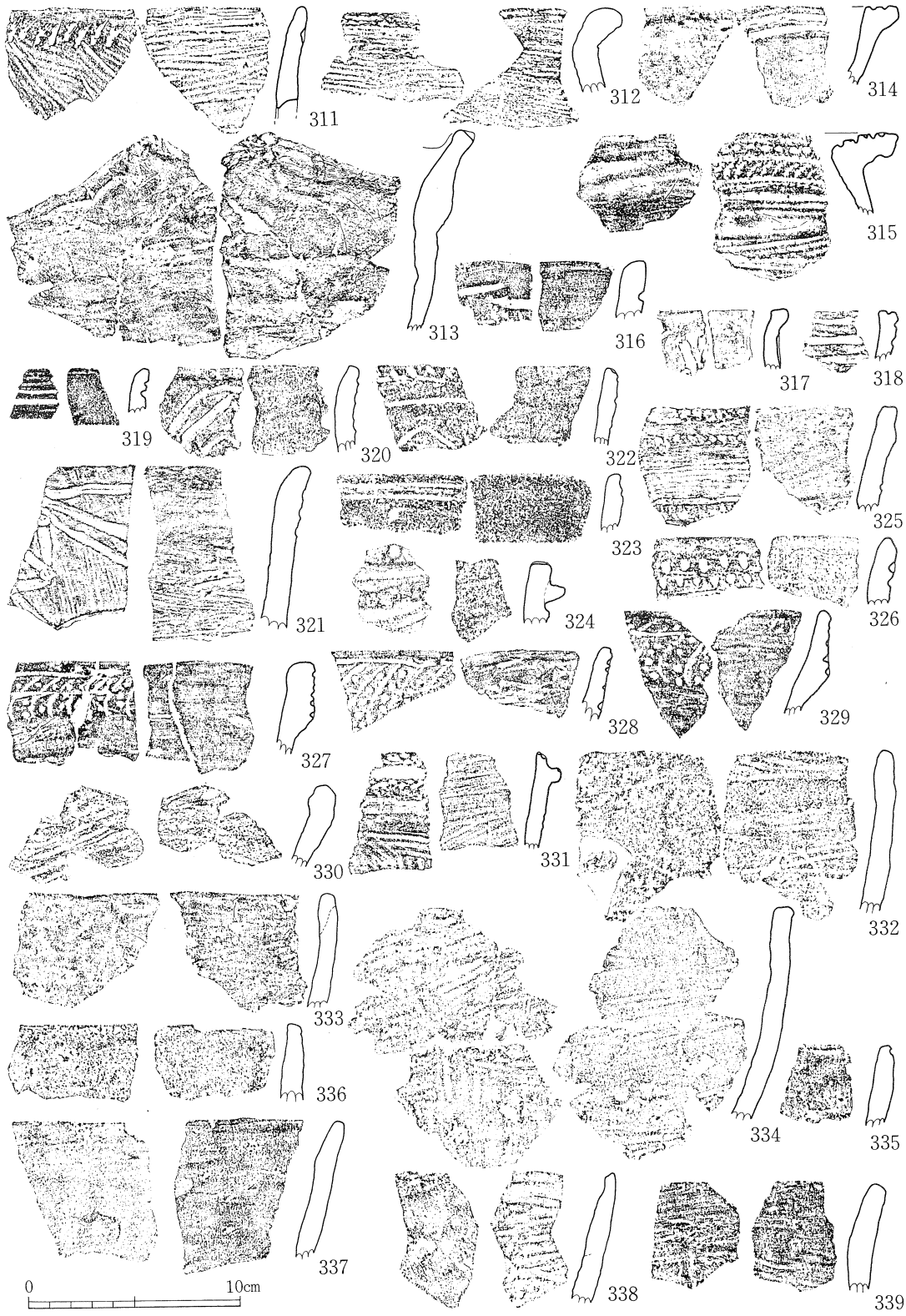
第26図　B地区　SA 3　土層断面図

第27図　縄文土器実測図（10）　　229～260 B地区 SA 3

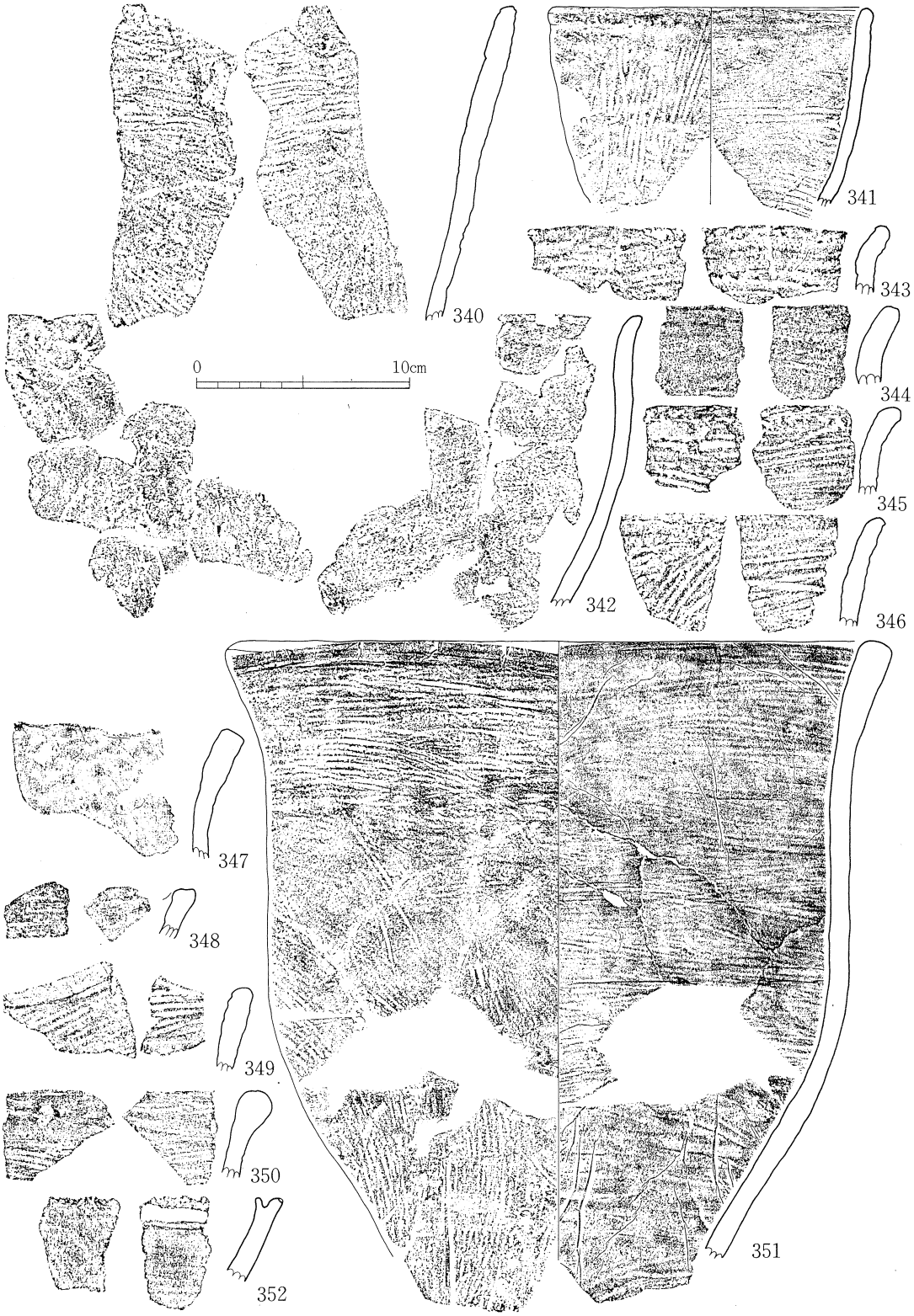


第28図　縄文土器実測図（11）　　261～276 B地区 SA 3

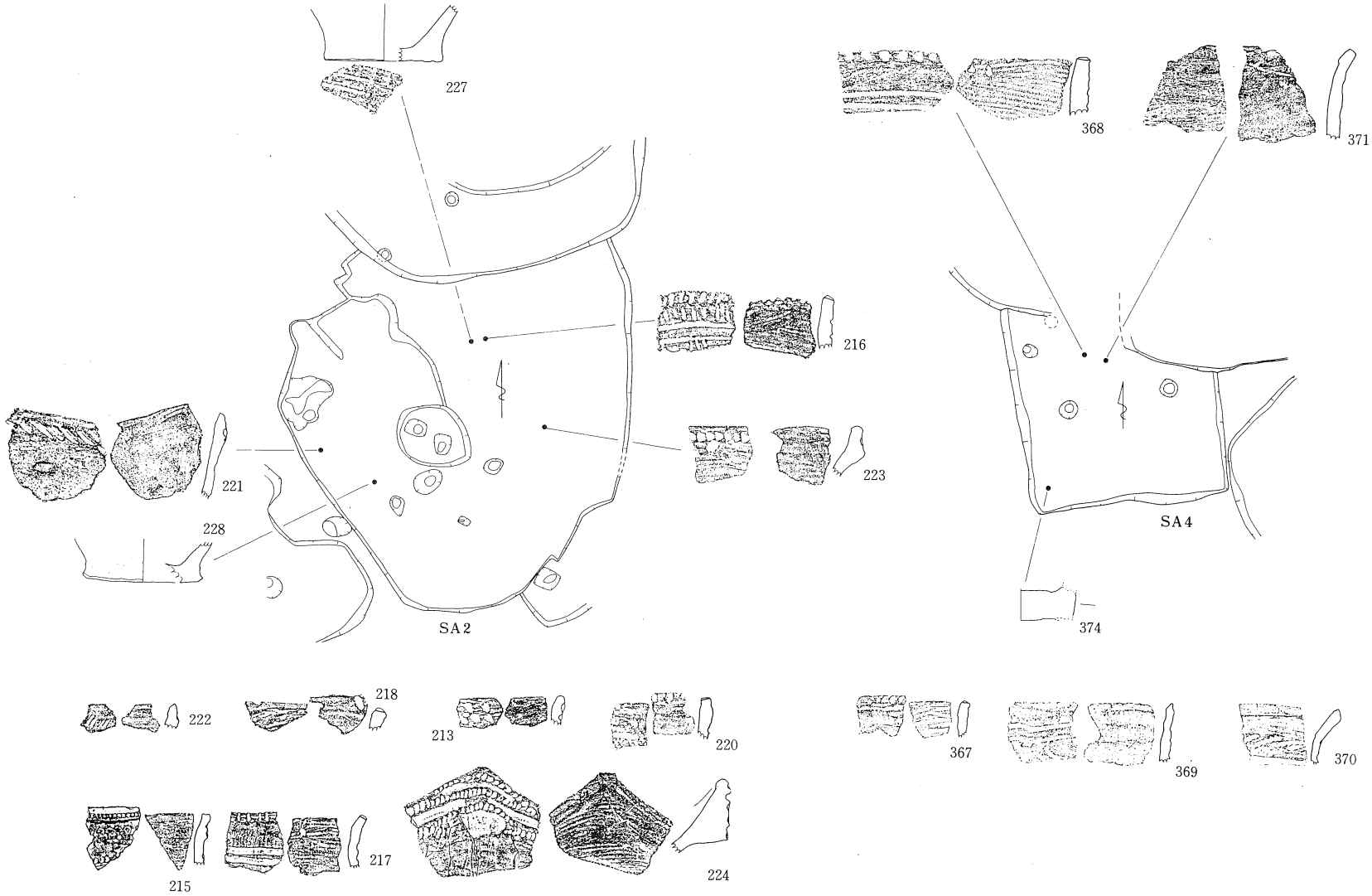
第29図　縄文土器実測図（12）　　277～310 B地区 SA 3



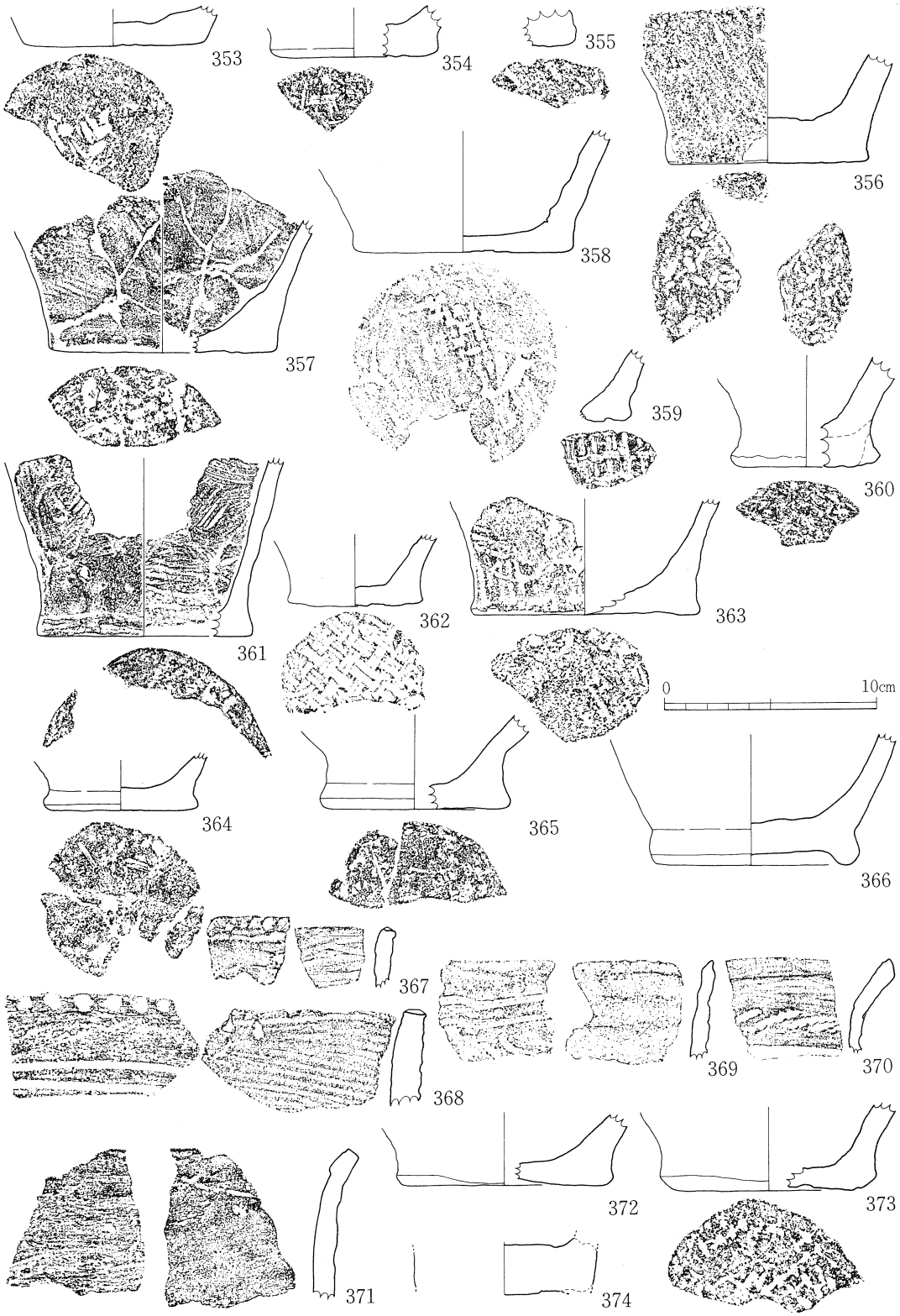
第30図　縄文土器実測図（13）　　311～339 B地区 SA 3



第31図　縄文土器実測図（14）　　340～352 B地区 SA 3



第32図　B地区 SA2・SA4 遺物出土状況図



第33図　縄文土器実測図（15）　353～366 B地区 SA 3　367～374 B地区 SA 4

遺物量は非常に少ない。368は口唇部に押圧刻みを、口縁部に平行沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。369は沈線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。370は大きく外反する口縁部に貝殻腹縁刺突文と沈線文を施しており、Ⅷｂ類に相当する。371は口縁部がやや外反する無文土器である。374は脚台付皿の皿部と脚台の接合部である。２点の底部のうち網代底は１点である。底径は9.6cmと10.2cmである。

石器としては磨石１点（83）、姫島産黒耀石の円基鏃1点（193）が出土している。ＳＡ４の時期は遺物は出土していないが、切り合いからＳＡ５のＩｂ期より遡るＩａ期である。

ＳＡ５（第34～40図）

ＳＡ５はｏ－31・32に位置し、長さ380cm、幅340cm、深さ34cmの隅丸方形プランである。この住居の真ん中には二段掘りのピットがあり、一段目は長径62cm、短径55cm、深さ16cm、二段目は径40cm、深さ17cmである。中央のピットから北西に80cm離れて長径18cm、短径15cm、深さ39cmのピットを、南西105cm離れて長径22cm、短径14cm、深さ23cmのピットを配置している。２個のピットは壁際から80cmである。３個のピットは長軸方向の北西～南東方向に並んでいる。住居の埋土はアカホヤ粒があまり見られない暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ3/4）である。

遺物は北部に集中して出土している。380は口唇部に刻みを、口縁部に２条平行沈線を施しており、Ⅱｂ類に相当する。385は口縁部文様帯が厚く肥厚し、文様は刺突文と沈線文の組み合わせで、口縁部文様帯の間に無文帯を有し、Ⅳａ類に相当する。383は波頂部に刻みを有する無文の波状口縁である。393は口縁上部に連続刺突文を、その下に偏平な楕円形の沈線文を、沈線文間に竹管文を施しており、Ｖｂ類に相当する。394は波状口縁の波頂部に刻みを、口縁部に２条平行沈線と曲線文を施しており、Ｖｃ類に相当する。392は口唇部が二股に分かれ、口唇部に刻みを、口縁部に平行沈線文を施しており、Ⅴ類に相当する。395は口縁部が外反し、４条の平行沈線を施しており、Ｖｃ類に相当する。410は口唇部に貝殻腹縁による刻みを、口縁部には２条の平行沈線の下に縦方向の多数の沈線文を施している。415は口縁部がほぼ真直に伸びており、口径24.8cmの無文土器である。419は内湾する波状口縁の無文土器である。420は口縁部が斜め上方に伸び、口径22.6cmの無文土器である。９点の底部のうち網代底は５点、木の葉底が１点である。底径は10.3～10.8cmが３点である。

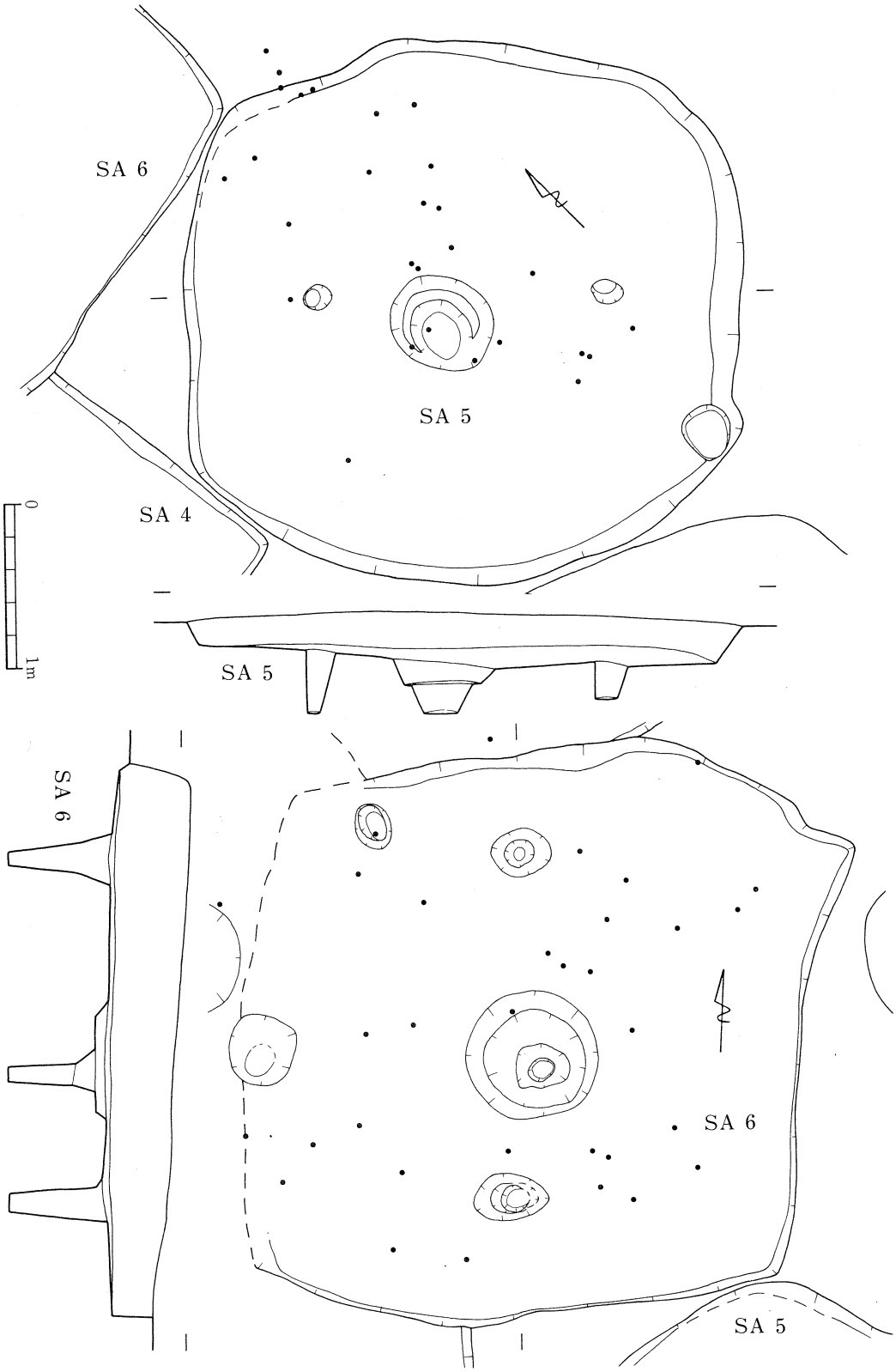
土器片加工円盤が１点（24.5g）出土している。

石器としては磨石１点（119）、磨製石斧１点（157）が出土している。

ＳＡ５の時期は380のⅡｂ類の時期であり、Ｉｂ期である。

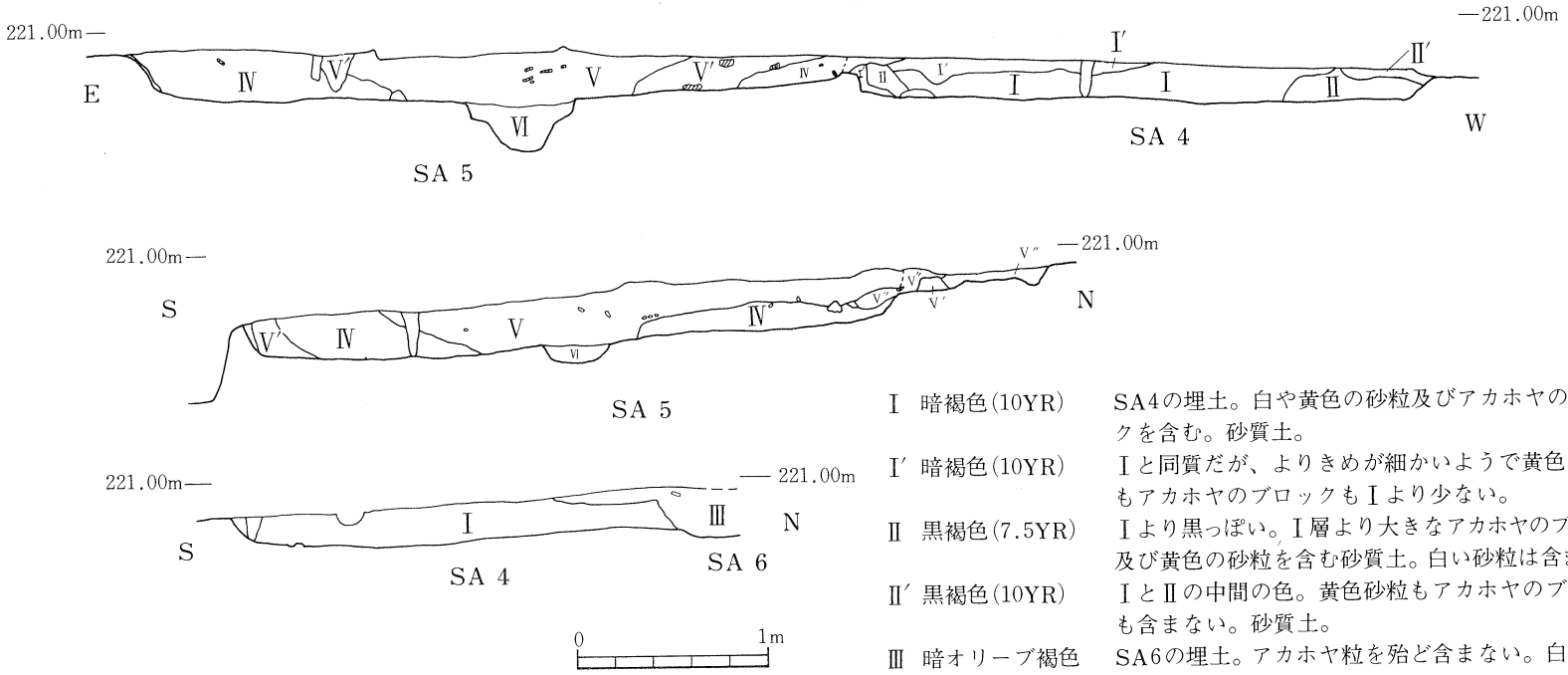
ＳＡ６（第34・36・40・44図）

ＳＡ６はｎ－31・32に位置し、長さ340cm、幅340cm、深さ46cmの正方形プランである。この住居の真ん中には二段掘りのピットがあり、一段目は径80cm、深さ９cm、二段目は長径33



第34図　B地区　SA5･SA6　実測図

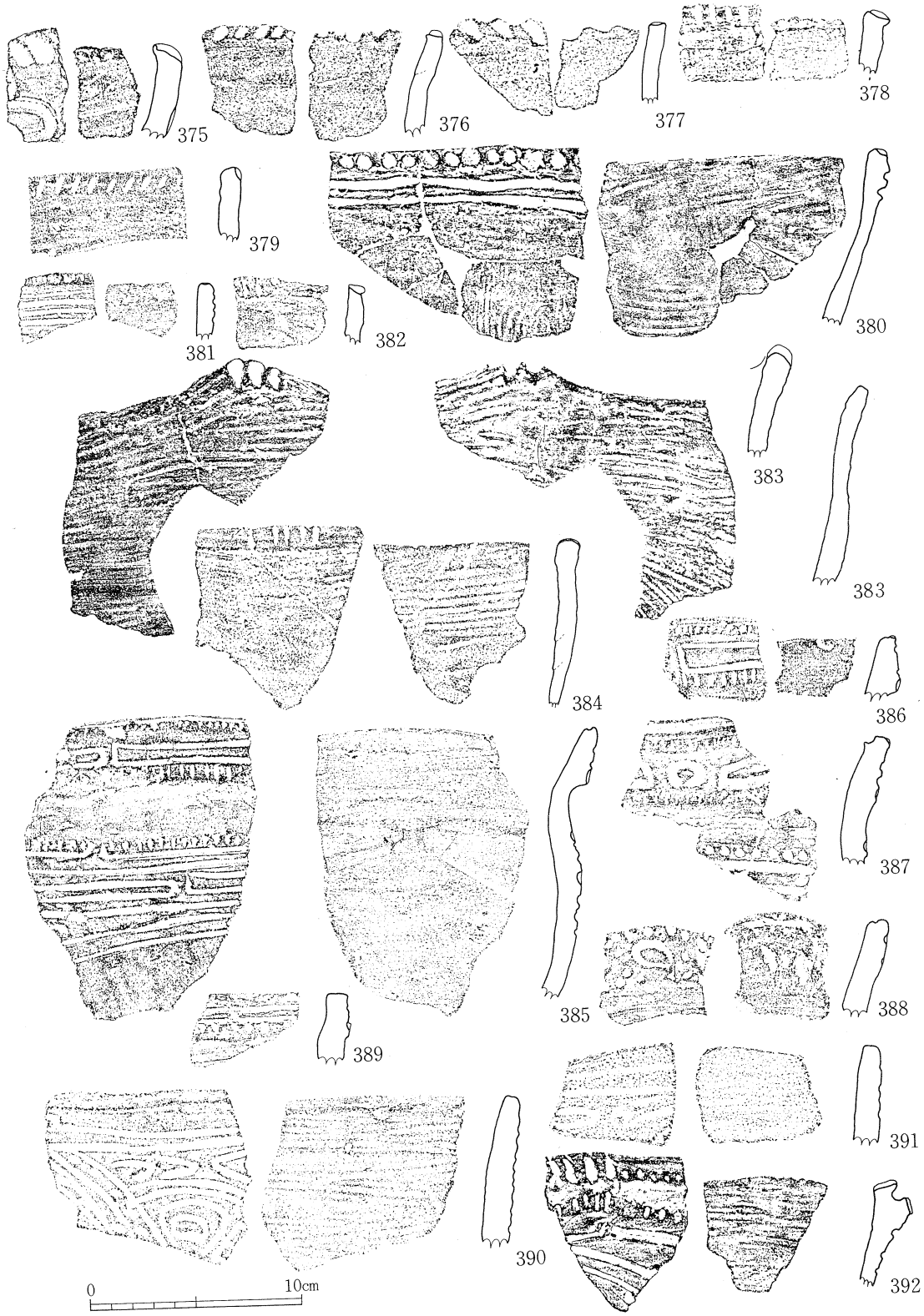
第35図　B地区 SA5 遺物出土状況図



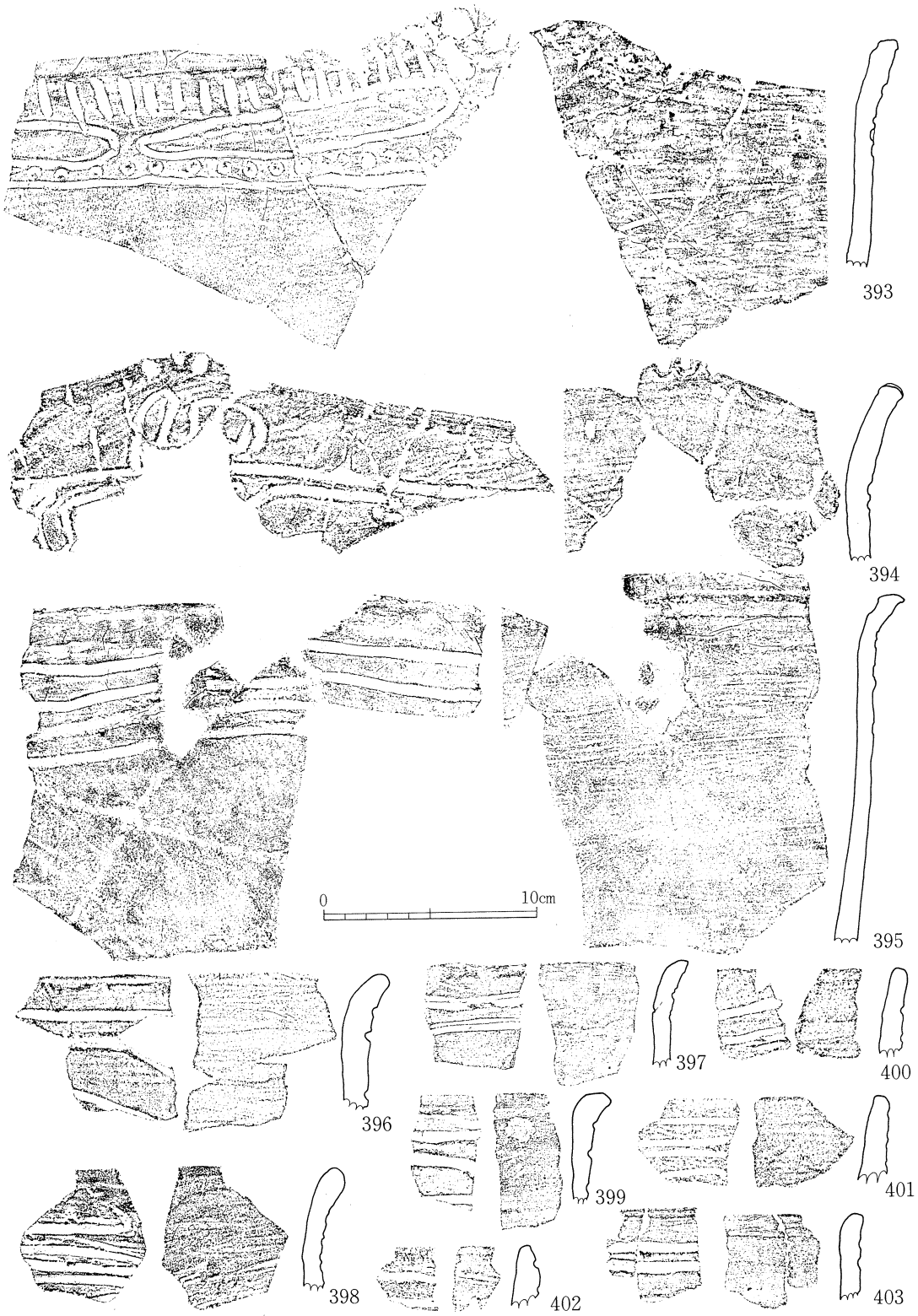
① 暗褐色(10YR4/3) Ⅳより黒っぽい粘質をおびた砂質土
② 黄褐色(2.5Y) 砂質土．アカホヤとは違う部分的なもの
③ 暗褐色(10YR) アカホヤ粒を含む固くしまった砂質土層．
④ 黒褐色(10YR3/2) アカホヤ下層のブロック．砂質土．

第36図 B地区 SA 4～SA 6 土層断面図

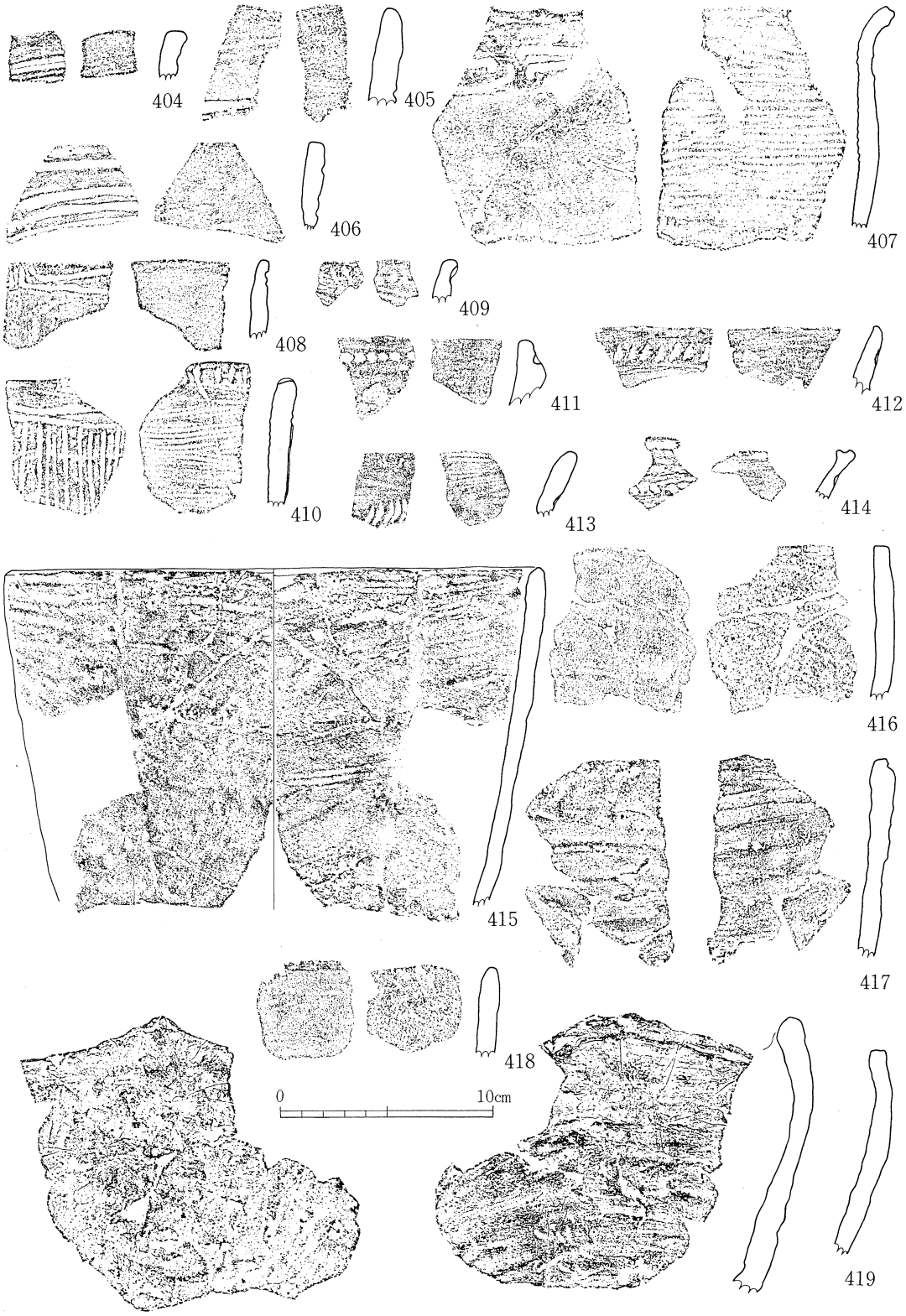
Ⅰ	暗褐色(10YR)	SA4の埋土。白や黄色の砂粒及びアカホヤのブロックを含む。砂質土。
Ⅰ′	暗褐色(10YR)	Ⅰと同質だが、よりきめが細かいようで黄色の砂粒もアカホヤのブロックもⅠより少ない。
Ⅱ	黒褐色(7.5YR)	Ⅰより黒っぽい。Ⅰ層より大きなアカホヤのブロック及び黄色の砂粒を含む砂質土。白い砂粒は含まない。
Ⅱ′	黒褐色(10YR)	ⅠとⅡの中間の色。黄色砂粒もアカホヤのブロックも含まない。砂質土。
Ⅲ	暗オリーブ褐色(2.5Y)	SA6の埋土。アカホヤ粒を殆ど含まない。白い砂粒や炭化物片を含む。柔かい砂質土。SA4の埋土より柔かい。
Ⅳ	褐色(10YR4/4)	SA5の埋土。Ⅰよりきめ細かく粘性をおびる砂質土。アカホヤのブロックとアカホヤの下層の黒褐硬質のブロックを少量含む。炭化物も含む。
Ⅴ	暗褐色(10YR4/3)	白い砂粒や土器の小片を含む。アカホヤ粒はあまりみられない。やや粘性をもつがⅣほどはない。砂質土
Ⅴ′	暗褐色(10YR3/3)	Ⅴよりやや黒い。硬質ブロックや炭化物の小片を含む。アカホヤ粒はあまりみられない。きめの細かな砂質土。
Ⅴ″	暗褐色(10YR3/4)	きめ細かなシルト質土。黄色や白色の砂粒など全く含まない。
Ⅵ	暗褐色(10YR3/4)	Ⅴ層よりやや明るい。あとⅤ層と同様の砂粒を含む。



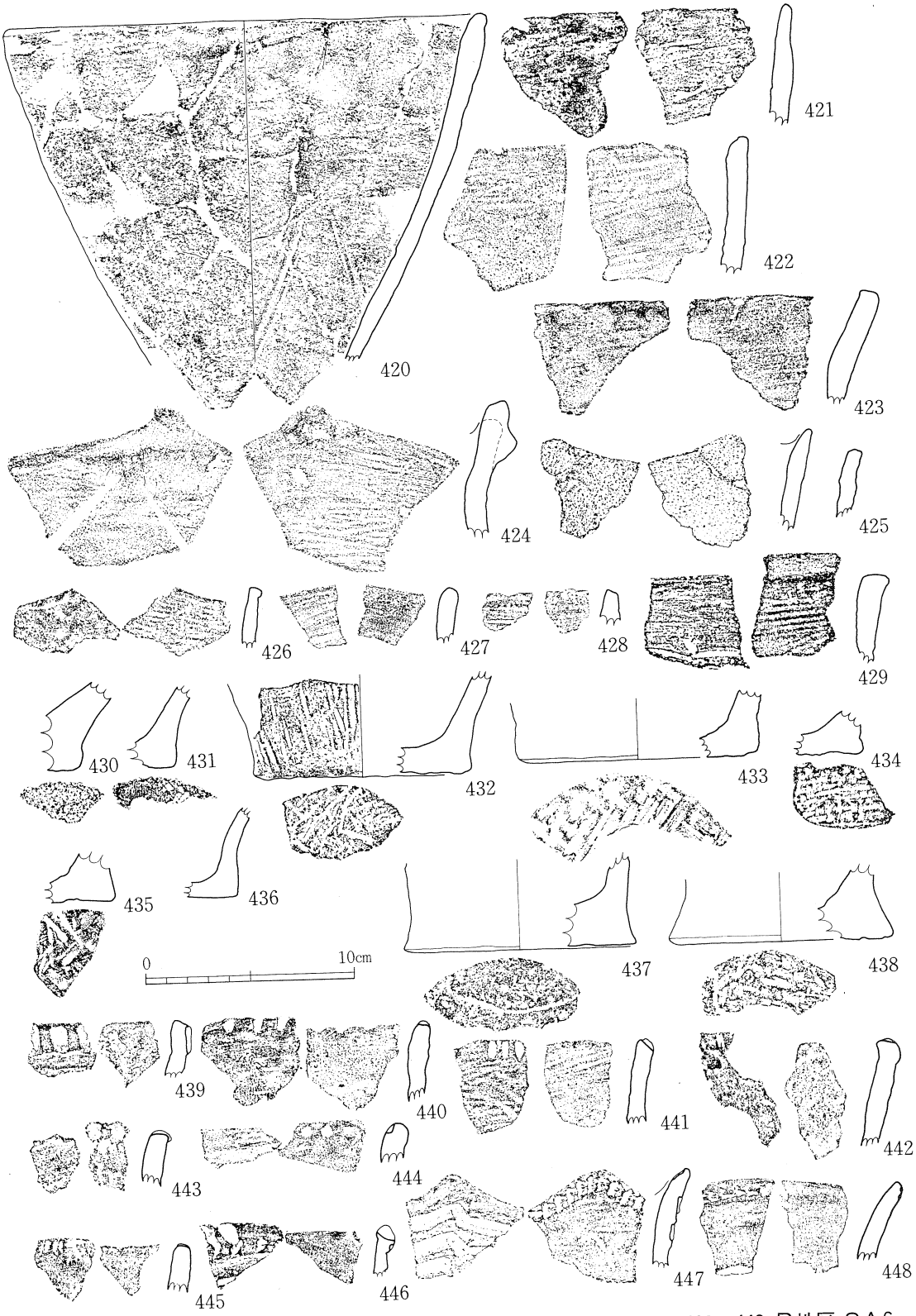
第37図　縄文土器実測図（16）　375～392 B地区 SA5



第38図　縄文土器実測図（17）　　393～403 B地区 SA 5



第39図　縄文土器実測図（18）　　404～419 B地区 SA5



第40図　縄文土器実測図（19）　420～438 B地区 SA5　439～448 B地区 SA6

cm、短径25cm、深さ53cmである。中央のピットから北に130cm離れて長径36cm、短径32cm、深さ63cmのピットが、南に80cm離れて長径45cm、短径30cm、深さ60cmのピットが配置されている。３個のピットは南北方向に主軸を持つ。ピットは壁際から60cmと70cmである。この住居はＳＡ９に切られている。住居の埋土はアカホヤ粒・白色粒を含むにぶい黄褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　4/3）である。

遺物は全面的に出土している。447は波状口縁で、口唇部の内面に貝殻腹縁の刺突文を、口縁部には３条の沈線を施している。453は口唇部には１条の沈線を有し、口縁部文様帯が厚く肥厚し、刺突文と沈線文を施しており、Ⅳａ類に相当する。454は口縁部文様帯が厚く肥厚し、沈線文を施し、胴部文様帯に刺突文を施しており、Ⅳｂ類に相当する。455・482は沈線間に貝殻刺突文を施しており、Ⅴａ類に相当する。481は口縁部をわずかに肥厚させた文様帯にヘラの刺突文を施しており、Ⅲｂ類に相当する。460はヘラの刺突文の下位に沈線文を施しており、Ⅴｂ類に相当する。462は波頂部に３個の刻みを、口縁部に２条沈線を単位とする文様を施しており、Ⅴｃ類に相当する。479は断面三角形状の口縁部に３条の沈線と刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。478は断面三角形状の口縁部に１条の沈線の上下に刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。476は口唇部に１条の沈線を、口縁部に１条の沈線と磨消縄文を施しており、Ⅸａ類に相当する。483は口唇部に１条の沈線を、口縁部に孤状の２条短沈線間に列点文を施している。485が口縁部が短く外反するのに対して490はほぼ真直に伸びている無文土器である。10点の底部のうち６点が網代底である。底部の形態は507のように底面から外へ張り出してその上部がくびれているものが７点、底面から斜め上方に伸びるものは509の１点、上げ底は508の１点である。底径は7.9cmが１点、8.4cmが１点、10.4cmと10.5cmが２点である。

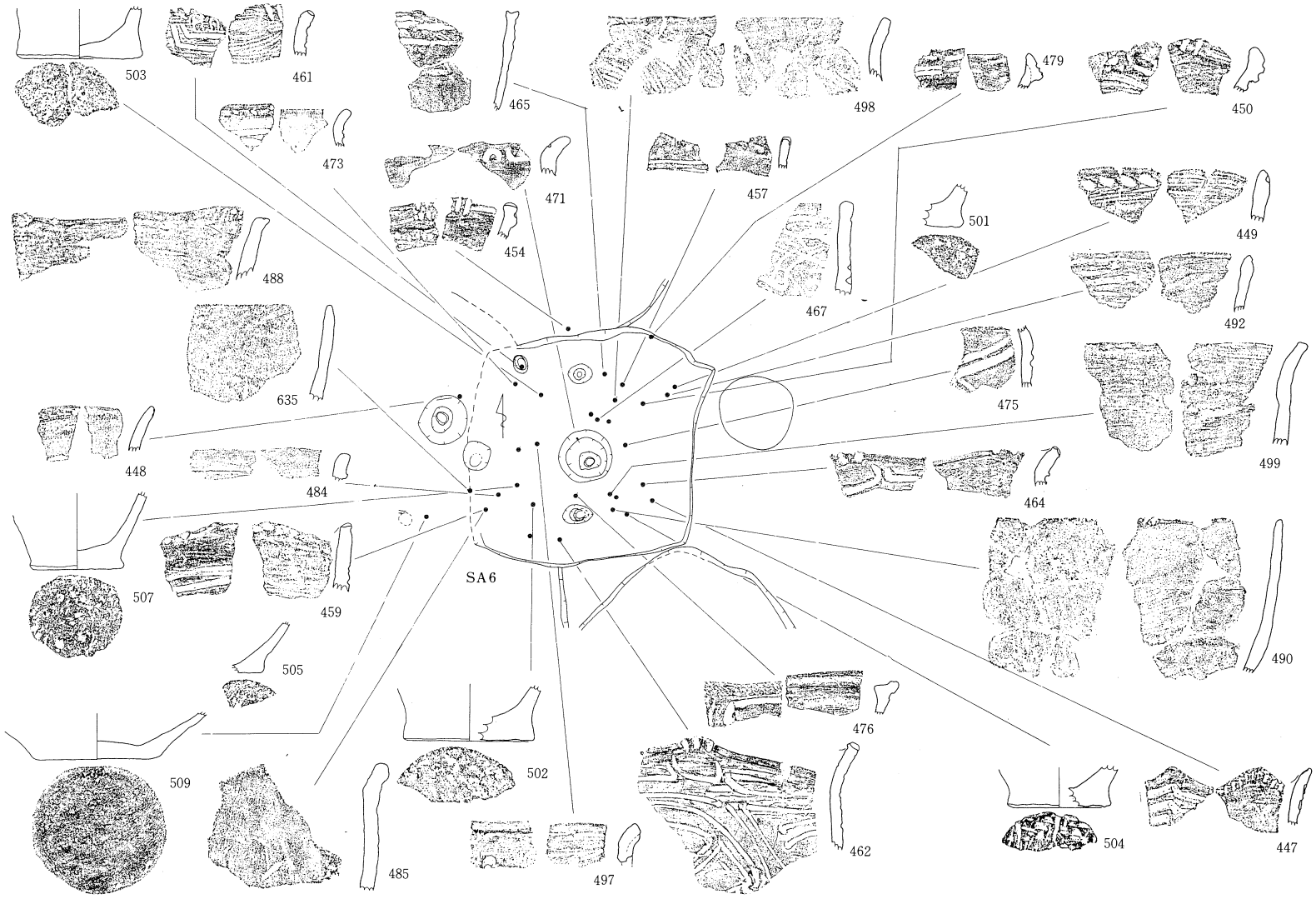
土器片加工円盤は7.9～23.0gが５点出土している。

石器としては流紋岩製の凹基無茎鏃１点（194）が出土している。

ＳＡ６の時期は460のⅤｂ類の時期で、Ⅱａ期である。

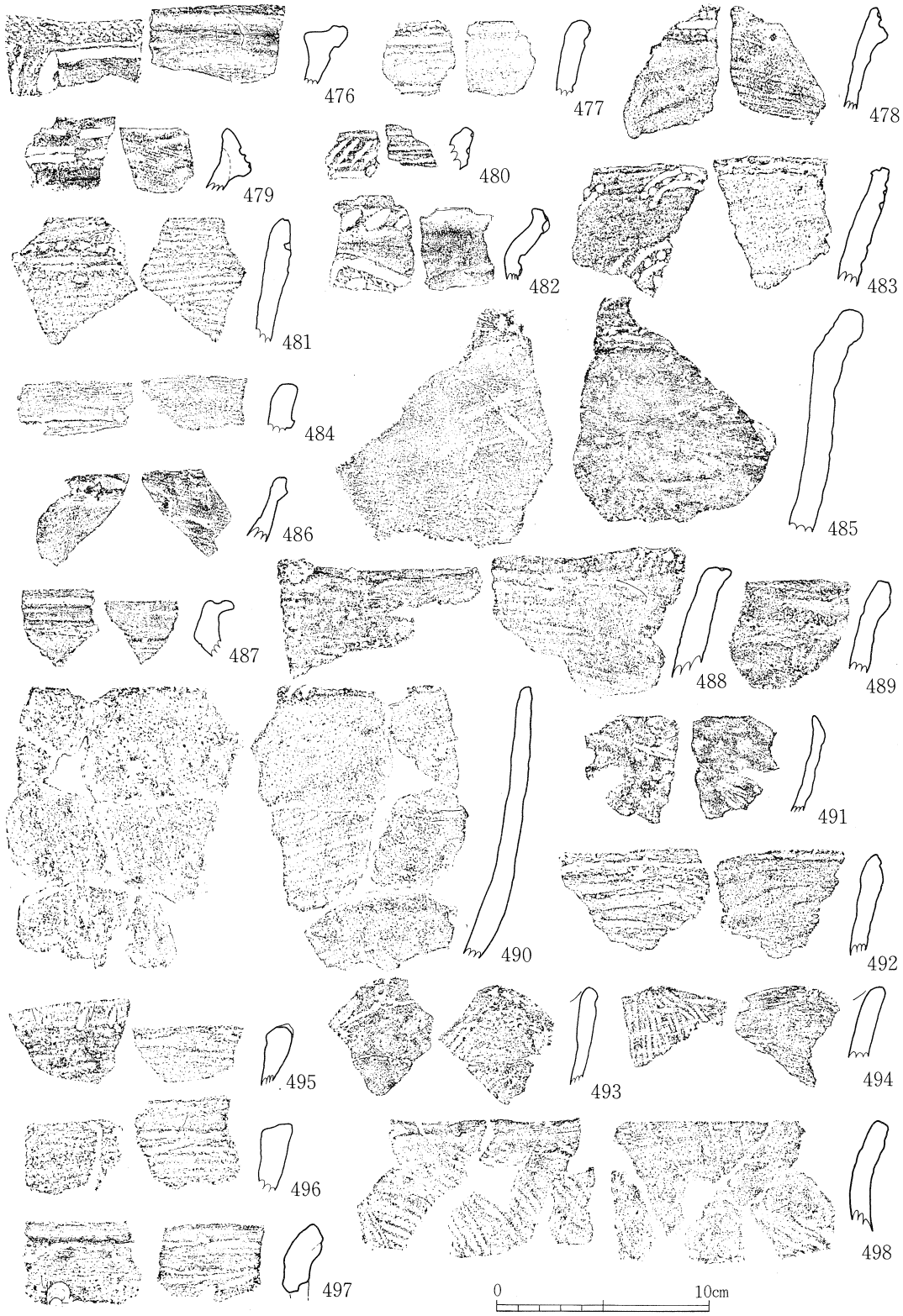
ＳＡ７（第47～49・53図）

ＳＡ７はｎ－30・31に位置し、長径330cm、短径315cm、深さ28cmの円形プランである。この住居の真ん中に径20cm、深さ41cmと径20cm、深さ32cmの２個のピットがあり、建て替えと考えられる。壁際には径20cm、深さ30～50cmのピットが８個巡っており、ピットの間隔から５個は同時期のものと推定される。この５個のピットの中心は北側のピットである。残りの３個のピットが中心の南側のピットに伴うと考えられる。ピットの建て替えの先後関係は把握できなかった。埋土は古段階の住居（ＳＡ７Ａ）がアカホヤ粒をほとんど含まない暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/4）、新段階の住居（ＳＡ７Ｂ）が白色粒を多く含む暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/4）である。ＳＡ９とＳＡ10を切っている。

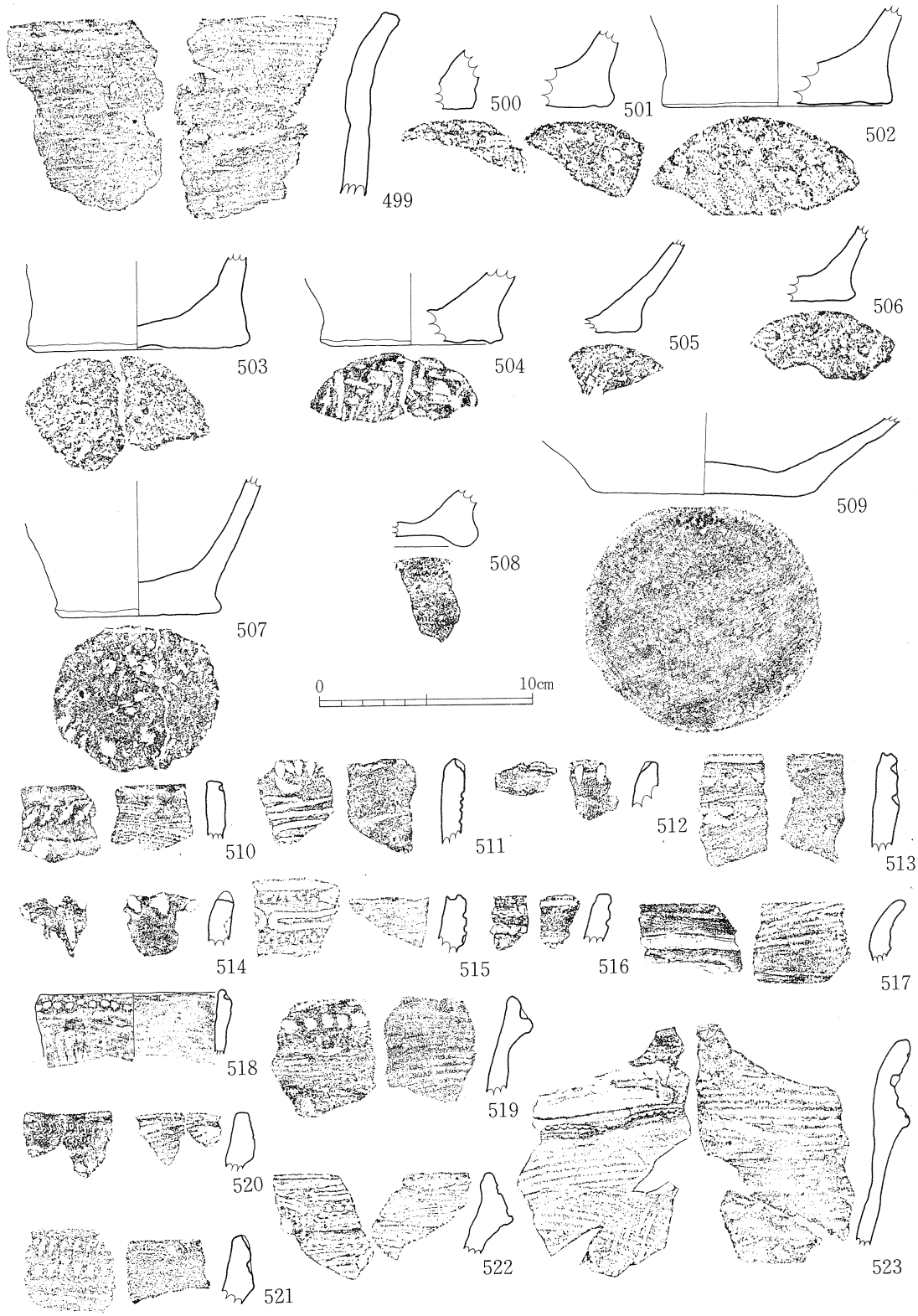


第41図　B地区 SA6 遺物出土状況図

第42図　縄文土器実測図（20）　　449～475 B地区 SA6



第43図　縄文土器実測図（21）　　476～498 B地区 SA 6



第44図　縄文土器実測図（22）　　499～509 B地区 SA 6　　510～523 B地区 SA 7

遺物は中央部に集中して出土している。515は口縁部文様帯が厚く肥厚し、刺突文と沈線文を施しており、Ⅳ類に相当する。511は口唇部に刻みを、口縁部に４条の沈線を施しており、Ⅴｃ類に相当する。518は口唇部をわずかに拡張させた狭い文様帯にヘラ刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。519は断面三角形の狭い文様帯にヘラの刺突文を施しており、Ⅶａ類に相当する。522は断面三角形の口縁部に２条沈線と刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。523は口縁部文様帯幅が最も広がり、上下の横方向の貝殻腹縁刺突文の間に２条の沈線を施している。524も口縁部文様帯幅が最も広がり上下のヘラ刺突文の間に２条の沈線と横方向の貝殻腹縁刺突文を施している。523・524はⅦｃ類である。531・532は口縁部が短く外反し、頸部に斜方向の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅷｂ類に相当する。530はⅧｂ類で、頸部に横方向の貝殻腹縁刺突文が２段である。535は渦巻状の沈線を施しており、磨消縄文土器と思われる。546は口縁部に刺突文を施したこぶ状突起を付けている。528は口縁部が内湾する口径22.3cmの無文土器で、口縁部に穿孔を１ケ所有する。537は口縁部がほぼ真直に伸びる口径23.5cmの無文土器である。545は口縁部が若干外反し、胴部が大きく張る口径24.8cmの無文土器である。550は口縁部が若干外反する口径23.0cmの無文土器である。528・537・545・550がすべて平口縁であるのに対して544は波状口縁である。底部は３点出土しているが、網代底はない。底部の形態は551・552が底面から真直に立ち上がるものであるのに対して553は上げ底である。552は底径7.8cmである。

土器片加工円盤は9.8gが１点出土している。

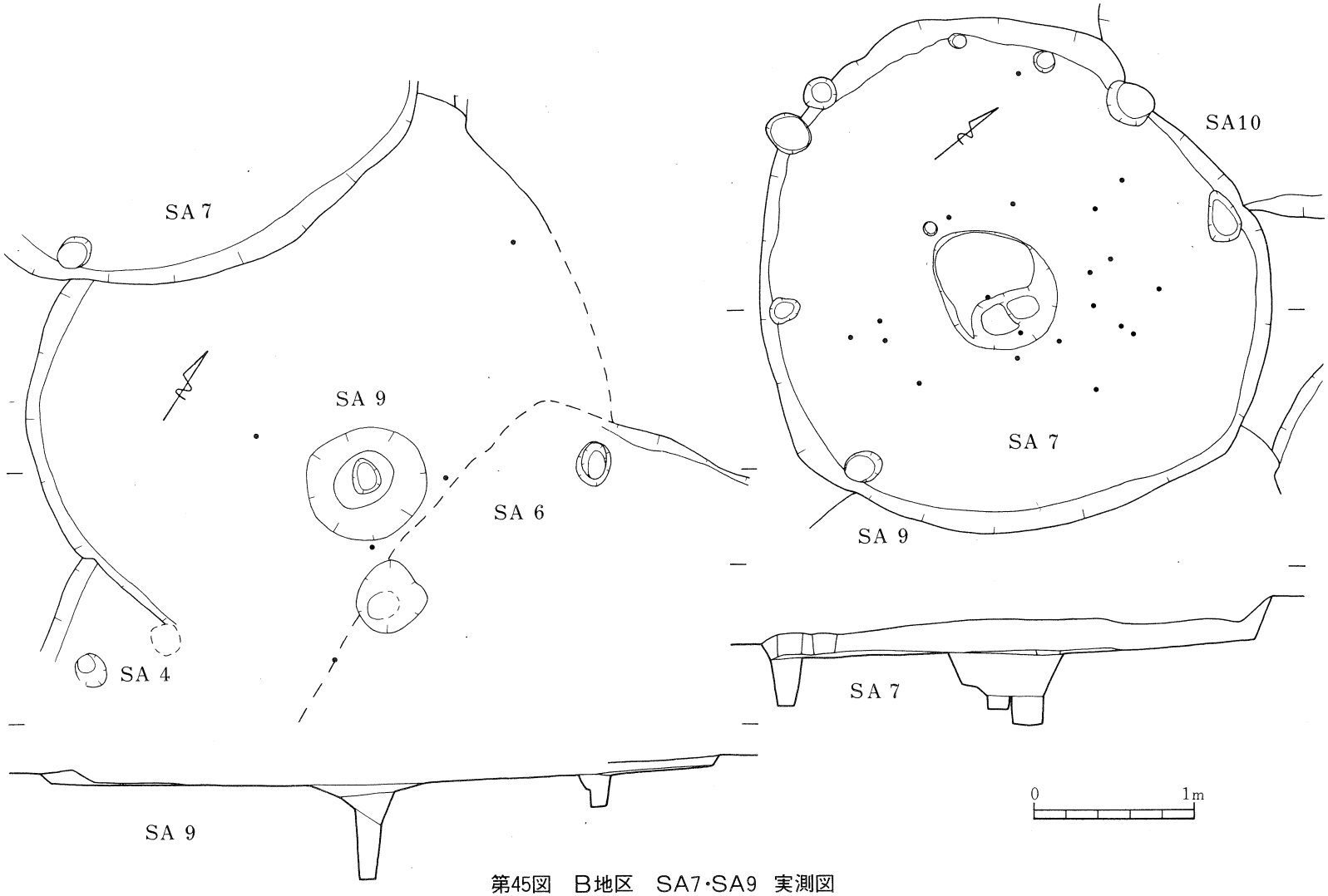
石器としては敲石１点（132）、磨製石斧１点（158）が出土している。

ＳＡ７Ａの時期は524のⅦｃ類の時期で、Ⅲｂ期である。ＳＡ７Ｂは531のⅧｂ類の時期でⅣａ期である。

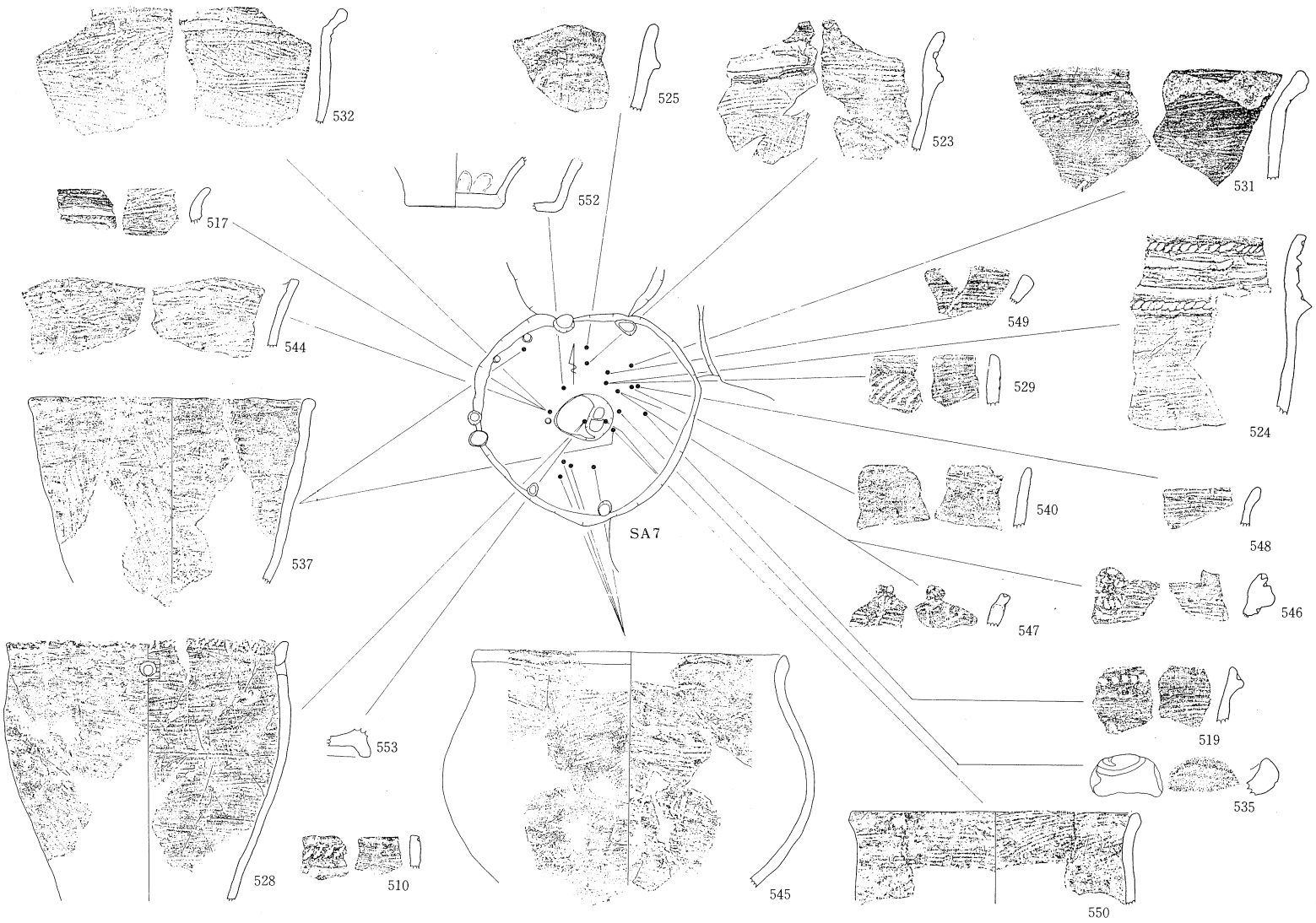
ＳＡ８（第47・50～55・57図）

ＳＡ８はｍ・ｎ－31・32に位置し、長径450cm、短径440cm、深さ25cmの円形プランである。土層断面によれば建て替えを１回行っている。古段階の住居（ＳＡ８Ａ）と新段階の住居（ＳＡ８Ｂ）がある。この住居の真ん中には長径25cm、短径15cm、深さ37cmのピットがあり、周囲に径15cm、深さ８～34cmのピットが４個巡っている。また中央のピットの際には長径105cm、短径70cm、深さ10cmの土坑がある。ＳＡ８ＡがＳＡ６に切られ、ＳＡ８ＢがＳＡ９を切っている。埋土はＳＡ８Ａが白色粒を少量含む褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　4/4）、ＳＡ８Ｂが白色粒を含む暗褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　3/3）である。

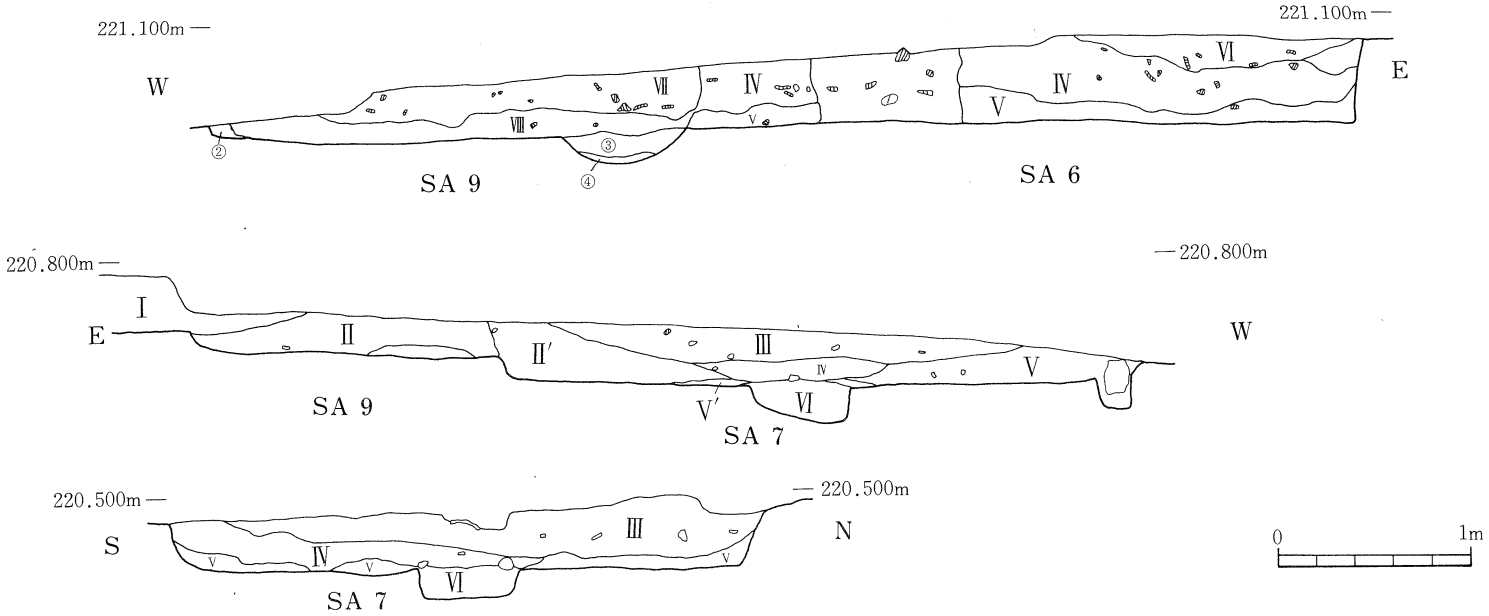
遺物は全面的に出土している。554は口唇部に押圧刻みを、口縁部に縦方向の沈線文を施している。565は口縁部をわずかに肥厚させた文様帯に２条の沈線の下位に刺突文を、口唇部に刻みを施しており、Ⅲｂ類に相当する。557は刺突文の下位に１条の沈線文を施しており、Ⅴｂ類に相当する。570は口縁部に楕円形状の沈線文とヘラ刺突文を、胴部上半部には



第45図　B地区　SA7・SA9　実測図



第46図　B地区　SA7 遺物出土状況図



Ⅰ 暗褐色土(10YR3/4) 白い砂粒や炭化物、黄褐色の砂粒を含む。固くしまる。砂質土。

Ⅱ 褐 色 土(10YR4/4) 白い砂粒、黄色パミス、炭化物を含む。砂質土Ⅰ層より明るく、白い砂粒が少ない。

Ⅱ′ 褐 色 土(10YR4/4) Ⅱ層にアカホヤ及びその下層の黒褐色土のブロックを含む。

Ⅱ″ 暗褐色土(10YR3/4) Ⅱ層よりやや暗い。黄色のアカホヤ塊がⅡ層より多い炭化物。

Ⅲ 暗褐色土(10YR3/4) 白色の大きめの砂粒が目立つ。炭化物を含む。アカホヤは殆ど含まない。しまっている。砂質土

Ⅳ 暗褐色土(10YR3/4) Ⅲ層と同色で白い砂粒が殆ど含まれない。大きなアカホヤブロックを含む。砂質土。

Ⅴ 暗褐色土(10YR3/4) Ⅲ層と同色でアカホヤ粒や白い砂粒は殆ど含まないがアカホヤ下層の黒褐色ブロックを含む。

Ⅴ′ 暗褐色土(10YR3/4) 床面と同じアカホヤの下部パミスと黒褐色を含む層。やや粒性をもつ砂質土。

Ⅵ 暗褐色土(10YR3/3) 砂質でやや粘質があり柔かい。

Ⅳ にぶい黄褐色土(10YR4/3) やや粘質。アカホヤ・白い砂粒・砂礫・炭化物を含む。土器も上～下層に含む。

Ⅴ にぶい赤褐色土(5YR4/4) 黒色のブロックを含む。固くしまる。レキ(2～3cm)を含む。アカホヤ砂粒も含まれる。

Ⅵ 褐 色 土(10YR4/6) 土器・アカホヤ・白い砂粒・レキを含む。Ⅳ層に類似。

Ⅶ 暗褐色土(10YR3/4) 固くしまる。砂粒・白い砂粒を含む。アカホヤ・炭化物も少量含む。土器包含層。

Ⅷ 褐 色 土(10YR4/6) Ⅶ層に類似。Ⅶ層よりアカホヤを多く含む。土器も少量含む。やや粘質。

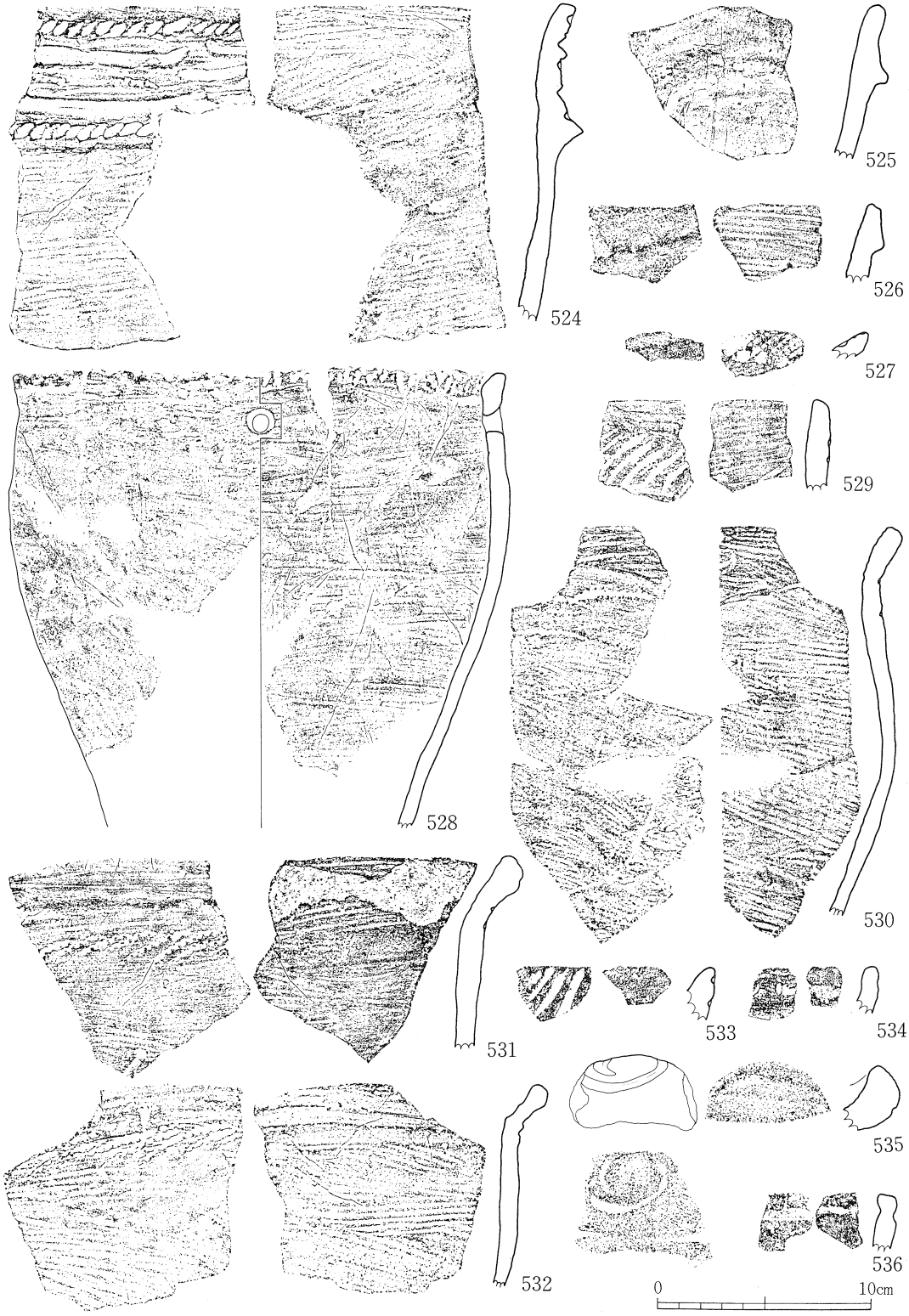
① 褐 色 土(7.5YR4/3) 炭化物・砂粒・レキ(砂岩)を含む。固くしまる。

② Ⅵ層とアカホヤブロックのまじり。

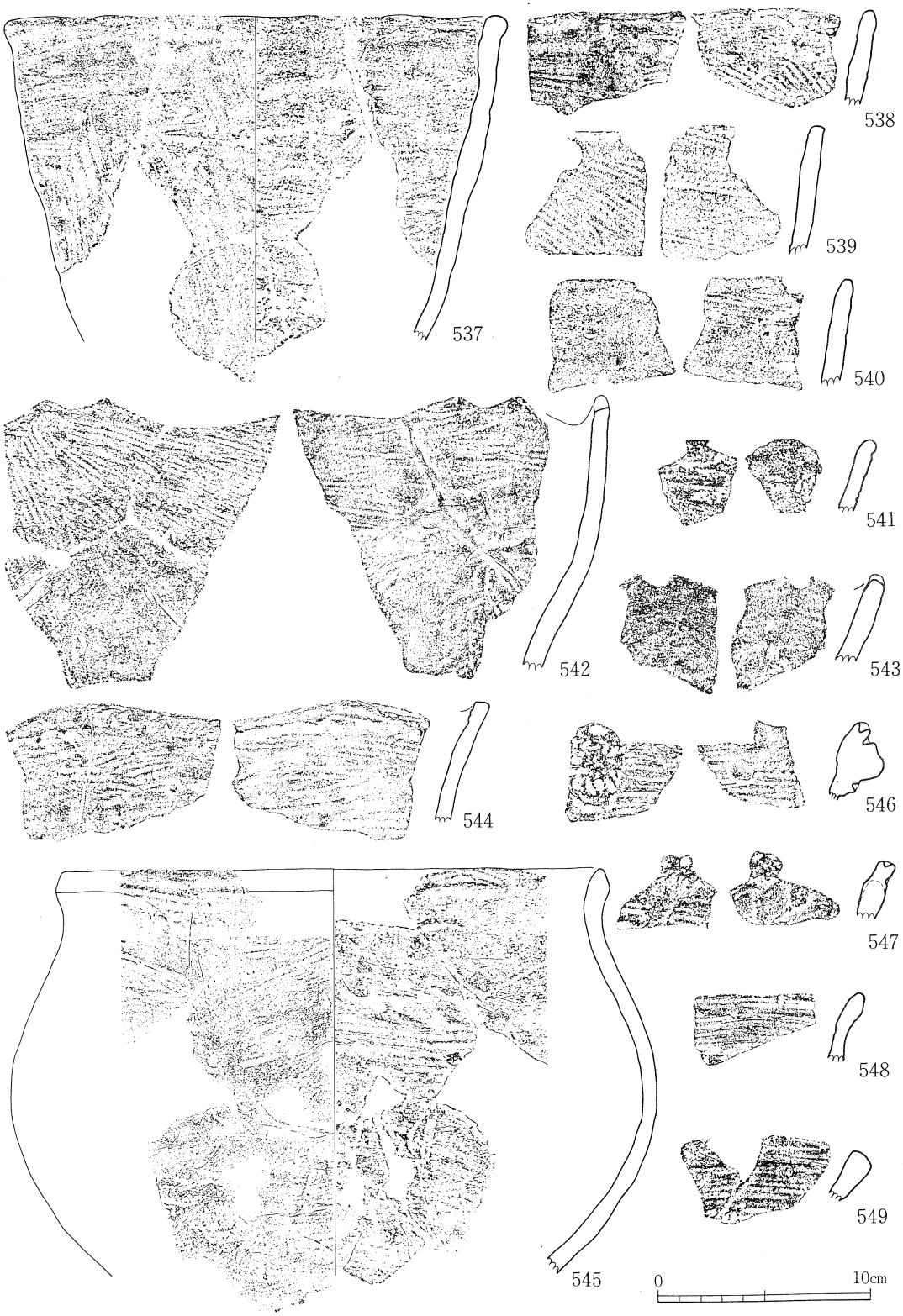
③ にぶい赤褐色土(5YR4/4) アカホヤ・炭化物を少量含む。

④ にぶい褐色土 (7.5YR6/3) 炭化物を少量含む。粘質土。

第47図 B地区 SA6～SA9 土層断面図



第48図　縄文土器実測図（23）　　524～536 B地区 SA7



第49図　縄文土器実測図（24）　　537～549 B地区 SA 7

沈線を鋸歯状に施している。571は口縁部が若干外反し、ヘラ刺突文と沈線文を施している。592は口縁部をわずかに肥厚させた文様帯にヘラ刺突文を施しておりⅢｂ類に相当する。569は厚く肥厚した口縁部文様帯に沈線文と刺突文を、口唇部に刻みを施しており、Ⅳａ類に相当する。572は口縁部が若干外反し、２条の沈線間にヘラ刺突文を施しており、Ⅳｂ類かⅤａ類に相当する。603は口縁部が短く外反し、口縁端部にヘラ刺突文を、胴部上半部に沈線文を施しており、Ⅴｂ類に相当する。574は若干外反し、沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。582は口縁部が若干外反し、沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。600は口縁部内面に１条の沈線の前後に貝殻腹縁刺突文とヘラ刺突文を施しており、Ⅵａ類に相当する。585は沈線文と縄文を施している。599は上向きの口縁部に３条の沈線を施している。593は断面三角形の口縁部に２条の沈線文の上下に貝殻腹縁による刺突文を施しており、Ⅶｂ類に相当する。591は口縁部文様帯下部の肥厚部分は明瞭で著しく張り出し、貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅶｃ類に相当する。601は口縁部が緩やかに伸びており、貝殻腹縁刺突文を斜方向に施している。608は口縁部がほぼ真直に伸び、口唇部が凹気味で、胴部が若干張る無文土器である。８点の底部のうち７点が網代底である。底部の形態は621のように底面からほぼ真直に伸びるもの６点、624のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの２点である。底径6.0cmが１点、9.2cmが１点、10.2～10.5cmが２点である。

土器片加工円盤は10.0～32.0gが７点出土している。

石器としては磨製石斧１点（159）が出土している。

ＳＡ８Ａの時期は592のⅢｂ類の時期で、Ⅰｂ期である。ＳＡ８Ｂの時期は593のⅦｂ類の時期でⅢａ期である。

ＳＡ９（第45・47・56～58図）

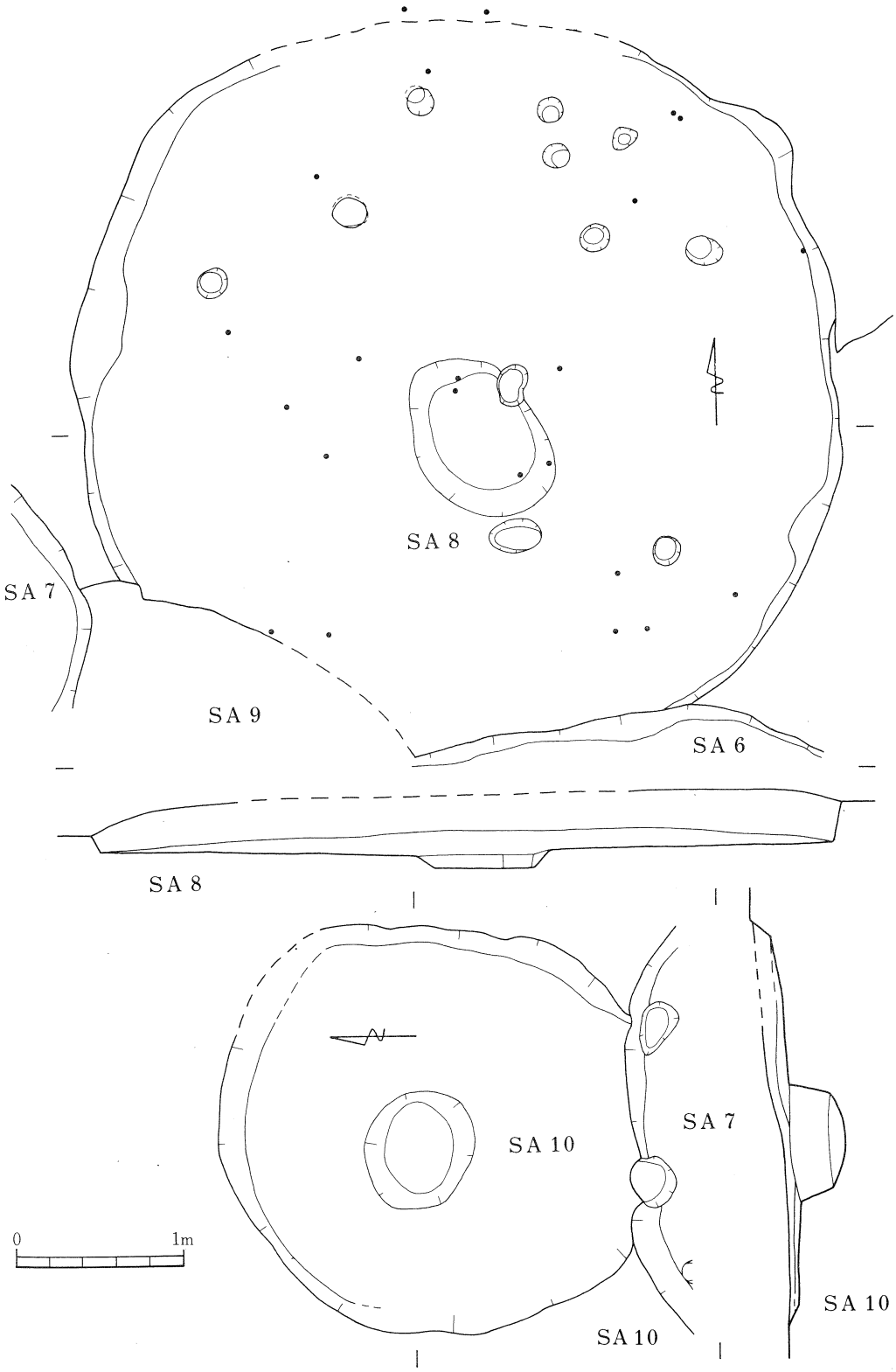
ＳＡ９はｎ－31に位置し、径360cm、深さ６cmの円形プランである。この住居の真ん中に二段掘りのピットがあり、一段目は長径80cm、短径75cm、深さ７cmで、二段目は長径20cm、短径15cm、深さ56cmである。この住居はＳＡ４・ＳＡ６・ＳＡ８を切り、ＳＡ７に切られている。住居の埋土は白色粒・黄色パミスを含む褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　4/4）である。

遺物量は少ない。625は口唇部に押圧刻みを、口縁部に２条の沈線を単位とする文様を施しており、Ⅱｂ類に相当する。627・628は口縁部に貝殻腹縁刺突文と３条の沈線文を施しており、Ⅱｂ類に相当する。630は波頂部に刻みを、口縁部下位に沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。６点の底部のうち３点が網代底である。647の上げ底を除いて、645・646のように底面から真直に立ち上がる底部である。底径は10.0cmと12.2cmが各１点である。

土器片加工円盤は26.0gが１点出土している。

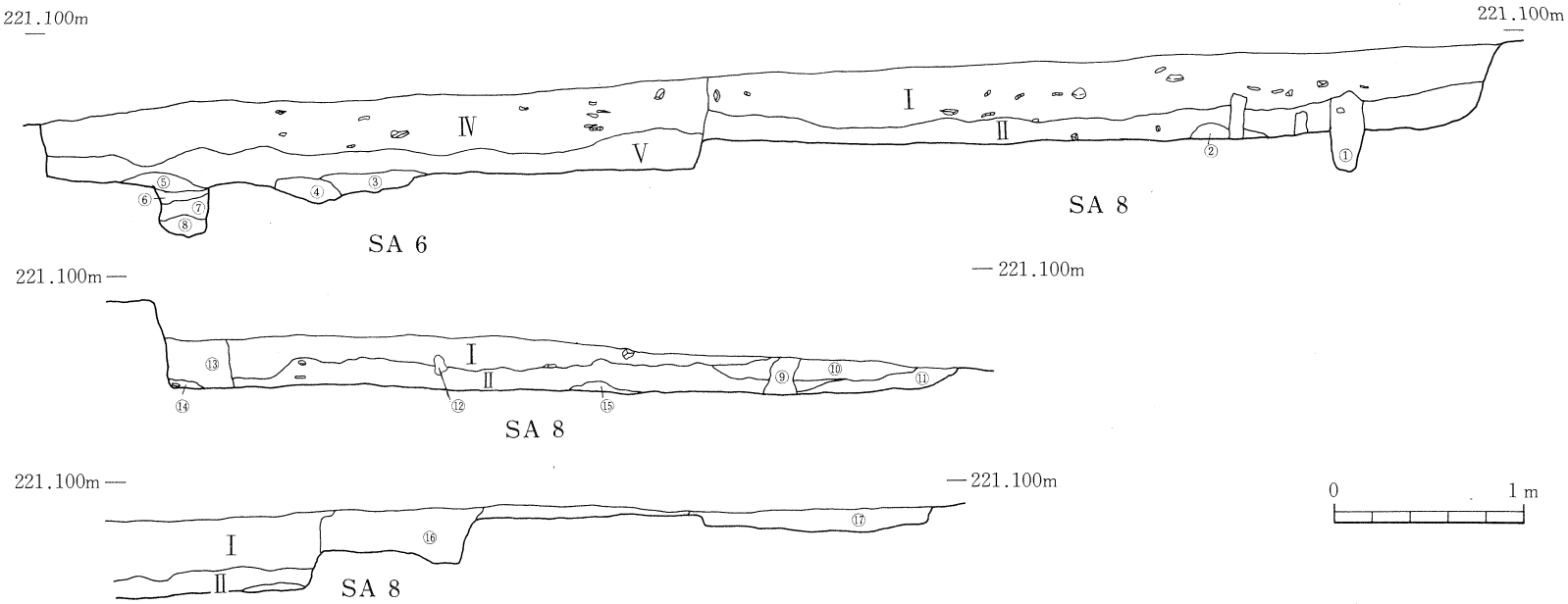
石器としては磨石１点（120）、敲石１点（137）が出土している。

ＳＡ９の時期は630のⅤｃ類の時期で、Ⅱｂ期である。



第50図　B地区　SA8・SA10　実測図

第51図　B地区 SA8 遺物出土状況図



Ⅰ 暗褐色(7.5YR3/3) 固くしまる。白い砂粒。枯木や炭化物を含む。土器も上～下層に包含。

Ⅱ 褐　色(7.5YR4/4) 炭化物や白い砂粒を少量。固くしまる。

Ⅳ にぶい黄褐色土(10YR4/3) やや粘質。アカホヤ・白い砂粒・砂礫・炭化物を含む。土器も上～下層に含む。

Ⅴ にぶい赤褐色土(5YR4/4) 黒色のブロックを含む。固くしまる。レキ(2～3cm)を含む。アカホヤ・砂粒も含まれる。

① 黒褐色土(10YR2/3) やや粘質あり。土器包含。

② 明褐色土(7.5YR) やや粘質。白い砂粒を微量に含む。

③ 明褐色土(7.5YR5/6) アカホヤブロック・暗褐色ブロックと包含。

④ 橙 色 土(7.5Y R6/6) 固くしまる。2～3mmの砂粒を含む。

⑤ にぶい黄橙色土(10YR7/4) アカホヤ。1～2mmの砂粒。粘質あり。

⑥ にぶい褐色土(7.5YR5/4) 暗褐色のブロックを含む。粘質あり。

⑦ 褐 色 土(7.5YR4/4) アカホヤ。砂粒を少量含む。

⑧ 褐 色 土(7.5YR4/6) 暗褐色ブロックを含む。

⑨ 暗褐色土(7.5YR3/4) 固くしまる。炭化物を含む。

⑩ 褐 色 土(10YR4/4) 白い砂粒。アカホヤ、土器を少量含む。Ⅱに類似。

⑪ 褐 色 土(7.5YR4/4) 白い砂粒、炭化物を少量含む。

⑫ にぶい黄橙色土(10YR6/4)

⑬ 暗褐色土(7.5YR3/3) 白い砂粒・砂粒・炭化物を含む。粘質あり。

⑭ にぶい褐色土(7.5YR6/3) 粘質あり。

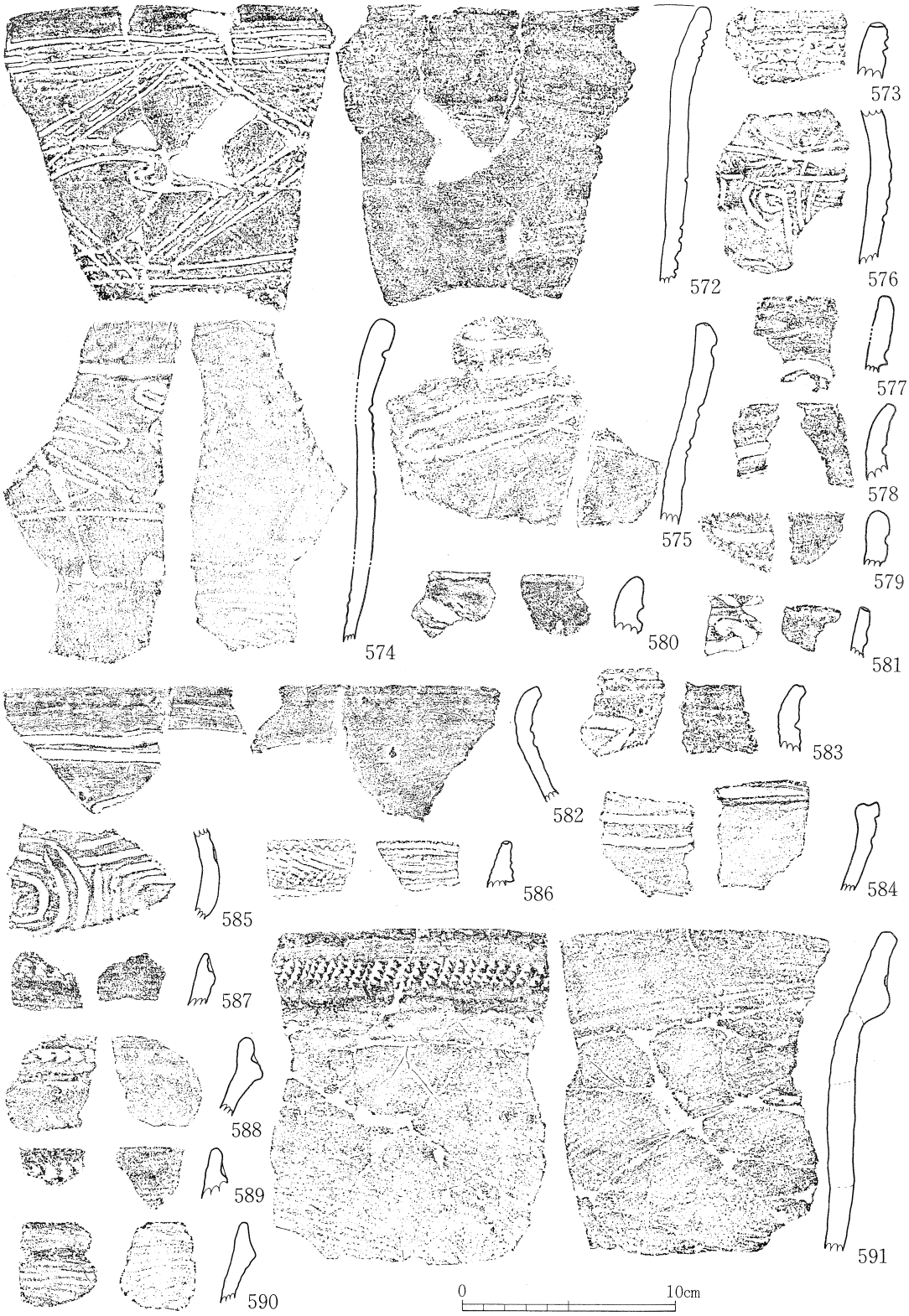
⑮ 暗褐色土(10YR3/4) Ⅱに類似。

⑯ 暗褐色土(10YR3/4) 白い砂粒、炭化物を少量含む。

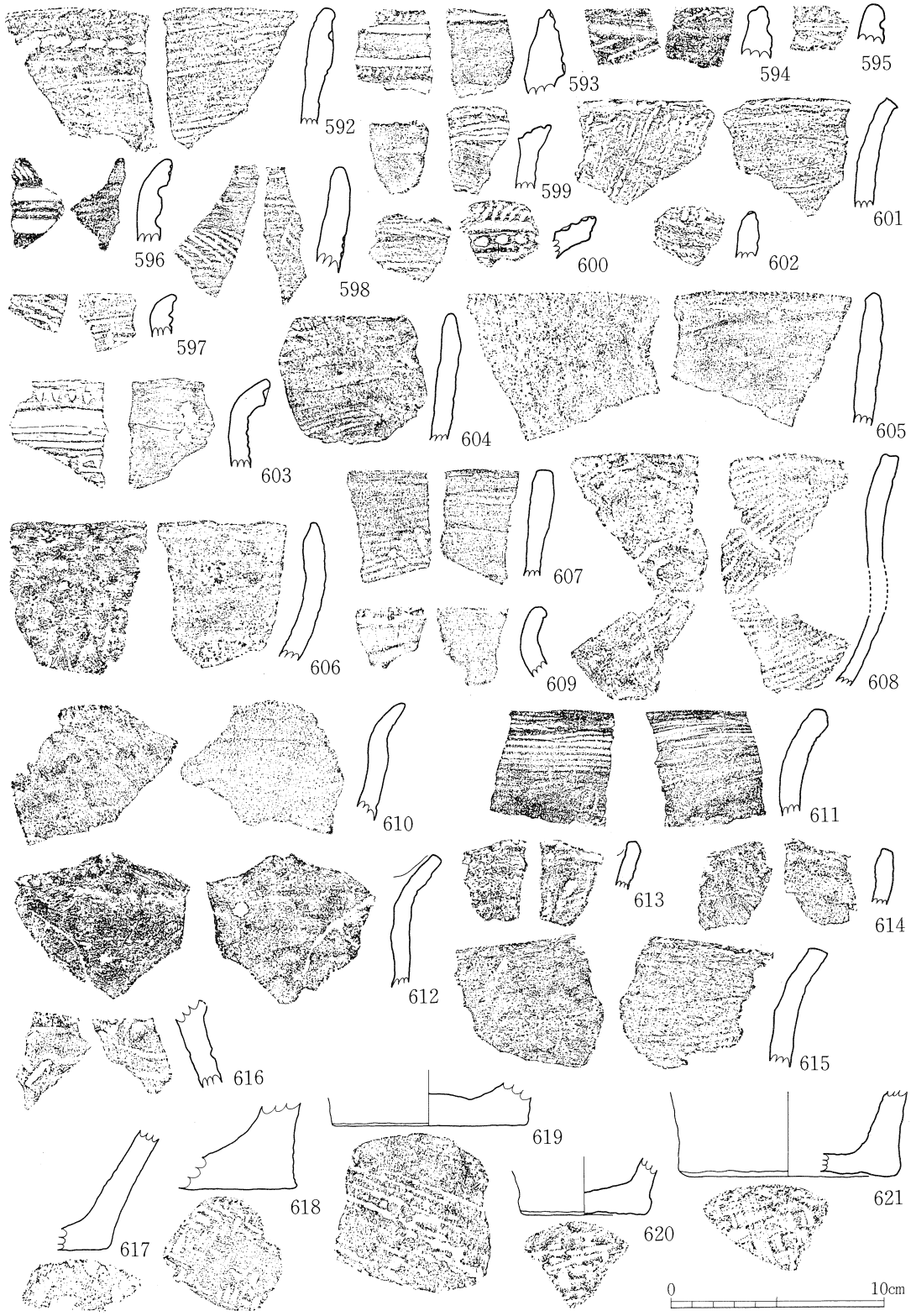
⑰ にぶい褐色(7.5YR5/3) 固くしまる。白い砂粒を少量含む。

第52図　B地区　SA6・SA8　土層断面図

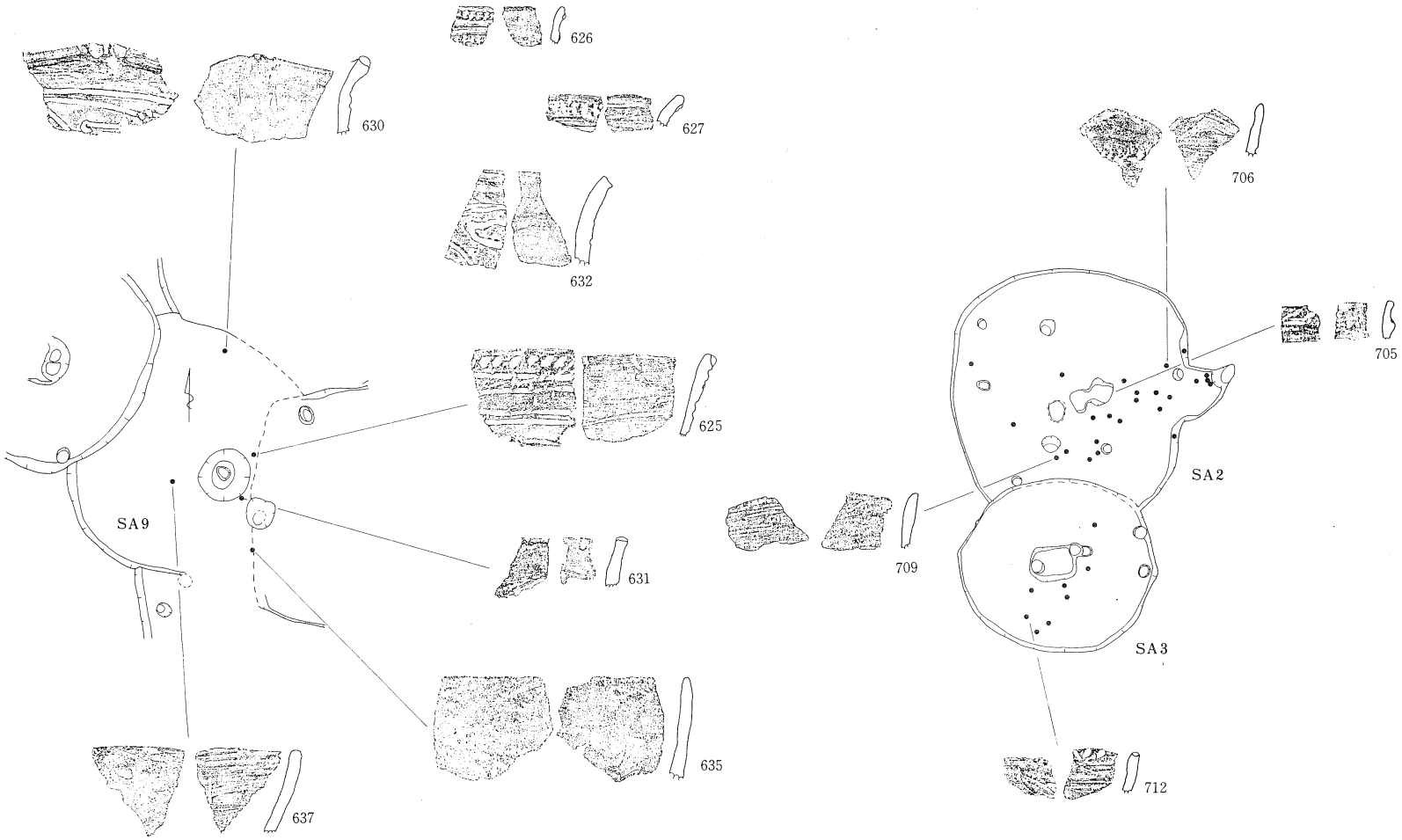
第53図　縄文土器実測図（25）　　550～553 B地区 SA 7　　554～571 B地区 SA 8



第54図　縄文土器実測図（26）　　572～591 B地区 SA 8



第55図　縄文土器実測図（27）　　592～621 B地区 SA 8



第56図　B地区 SA9　C地区SA2・SA3 遺物出土状況図

第57図　縄文土器実測図（28）　　622～624 B地区 SA 8　　625～645 B地区 SA 9

第58図　縄文土器実測図（29）

646～648 B地区 SA 9
652～661 B地区 SC 1
649～651 B地区 SA10

ＳＡ10（第50・58図）

ＳＡ10はｍ・ｎ－30・31に位置し、長径250cm、短径240cm、深さ９cmの円形プランである。この住居の真ん中には長径70cm、短径65cm、深さ35cmのピットがある。ＳＡ７に切られている。

遺物は少量だけ出土している。649・650が口縁部がほぼ真直に伸びるのに対して651は若干外反している無文土器である。

ＳＡ10の時期は切り合いからⅢｂ期のＳＡ７Ａの前段階のⅢａ期である。

ＳＡ11

ＳＡ11はℓ－31に位置し、長径340cm、短径280cm、深さ36cmの円形プランである。ＳＡ12に切られている。

遺物は少量出土している。土器片加工円盤の20.0ｇが２点出土している。

ＳＡ12

ＳＡ12はℓ－31に位置し、長径360cm、短径320cm、深さ17cmの円形プランである。ＳＡ11を切っている。

ＳＡ13

ＳＡ13はｋ－31に位置し、径280cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。土器片加工円盤が20.5ｇと23.5ｇが各１点出土している。

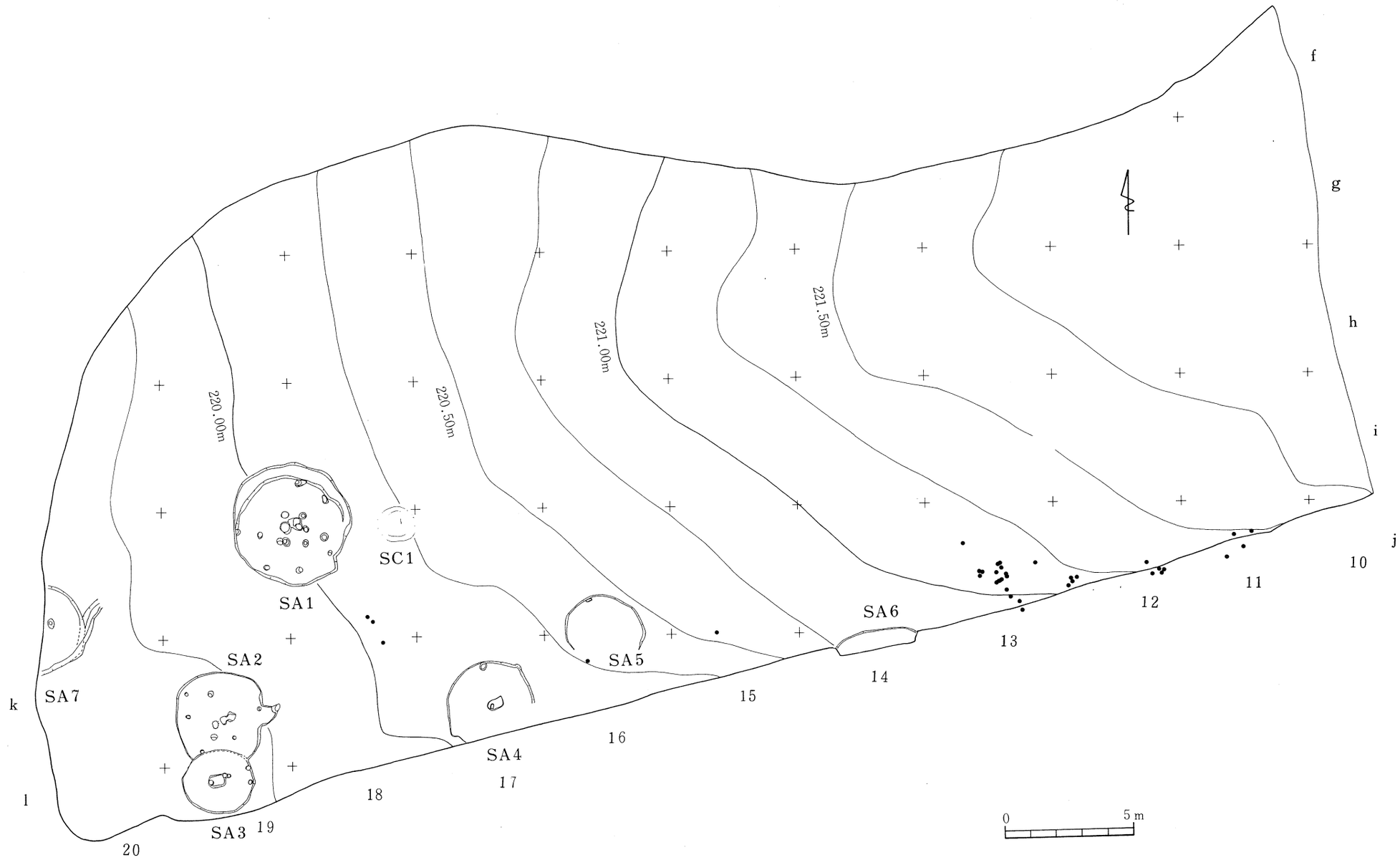
Ｃ地区（第59図）

Ｃ地区の竪穴住居は調査区の東端部の南側ｉ－14～21に８軒分布している。

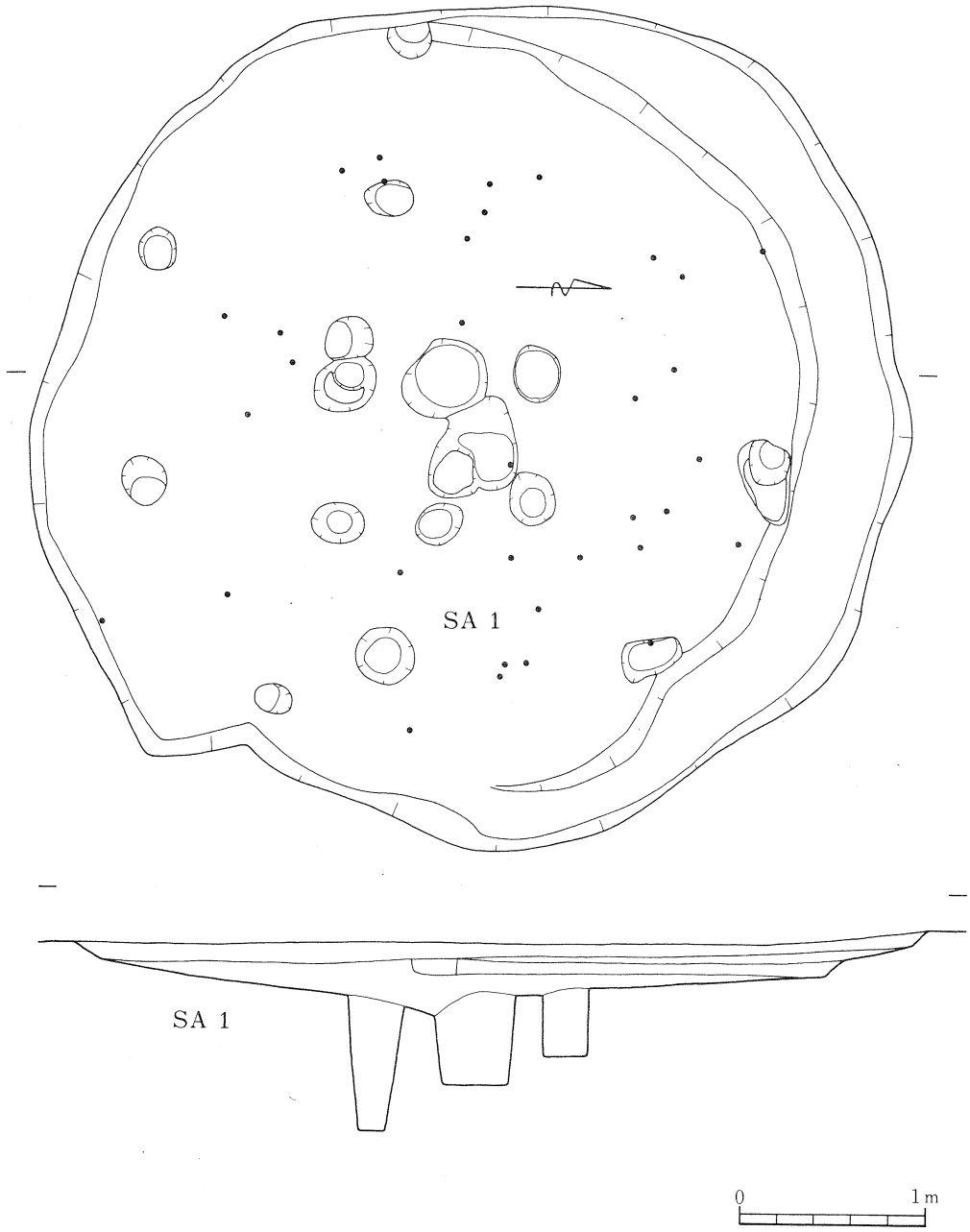
ＳＡ１（第60～63・66図）

ＳＡ１はｉ・ｊ－18・19に位置する。この住居は建て替えを１回行っている。古段階の住居（ＳＡ１Ａ）は長径460cm、短径430cm、深さ７cmの円形プランである。壁際に径20～25cm、深さ40～60cmのピットが６個巡っている。新段階の住居（ＳＡ１Ｂ）は長径425cm、短径410cm、深さ22cmの円形プランである。この住居は真ん中に直径48cm、短径38cm、深さ38cmのピットがあり、このピットを中心として北に長径30cm、短径25cm、深さ37cmのピットが、南に長径35cm、短径30cm、深さ62cmのピットがある。

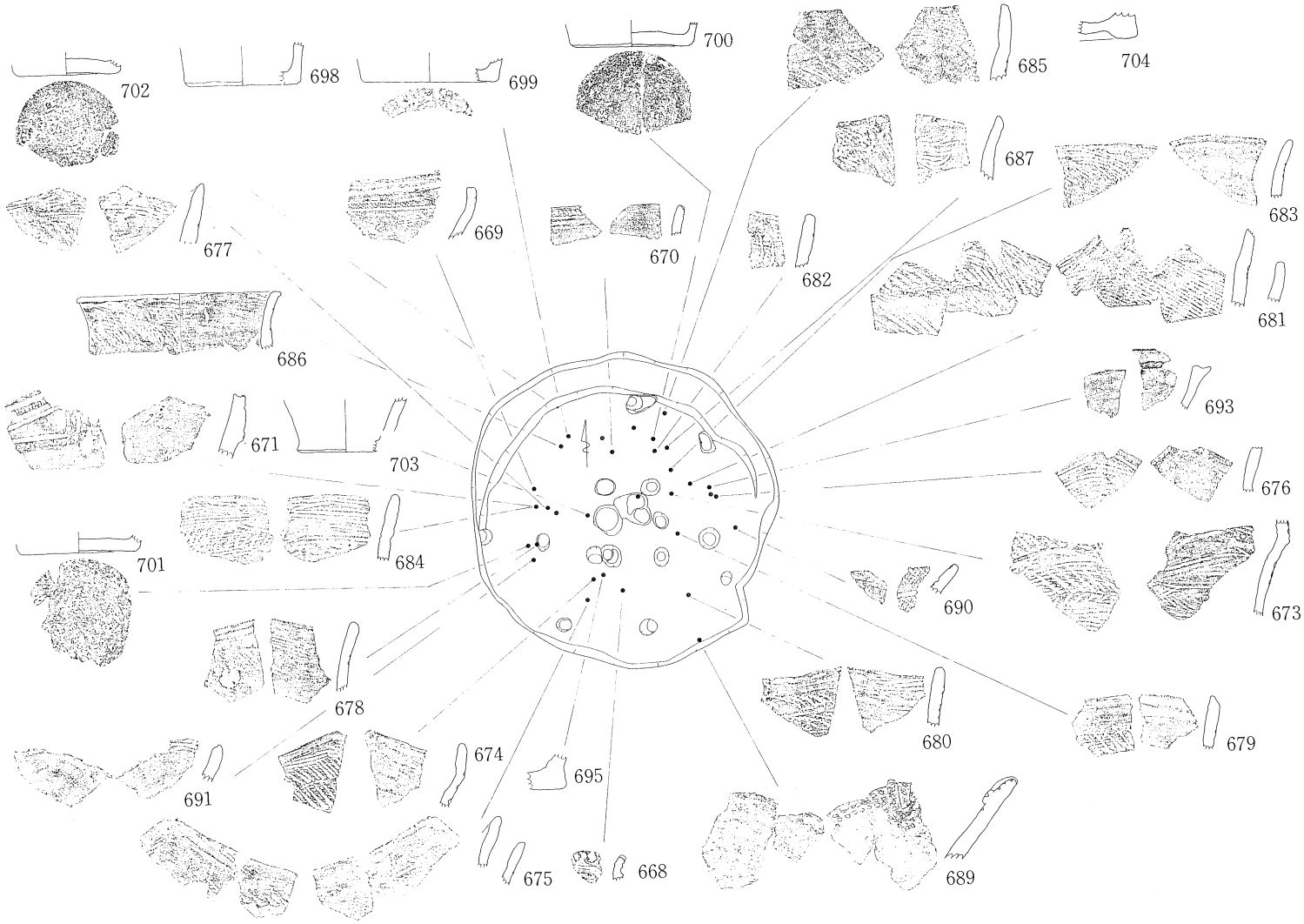
遺物は北半分に集中している。669は内湾する口縁部に２条の沈線と磨消縄文を施しており、Ⅸ類に相当する。671は口縁部をわずかに肥厚させた文様帯に沈線文と刺突文を施しており、Ⅲｂ類に相当する。668は口唇部に刻みを、口縁部に沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。690は１条の沈線の上下にヘラによる格子目文を施している。674は口縁部断面の逆「く」字形の屈曲が間延びし、その上下に貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅶｄ類に相当する。681は波状口縁で、くびれ付近から上がほぼ真直に伸び１条の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅷｂ類に相当する。686は短く外反する口縁部下位の頸部に２条の貝殻腹縁刺突文を



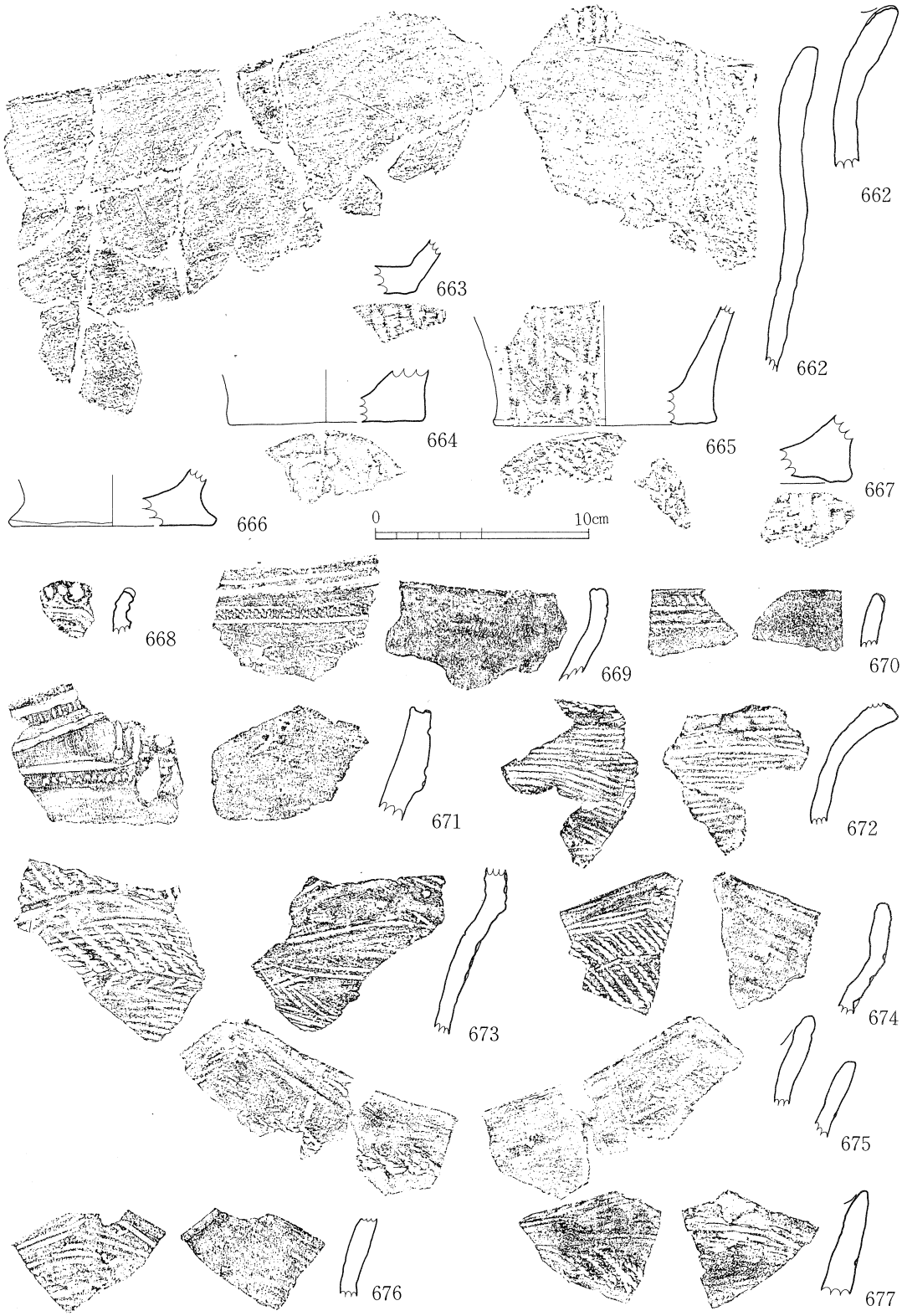
第59図　C地区　遺構分布図



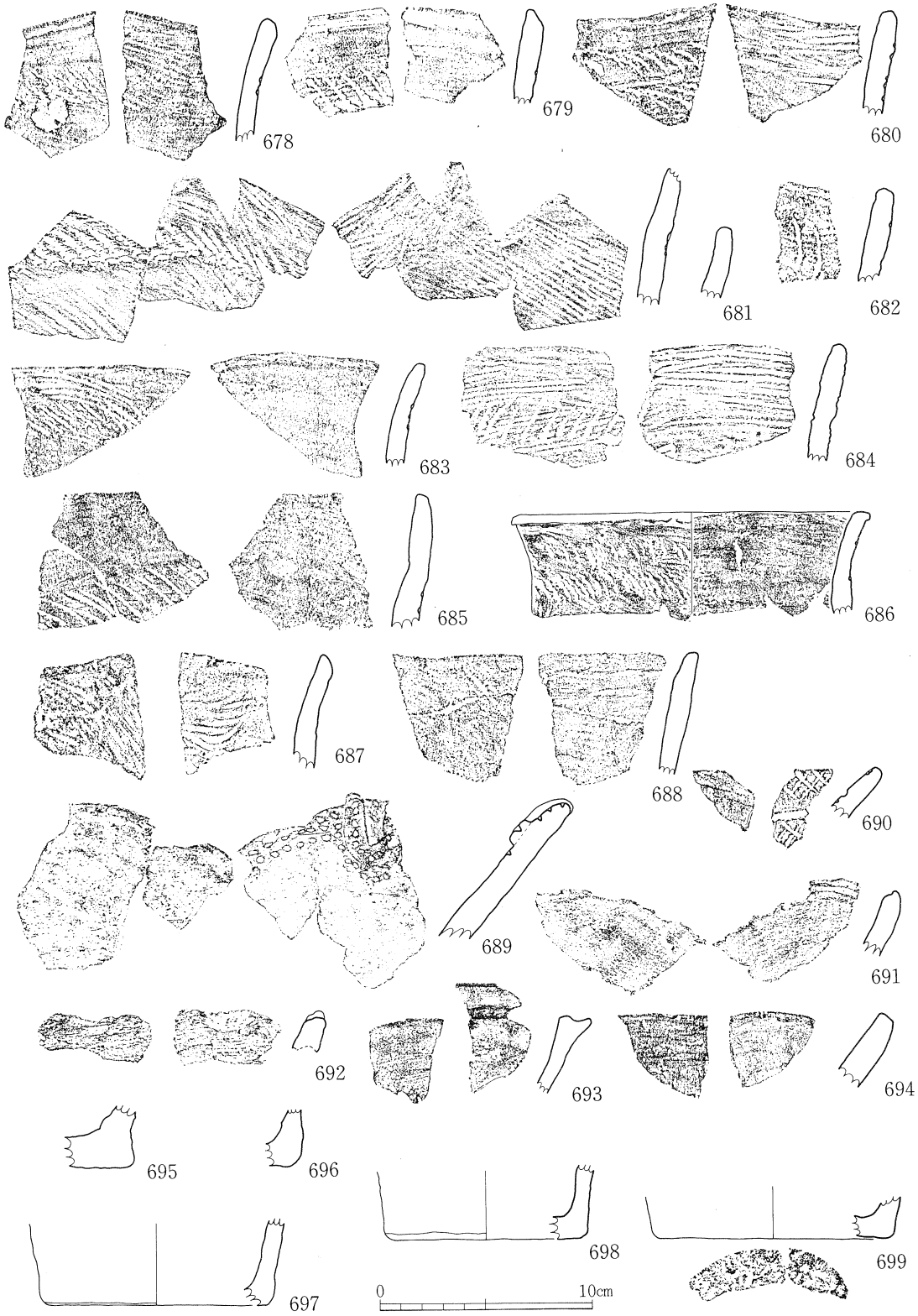
第60図　C地区　SA1 実測図



第61図　C地区SA1遺物出土状況図



第62図　縄文土器実測図（30）　　662～667 B地区 SC 1　　668～677 C地区 SA 1



第63図　縄文土器実測図（31）　　678～699 C地区 SA 1

施している。多くの破片はⅧｂ類に相当する。689は脚台付き皿の坏部で、坏部の口縁部の内面にU字形に粘土紐を貼りつけ刺突文を、口縁部に２条に刺突文を施している。10点の底部のうち２点が網代底である。底部の形態は698のように底面から真直に立ち上がるもの７点、703のように外方へ張り出すもの２点、上げ底１点である。底径は8.0cmと8.6cmが各１点、9.4cmと9.5cmが各１点、10.0cmと10.4cmが各１点、11.0cmが１点である。

土器片加工円盤は14.0～61.0gが５点出土している。

石器としては打製石鏃1点（197）が出土している。

ＳＡ１Ａの時期は674のⅦｄ類の時期で、Ⅲｂ期である。ＳＡ１Ｂの時期は681のⅧｂ類の時期で、Ⅳａ期である。

ＳＡ２（第56・64～66図）

ＳＡ２はｋ－19に位置し、長径370cm、短径335cm、深さ６cmの円形プランである。この住居は南北方向に径22cm、深さ44cmのピットと径25cm、深さ24cmのピットが配置されている。ＳＡ３に切られている。

遺物は少量出土している。705は口縁部をわずかに肥厚させ、沈線文を施しており、Ⅶｂ類である。706は波状口縁で貝殻腹縁刺突文を１条施している。708はほぼ真直な口縁部に１条の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅷｂ類である。709は口縁部がほぼ真直に伸びる無文土器である。底部は２点出土しているが、網代底はない。

土器片加工円盤は4.1～59.8gが５点出土している。

石器としては磨石１点（126）が出土している。

ＳＡ２の時期は708のⅧｂ類の時期でⅣａ期である。

ＳＡ３（第56・64～66図）

ＳＡ３はℓ－19に位置し、長径280cm、短径250cm、深さ11cmの円形プランである。ＳＡ２を切っている。この住居の真ん中に長さ65cm、幅50cm、深さ16cmの浅い土坑があり、その中の端に東西方向に径20cm、深さ29cmのピットと径20cm、深さ37cmのピットがある。

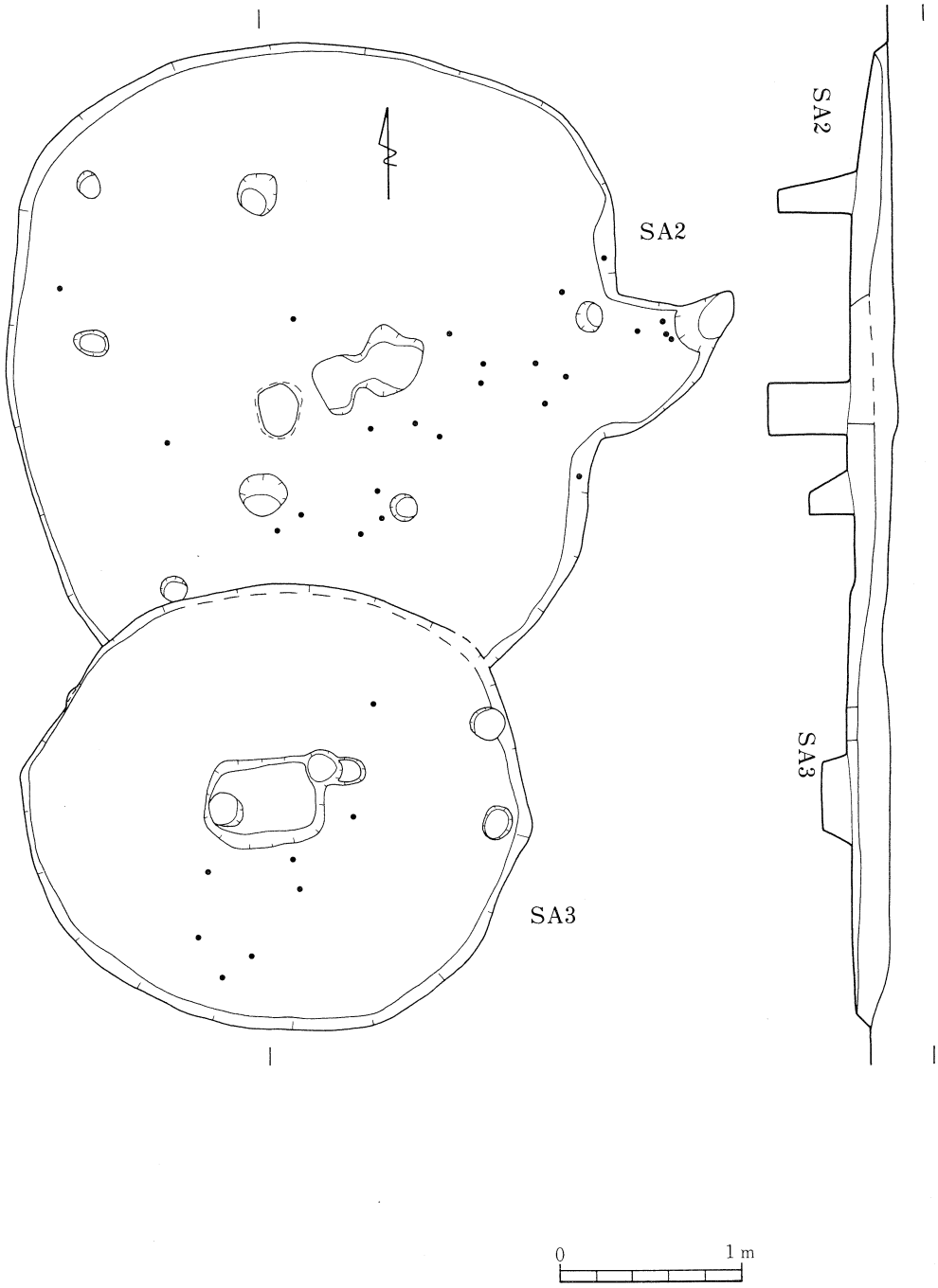
遺物は少量出土している。712は波頂部に刻みを施している。

ＳＡ３の時期は切り合いからⅣｂ期である。

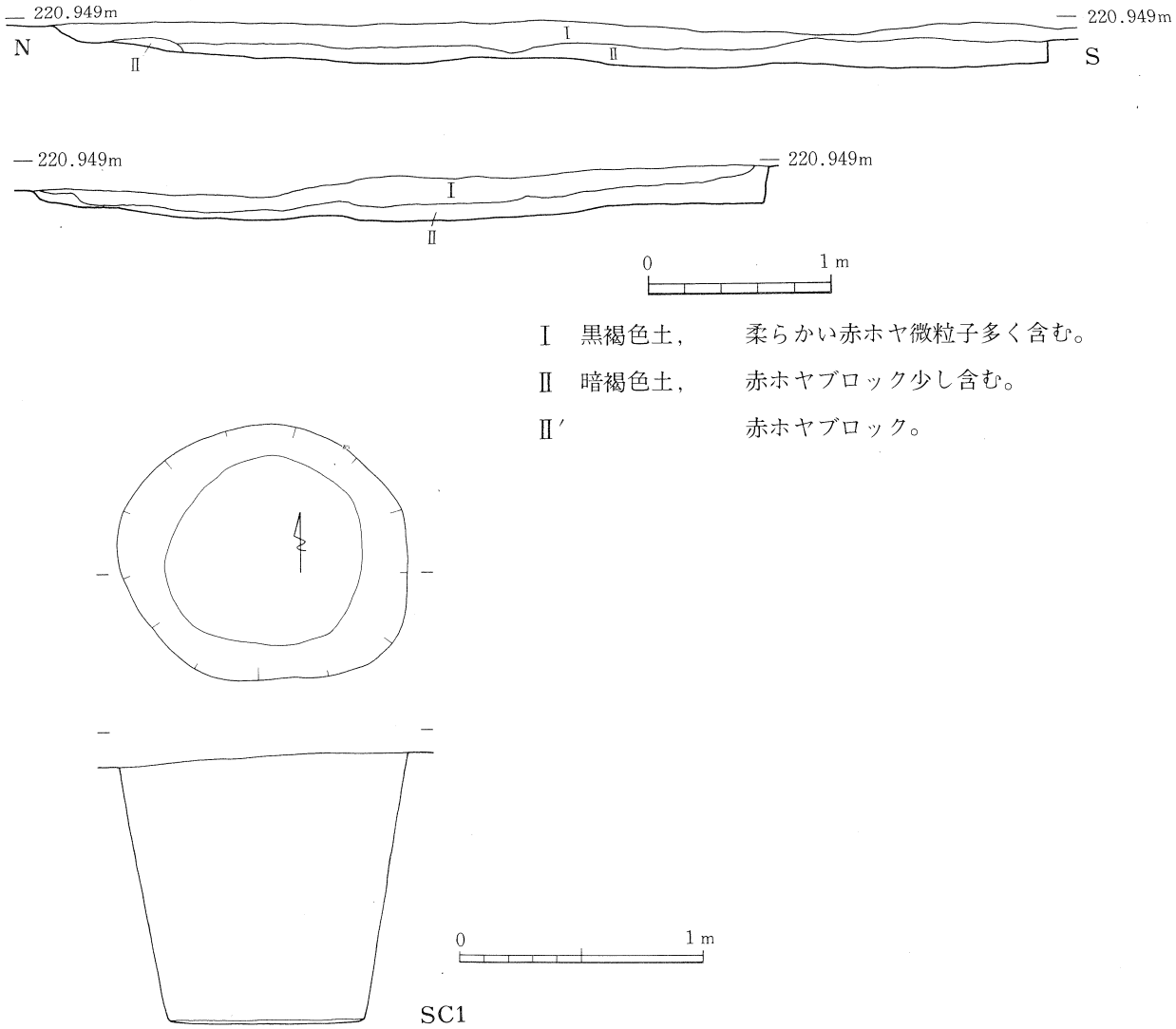
ＳＡ４（第66・67図）

ＳＡ４はｋ－17に位置し、長径350cm、短径250cm＋α、深さ31cmの円形プランである。南側は削平されている。この住居の真ん中に長径65cm、短径40cm、深さ15cmのピットがあり、そのピットの西側に長径20cm、短径15cm、深さ25cmのピットがある。

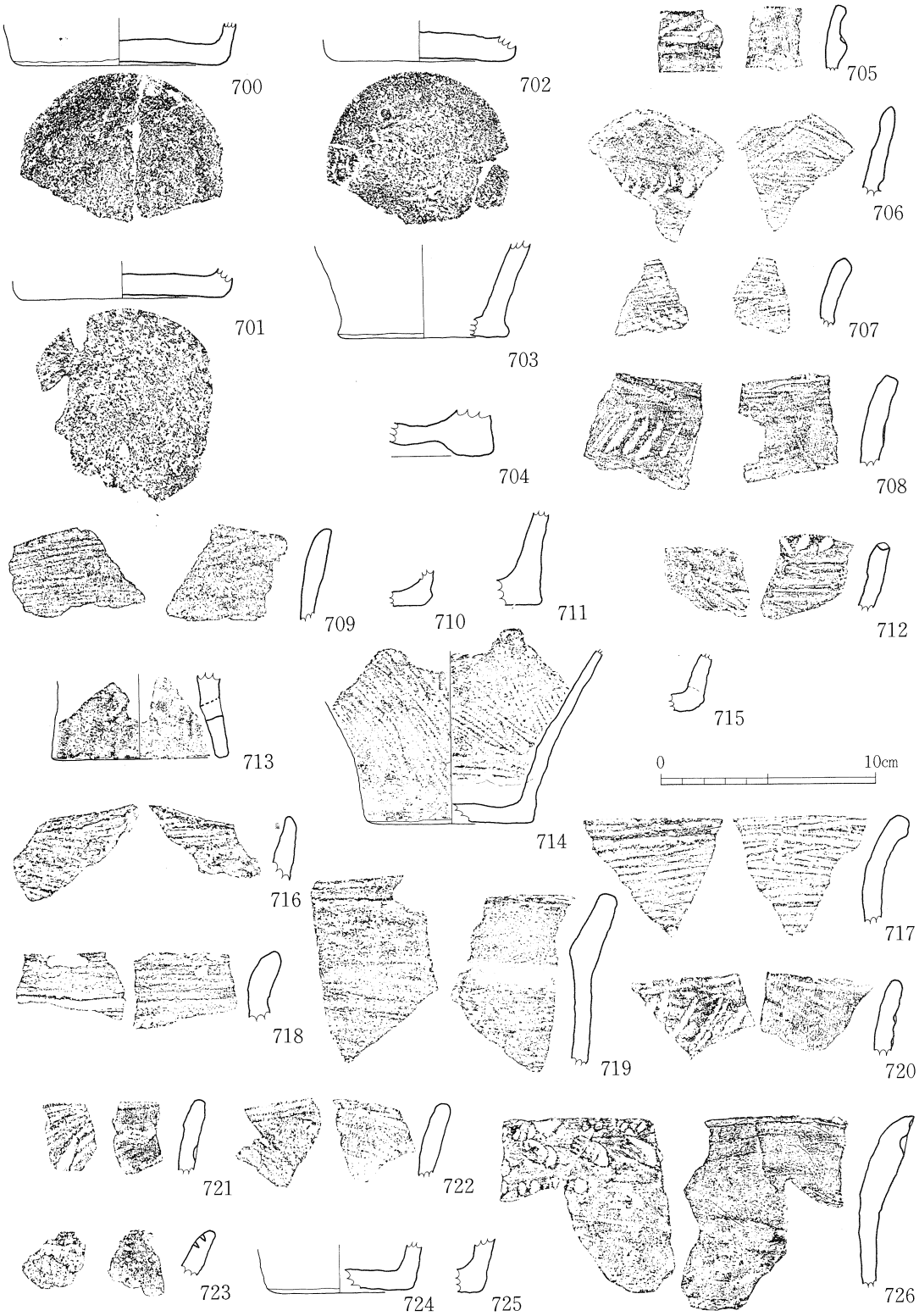
遺物は少量である。713は脚台付き皿の脚部で円形の穿孔を施している。底部は２点出土しているが網代底はない。714は底面から真直に立ち上がる底部で底面に白色物が付着している。



第64図　C地区SA2・SA3実測図

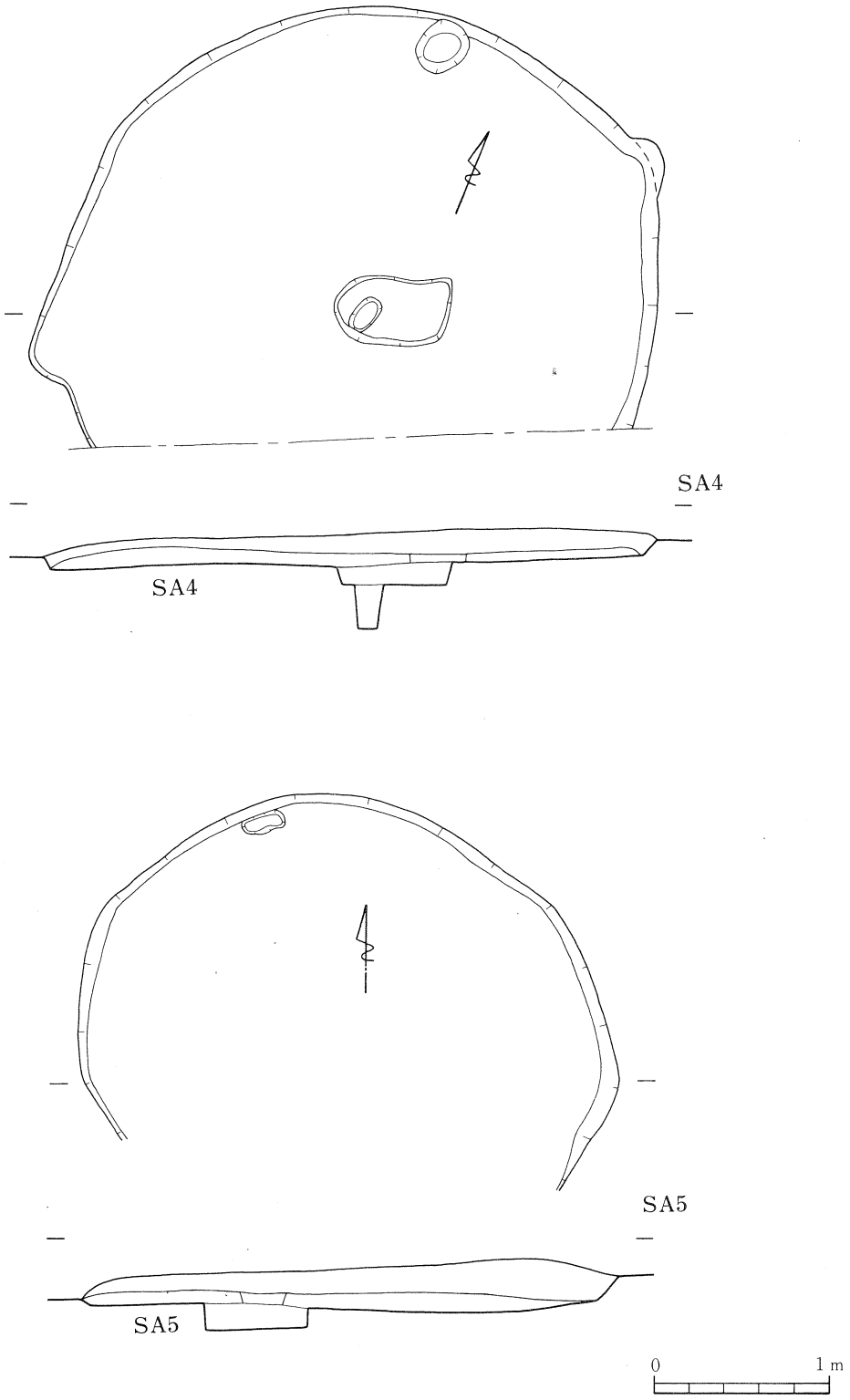


第65図　C地区 SA2・SA3 土層断面図．SC1 実測図



第66図　縄文土器実測図（32）

700～704　C地区 SA 1
705～711　C地区 SA 2
712　C地区 SA 3
713～715　C地区 SA 4
716～717　C地区 SA 5
718～719　C地区 SA 6
720～725　C地区 SA 7
726　C地区 SC 1



第67図　C地区SA４・SA５実測図

石器としては磨石１点（128）が出土している。

ＳＡ４の時期は713・714の時期で、Ⅲｂ期である。

ＳＡ５（第66・67図）

ＳＡ５はｊ・ｋ－16に位置し、長径310cm、短径200cm＋α、深さ12cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。717は口縁部が若干外反する平口縁の無文土器である。

ＳＡ５の時期は717の時期で、Ⅳ期である。

ＳＡ６（第66・68図）

ＳＡ６はｋ－14に位置し、南側は削平されており、長径325cm＋α、短径75cm＋α、深さ40cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。718は口縁部が短く外反し、１条に沈線を施しており、Ｖｃ類に相当する。719は口縁部が短く外反する無文土器である。

ＳＡ６は718のＶｃ類の時期で、Ⅱｂ期である。

ＳＡ７（第66・68図）

ＳＡ７はｊ・ｋ－20・21に位置する。西側は削平されており、長径355cm、短径165cm＋α、深さ９cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。720はほぼ真直に伸びる口縁部に貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅷｄ類に相当する。722は無文土器である。723は脚台付皿の皿部の口縁部に２条の刺突文を施しており、ＳＡ１で出土している689と同一タイプである。２点の底部が出土しているが、網代底はない。724は底面からほぼ真直に立ち上がるもので、底径が6.8cmである。

土器片加工円盤は8.0ｇが１点出土している。

ＳＡ７の時期は720のⅧｄ類の時期で、Ⅳｂ期である。

(2) **土　坑**

Ａ地区で土坑が20基、Ｂ地区で１基、Ｃ地区で１基、Ｅ地区で４基検出された。

Ａ地区（第69図）

ＳＣ１（第12図）

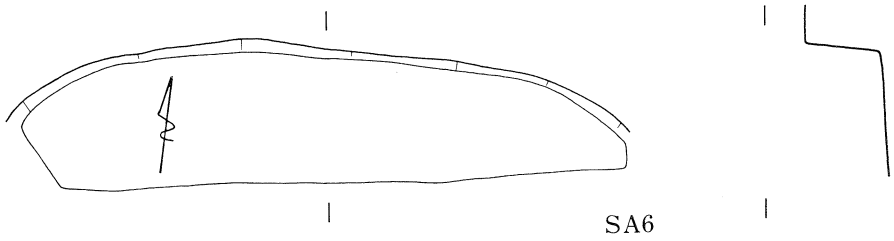
ＳＣ１は長さ113cm、幅104cm、深さ21cmの規模で、不定形プランである。埋土はⅠ層が炭化物と焼礫を含む暗赤褐色土層、Ⅱ層が小礫を含む暗黄褐色土層である。

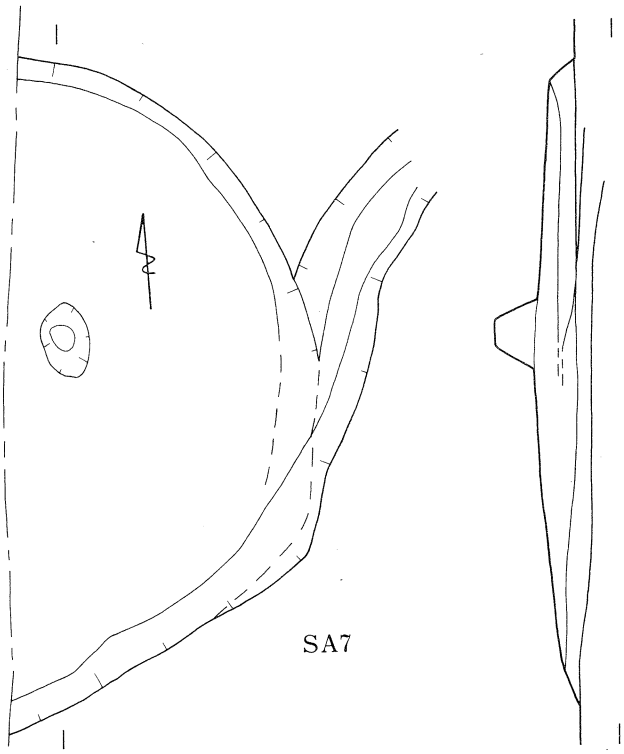
ＳＣ２（第12図）

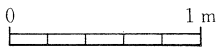
ＳＣ２は長さ52cm、幅46cm、深さ73cmの規模で、楕円形プランである。埋土には炭化物と赤褐色のもろい小礫を多く含み、固く締った層である。

ＳＣ３（第70図）

ＳＣ３は長径73cm、短径71cm、深さ22cmの規模で、円形プランである。







第68図　C地区SA6・SA7実測図

ＳＣ10（第70図）

ＳＣ10は長さ173cm、幅96cm、深さ22cmの規模で、長軸が東西方向の楕円形プランである。ＳＩ１を切っている。

ＳＣ12（第71図）

ＳＣ12は長さ134cm、幅87cm、深さ15cmの規模で、長軸が北北西～南南東方向の楕円形プランである。埋土はＩ層が１～３cm程度の小礫を含む黒褐色土層で、Ⅱ層が褐色土層である。

ＳＣ13（第71図）

ＳＣ13は２基の土坑が切り合っている。ＳＣ13Ａは長さ240cm、幅115cm、深さ25cmの不定形プランであるのに対してＳＣ13Ｂは長さ151cm、幅65cm、深さ23cmである。

ＳＣ14（第72図）

ＳＣ14は２基の土坑が切り合っている。ＳＣ14Ａは長さ188cm、幅103cm、深さ36cmの楕円形プランである。埋土は３層に分かれるが、炭化物・焼土は含んでいない。ＳＣ14Ｂは長さ160cm、幅72cm、深さ18cmの不定形プランである。

ＳＣ15（第73図）

ＳＣ15は長さ101cm、幅63cm、深さ32cmの規模で、長軸が南南西～北北東方向の不定形プランである。床面の一部が横穴状に潜り込んでいる。埋土は褐色の粘土粒径0.5～３cm程度のブロックを含む黒褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　2/2）である。

ＳＣ16（第73図）

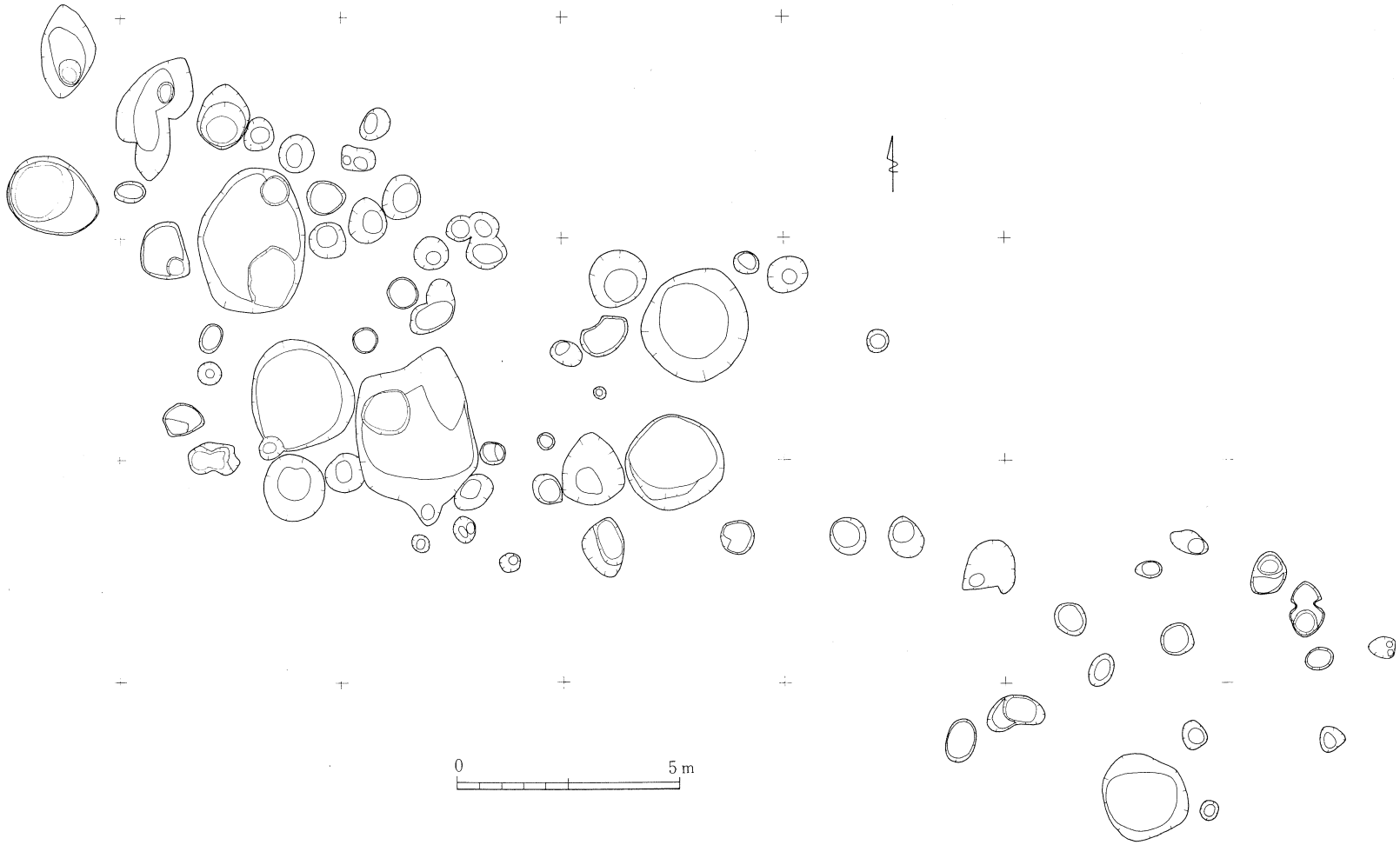
ＳＣ16は長さ73cm、幅56cm、深さ19cmの規模で、長軸がほぼ東西方向の楕円形プランである。床面に２個の小ピットがある。埋土はＩ層が炭化粒を含む黒褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　2/2）、Ⅱ層が焼土を多量に、炭化粒を少し含む暗褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　3/4）、Ⅲ層が炭化粒・焼土を含まないにぶい黄褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　2/2）である。

ＳＣ17（第19・70図）

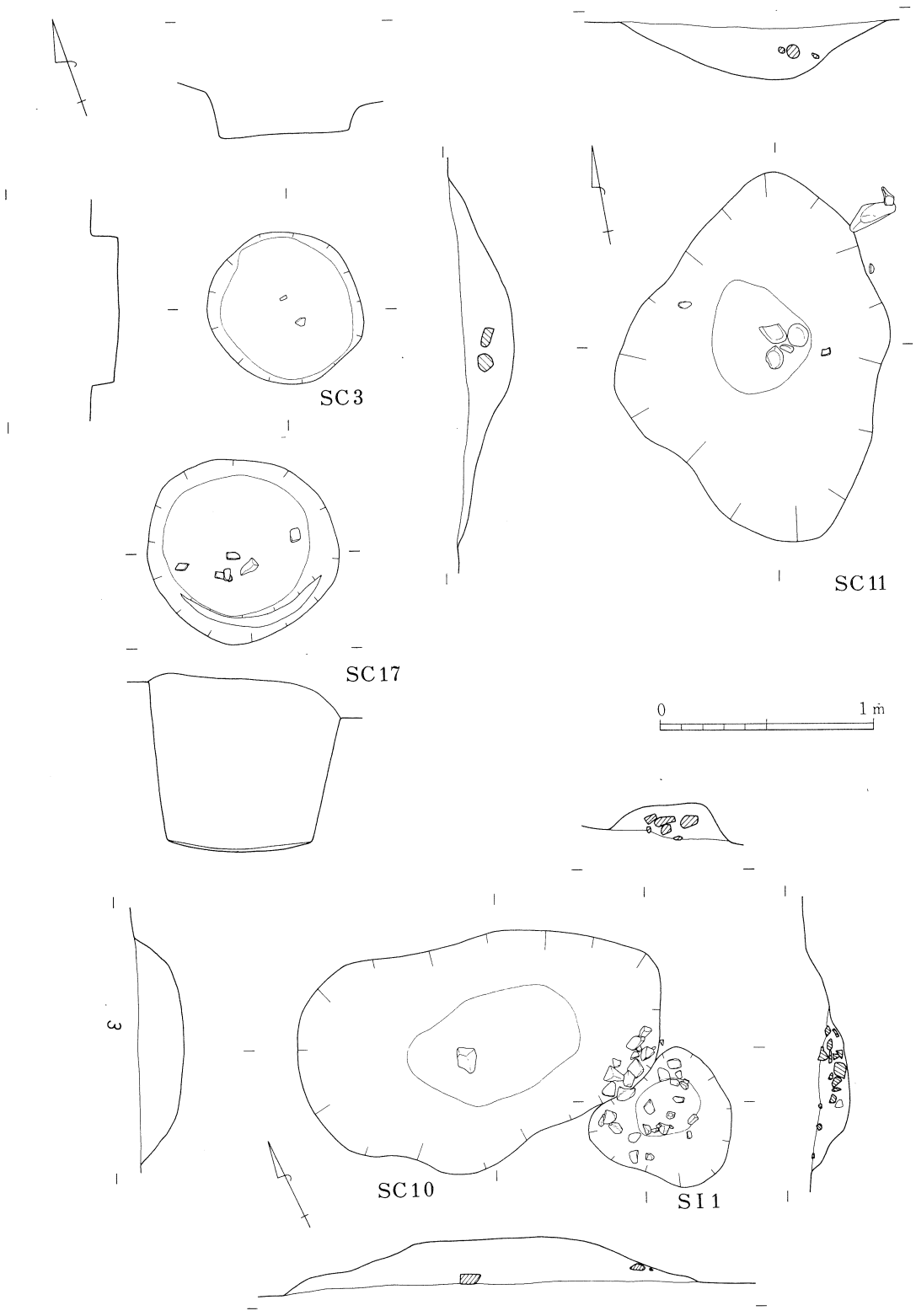
ＳＣ17は長径90cm、短径88cm、深さ82cmの規模で、円形プランである。遺物は少量出土している。186は口唇部に貝殻腹縁による刻みを、ほぼ直口する口縁部に３条の沈線を施しており、Ⅱｂ類に相当する。187は３条の沈線を施しており、Ⅴｃ類である。188は波状口縁で沈線文を施しており、Ⅴｃ類に相当する。189は口縁部に粘土紐を２本貼りつけ、貝殻腹縁刺突文を施しており、１条の沈線と１ケ所の穿孔がある。192は直口する無文土器である。２点の底部には網代底はない。194は底面から真直立ち上がる底部で、白色物の付着があり、底径10.0cmである。土器片加工円盤は14.0gと16.5gが各１点である。

ＳＣ18（第19・73図）

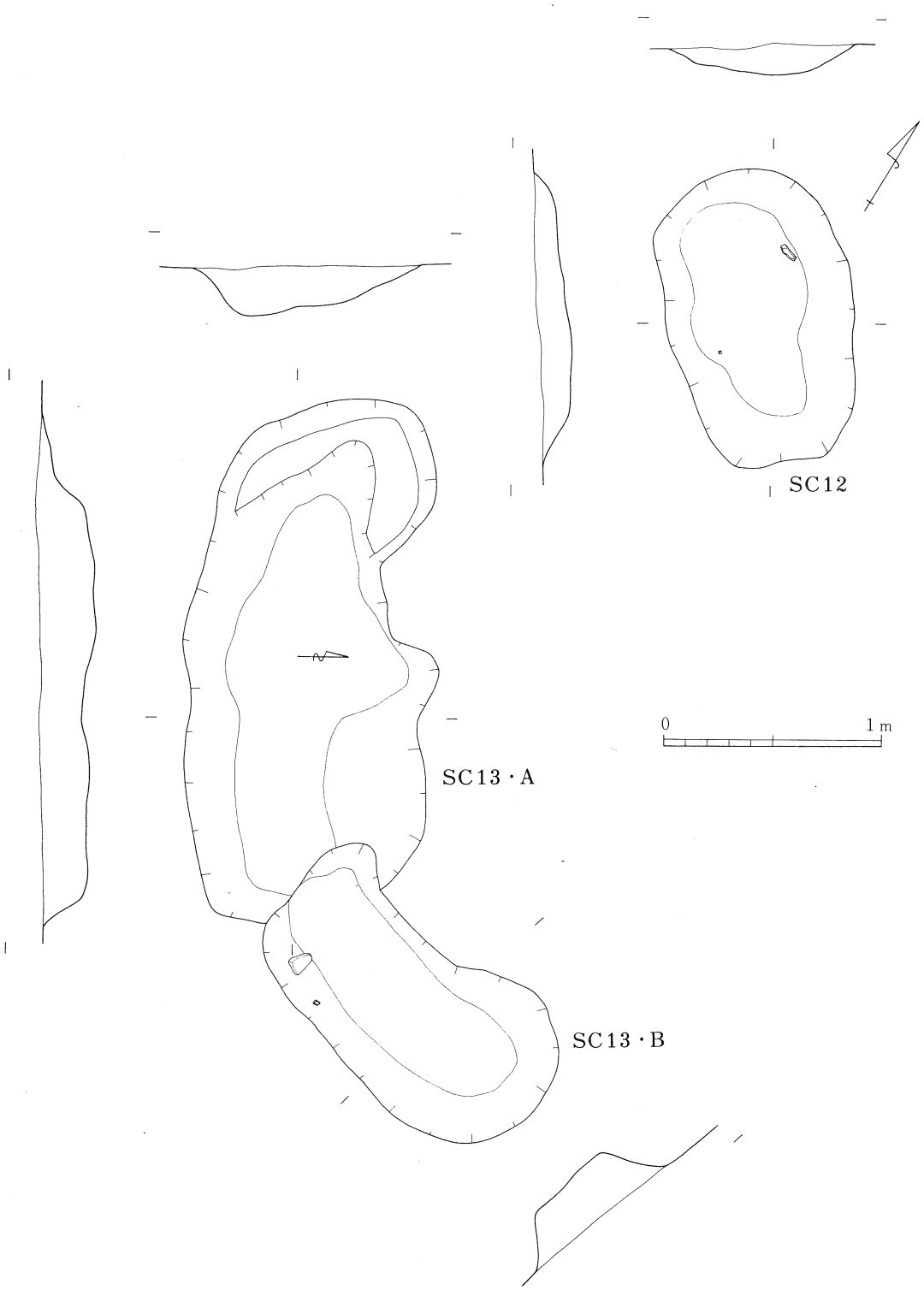
ＳＣ18は長径105cm、短径94cm、深さ96cmの規模で、円形プランである。埋土はＩ層がア



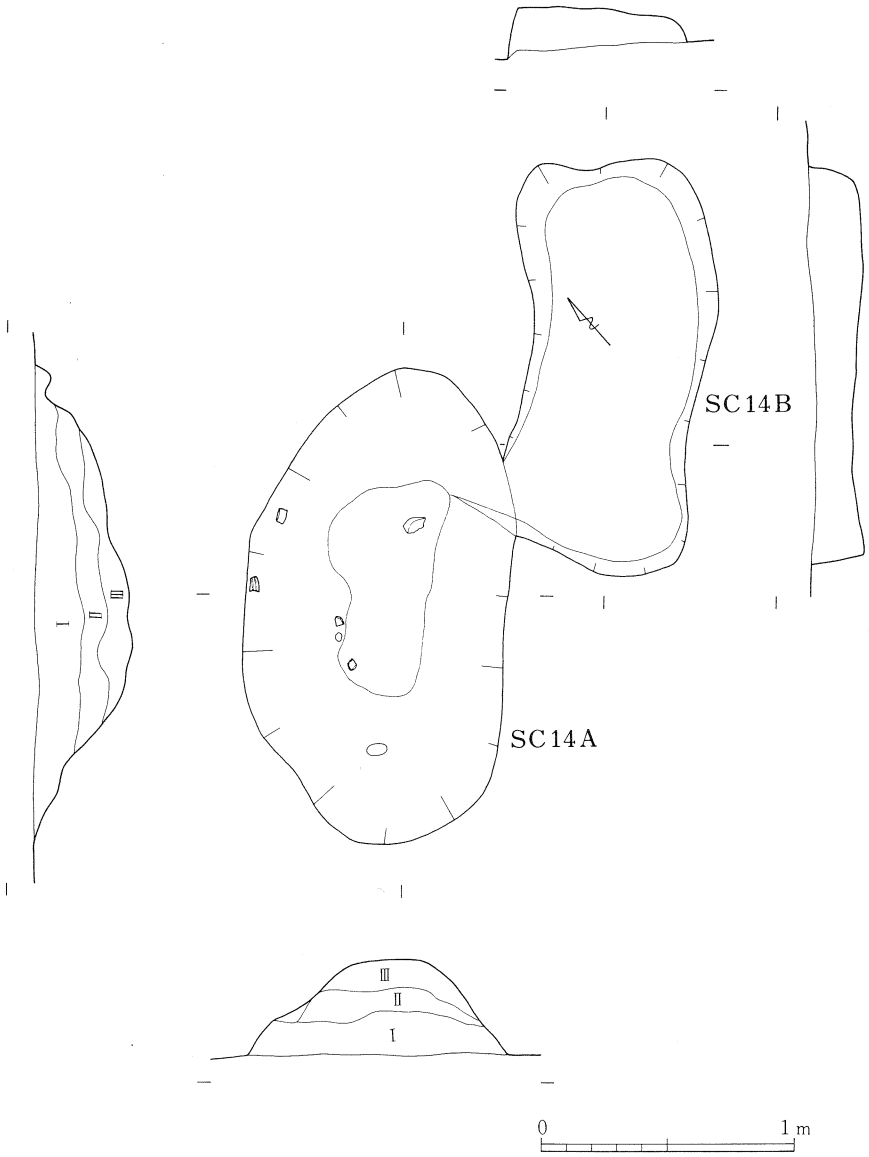
第69図　A地区南東部遺構分布図



第70図　A地区SC3・SC10・SC11・SC17・SI1 実測図



第71図　A地区SC12・SC13実測図



Ⅰ　黒褐色土（10YR 2/2）　粘性普通，固く締まりがよい。灰褐色粘土粒を僅かに含む。径1～3mm程度の小礫及び白色粒子を含む。

Ⅱ　暗褐色土（7.5YR 3/4）　径 0.5～2cm程度の灰褐色の粘土ブロックを含む。黄褐色のパミスも僅かに含む。Ⅰ層より粘性弱いが締まりはよい。白色粒子を僅かに含む。

Ⅲ　にぶい黄褐色土（10YR 4/3）　粘性強，ヌメリがある。灰褐色の粘土粒，黄褐色のパミスを小ブロック状に含み、手ざわりがざらざらしている。

第72図　A地区SC14実測図

カホヤ粒子を若干含む茶褐色土層、Ⅱ層がアカホヤブロックと木炭粒を若干含む褐色土層、Ⅲ層がアカホヤブロックと木炭粒を多く含む暗褐色土層である。Ⅲ層から土器と伴に長さ40cm、幅15cm、厚み10cmの河原石と長さ33cm、幅20cm、厚み10cmの河原石が出土している。

遺物は少量出土している。172は波頂部に凹点を、口唇部に1条の沈線を、口縁部に沈線を施しておりⅤc類である。174は1条の浅い沈線の下位に縦方向の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅶc類である。176は口縁部がほぼ真直に伸び、口唇部は外傾し、網代底の底部は外に張り出してその上部が若干くびれている無文土器で、内外面とも貝殻条痕を施している。口径は楕円形で、長径22.8cm、短径20.7cm、器高22.0cm、底径9.3cmである。4点の底部のうち網代底は1点である。底径は7.0cmと10.2cmが各1点である。181は底面から緩やかに大きく伸びる底部で、底面は貝殻条痕を施し、底径10.0cmである。

ＳＣ19（第19・73図）

ＳＣ19は長さ141cm、幅94cm、深さ33cmの規模で、長軸が南北方向の楕円形プランである。北部は一段のベッド状を呈し、その際に径40cm、深さ17cmのピットがある。また径60cm、深さ44cmのピットに切られている。埋土はⅠ層が木炭粒を若干含む明黄褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　7/6）、Ⅱ層がアカホヤ混じりの黄褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　5/6）である。

182は口唇部にヘラによる刻みを、口縁部には斜め方向の沈線を施しておりⅤc類に相当する。183は無文土器である。2点の底部のうち網代底は1点である。185は底径8.8cmの網代底で、底面から真直に立ち上がっている。土器片加工円盤は7.9〜40.0gに8点である。

ＳＣ20（第73図）

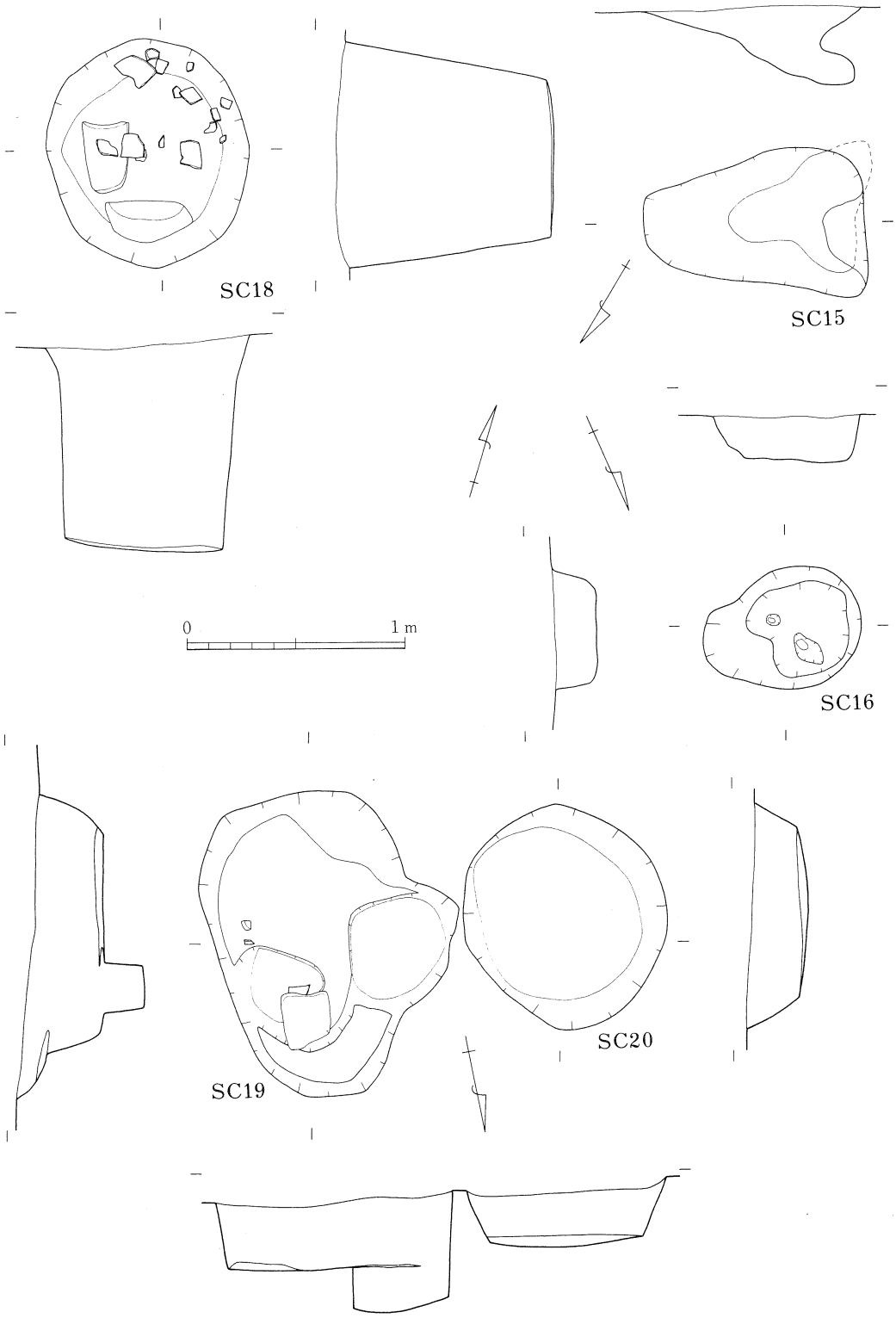
ＳＣ20はＳＣ19の西側に近接しており、長さ104cm、幅94cm、深さ27cmの規模の楕円形プランである。

Ｂ地区

ＳＣ１（第58・62・74図）

ＳＣ１はＳＡ６の東に近接するｎ－32に位置し、長径116cm、短径105cm、深さ85cmの規模で、長軸が南北方向の円形プランである。土層は4層に分かれ、Ⅰ・Ⅲ層、Ⅳ層とⅤ層の境から土器が多く出土している。土坑上面から652・653・655・659・661・665・666が、Ⅰ層から657・660・662・664が、Ⅳ層の下部から654・656・661が出土している。またⅣ層とⅤ層の境からは土器と重なるように長さ40cm、幅30cm、厚み12cmの河原石と長さ34cm、幅20cm、厚み11cmの河原石が出土している。

653は直口の口縁部に貝殻腹縁による刺突文とその下位に2条の沈線を施しており、Ⅱb類に相当する。654はほぼ直口する口縁部に細い沈線文を、656は口縁部が若干外反し、細い沈線文を施している。両者ともⅤc類である。657は短く外反する口縁部に2条の沈線を施



第73図　A地区SC15・SC16・SC18・SC19・SC20実測図

しており、Ｖｃ類に相当する。652は波頂部に３個の刻みを、口縁部に１条の沈線を施しており、Ｖｃ類に相当する。661は口縁部がほぼ真直に伸びるのに対して662は緩やかに外反し、661は大きく外反する。661～663はすべて平口縁の無文土器である。５点の底部のうち４点が網代底である。663が底面から斜め上方に伸びる以外は、665のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれており、特に666が張り出しが著しい。667は上げ底気味である。底径は9.0～9.4cmが２点、10.4cmが１点である。

ＳＣ１の時期は654・656のＶｃ類の時期で、Ⅱｂ期である。

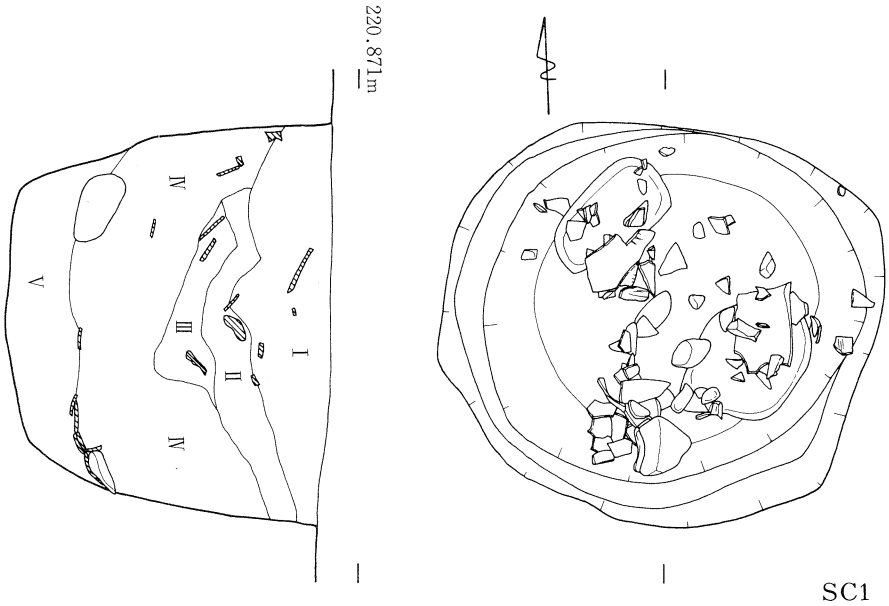
Ｃ地区

ＳＣ１

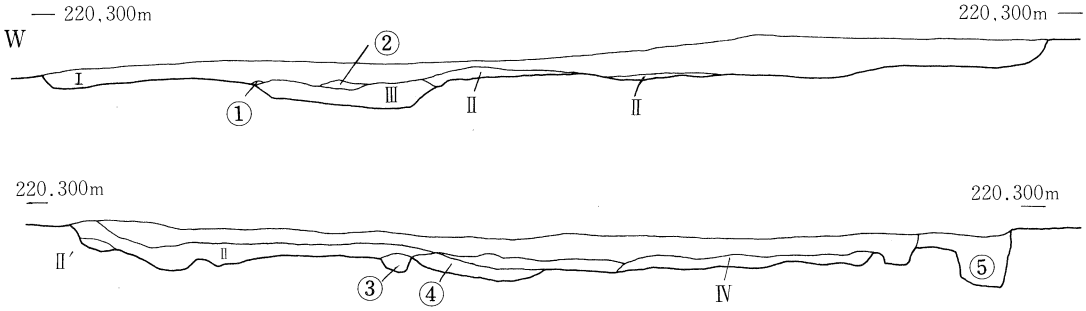
ＳＣ１はｉ・ｊ－18に位置し、長径121cm、短径106cm、深さ112cmの円形プランである。

地区	住居	プラン	規模（cm）			柱穴	焼土	遺物
			長さ（長径）	幅（短径）	深さ			
A	ＳＡ１Ａ	隅丸方形	330	185＋α	28	3		
	１Ｂ	円形	415	210＋α	18	3		
	ＳＡ２	隅丸方形	320	250＋α	21	3		磨石２
	ＳＡ３	円形	455	320＋α	33	3	○	石斧１
B	ＳＡ１	不定形	390	360	25	2		石鏃１
	ＳＡ２Ａ	方形	475	340	13	2		
	２Ｂ	方形	400	400	9			
	ＳＡ３Ａ	方形	480	350	22			磨石２、敲石１
	３Ｂ	方形	570	485	43	4		石斧１、石錘１
	３Ｃ	円形	360	350	43	3		
	ＳＡ４	方形	300＋α	290	13	2		磨石１、石鏃１
	ＳＡ５	隅丸方形	380	340	34	3		磨石１、石斧１
	ＳＡ６	正方形	340	340	46	3		石鏃１
	ＳＡ７Ａ	円形	330	315	28	5		石１、石斧１
	７Ｂ	円形	330	315	28	4		
	ＳＡ８Ａ	円形	450	440	25	5		石斧１
	８Ｂ	円形	450	440	25	5		
	ＳＡ９	円形	360	360	6	1		磨石１、敲石１
	ＳＡ１０	円形	250	240	9	1		
	ＳＡ１１	円形	340	280	36			
	ＳＡ１２	円形	360	320	17			
	ＳＡ１３	円形	280	280				
C	ＳＡ１Ａ	円形	460	430	7	6	○	石鏃１
	１Ｂ	円形	425	410	22	3	○	
	ＳＡ２	円形	370	335	6	2		磨石１
	ＳＡ３	円形	280	250	11	2		
	ＳＡ４	円形	350	250＋α	31	2		磨石１
	ＳＡ５	円形	310	200＋α	12			
	ＳＡ６	円形	325＋α	75＋α	40			
	ＳＡ７	円形	355	165＋α	9			

表１　竪穴住居観察表



Ⅰ　暗褐色
Ⅱ　暗～（淡）明褐色混。白っぽい粒が少し混る。
Ⅲ　白色の粒子，多量に混入。
Ⅳ　暗褐色，炭化物，多く混入。アカホヤ少量混入。
Ⅴ　にぶい黄褐色土（10YR 5/4）　Ⅳ層より明るい，少量の白色粒とアカホヤ粒を含む。
粘性強、硬い黒褐色土塊を含む。7.5YR 3/1

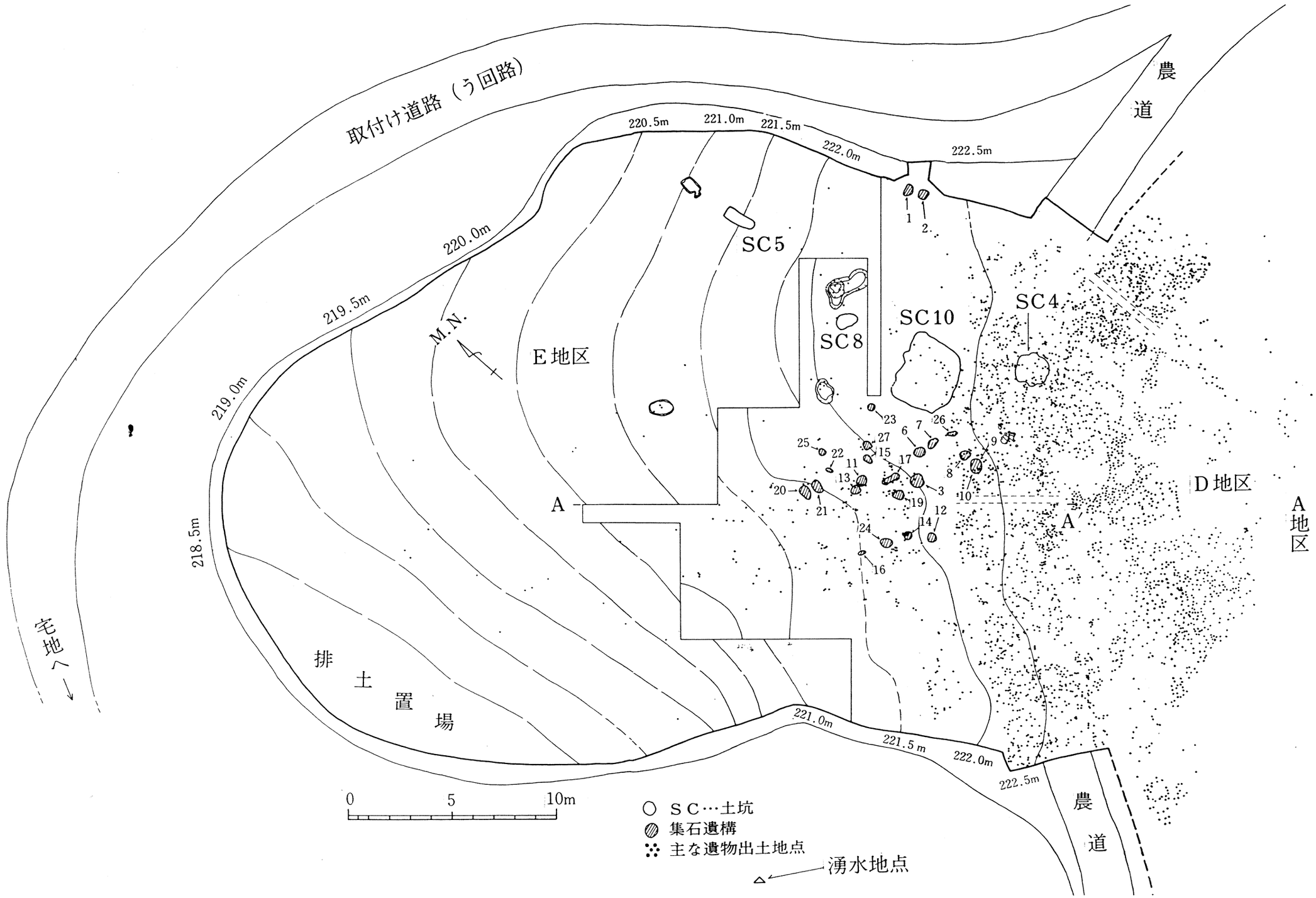


Ⅰ　暗褐色土（7.5YR 3/3），　白・黄の細粒を含む。
Ⅱ　暗褐色土（10YR 3/3），　やや黄みおびる。浅黄橙（10YR 8/3）の小石含む。
Ⅱ　　砂質の暗褐，アカホヤ粒を含む。
Ⅲ　　暗褐色でブロック状に硬質。
Ⅳ　褐色土（10YR 4/4），　黄色粒を含む。硬質でブロック状。

①　褐色土（7.5YR 4/4），
②　褐色土（7.5YR 3/3），　炭化粒多い。
③　　アカホヤブロック。
④　黒褐色土
⑤　　炭化粒を含む。Ⅱ′に近い。

0　1 m

第74図　B地区　SC1 実測図．SA 2 土層断面図



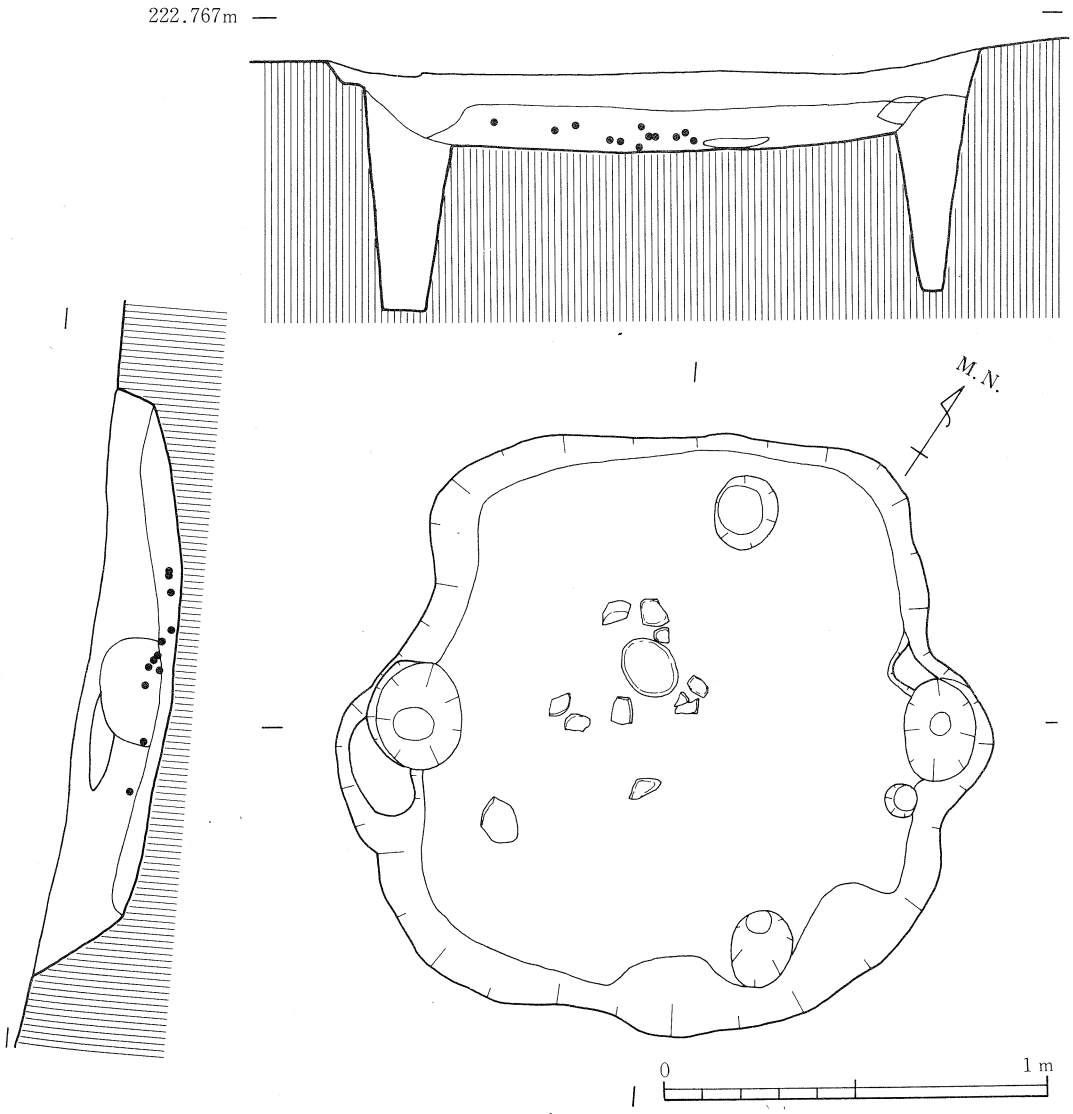
第75図　E地区遺構配置図及び遺物分布図

Ｅ地区

調査区の東半部を中心に11基検出したが、その半数以上は底面に著しい撹乱が見られた。これらは木根跡と思われるもので、それ以外の人為的な土坑と考えられるのは次の４基である。

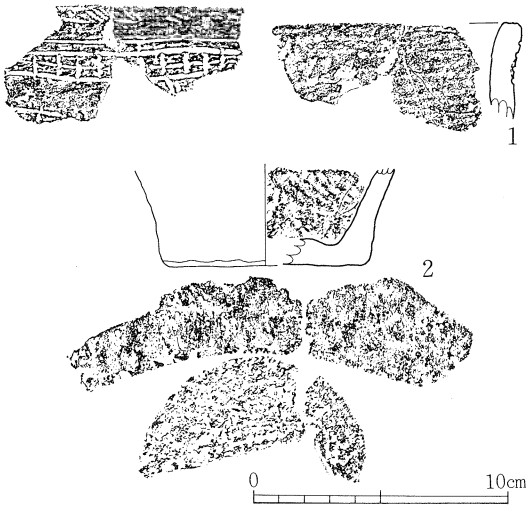
ＳＣ４（第75図、第76図）

土器密集区東側中央の包含層最下部より約20cm下の面で検出した。検出面から床面までの深さは、中央で約25cm、北西壁付近で約10cm、南東壁付近で約20cmである。平面プランは、おおよそ155cm×165cmの隅丸方形を呈し、両端に深さ40cm前後のピットを有する。床面は、強い粘性を帯びた暗黄褐色シルト質土層（Ｅ地区Ⅵ層、第５図）に掘り込まれている。



第76図　Ｅ地区ＳＣ４遺物出土状況及び遺構実測図

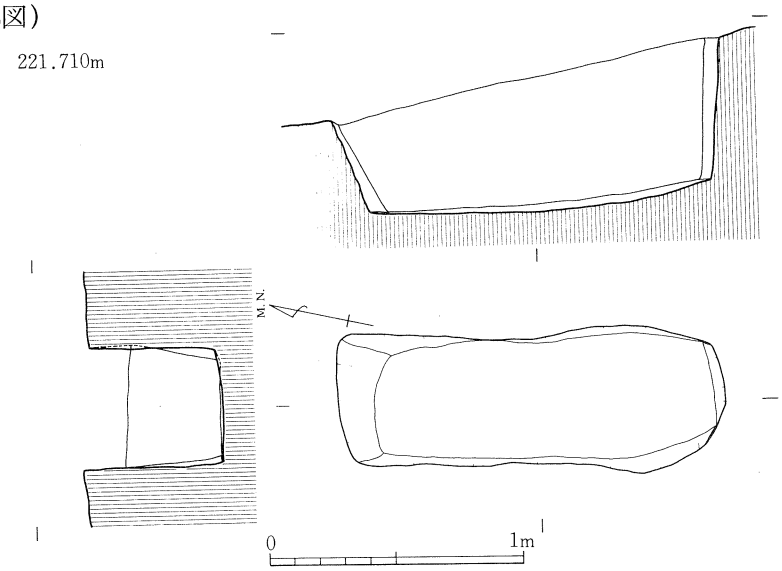
遺物は、土坑のほぼ中央付近で出土している。そのうち、主な土器片を図化した（第77図）。1は、深鉢形土器の口縁部片である。口唇部には、貝殻殻表によると思われる押圧痕が、口縁部には、1条の沈線文とその下に3条の沈線文の間に貝殻腹縁連続刺突文を施した文様が見られる。この文様は、さらにその下にも続くものと思われる。器面調整及び色調は、外面ナデでにぶい褐色、内面は横方向の貝殻条痕文の上を横ナデし、内面は浅黄橙色を呈する。2は、全体に風化気味の平底の底部片である。外面にぶい橙色で横ナデ、内面橙色で貝殻条痕文と思われる地文の上を横ナデしている。底部はナデ調整であるが、拓本で見ると中央に網代痕が残るようである。



第77図　E地区SC4出土遺物実測図

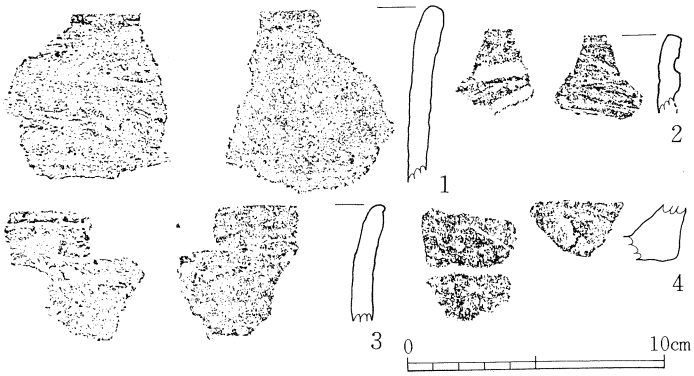
SC5（第75図、第78図）

東側斜面上の表土直下で検出した。埋土はアカホヤ層の風化したものである。検出面から床面までの深さは、南側で約56cm、北側で約37cm。床面は、南北で約10cmの比高差がある。平面プランは、約154cm×49cmの隅丸の長方形を呈している。



第78図　E地区　SC5 遺構実測図

埋土除去中に遺物がごく少量出土している。主なものを図化した（第79図）。1・2は、横ナデ調整された無文深鉢形土器である。3は、外面に太めの沈線文が2条見られ、調整は横ナデである。4は、横ナデ調整された底部片である。色調は、2～4の外面がにぶい黄橙色、1の外面がにぶい橙色、1・4の内面が浅黄橙色、2は浅黄色、3はにぶい黄橙色を呈している。SC5では、このほかに無文土器の口縁部片2点と胴部片1点が出土している。

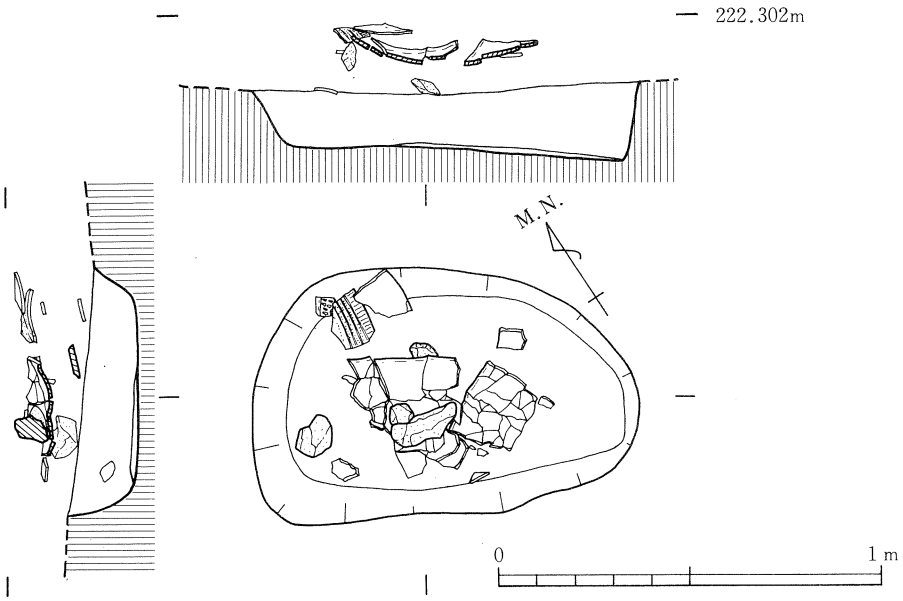


第79図　E地区　SC5 出土遺物実測図

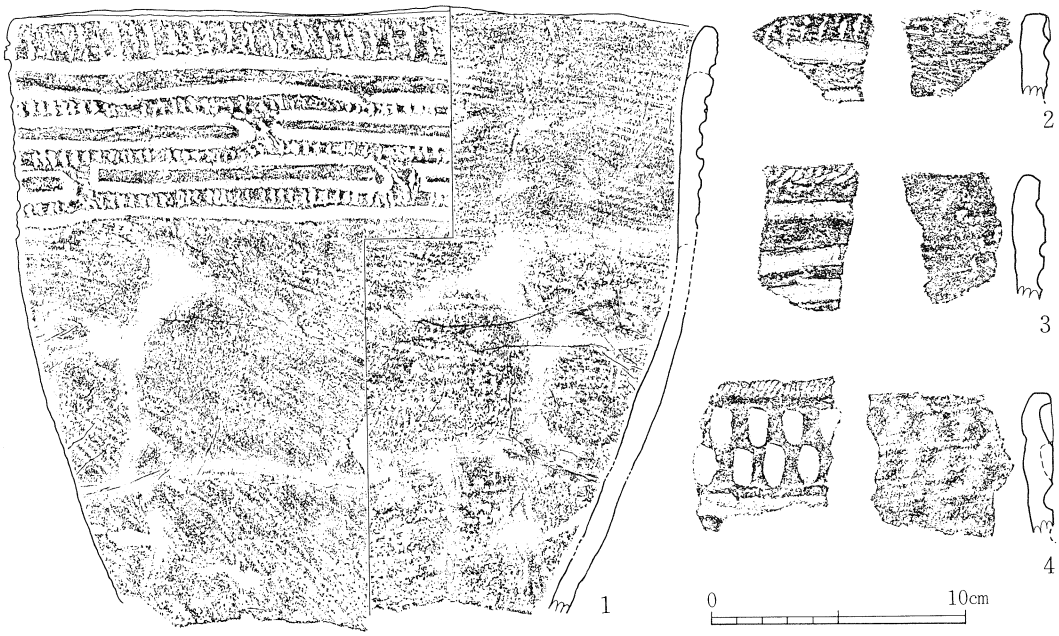
SC8（第75図、第80図）

土器密集区と集石遺構集中箇所の北側で、表土除去後、風化したアカホヤ面に遺物が集中した状態で検出された。しかし、埋土と周辺の土との識別は困難で、さらに10〜15cmほど掘り下げてアカホヤ火山灰層上面でその輪郭を確認した。遺構検出面での平面プランは、約100×65cmの楕円形である。検出面から床面までの深さは、南東側壁付近で約20cm、北西側壁付近で約15cm。遺物の出土面から床面までの深さは、中央で約22cmを計る。床面近くの埋土には小さな炭化物や焼土塊が見られた。

遺物は、土坑中央上部で出土している。底部を除く一個体分の土器とそのほか数個体の口縁部の小破片及び剥片、3〜4個の焼石などが出土した。このうち、特徴のある土器を図化した（第81図）。1は、口径27.6cmで底部と口縁部の一部を欠く。遺物出土状況図の土器は



第80図　E地区SC8遺物出土状況及び遺構実測図



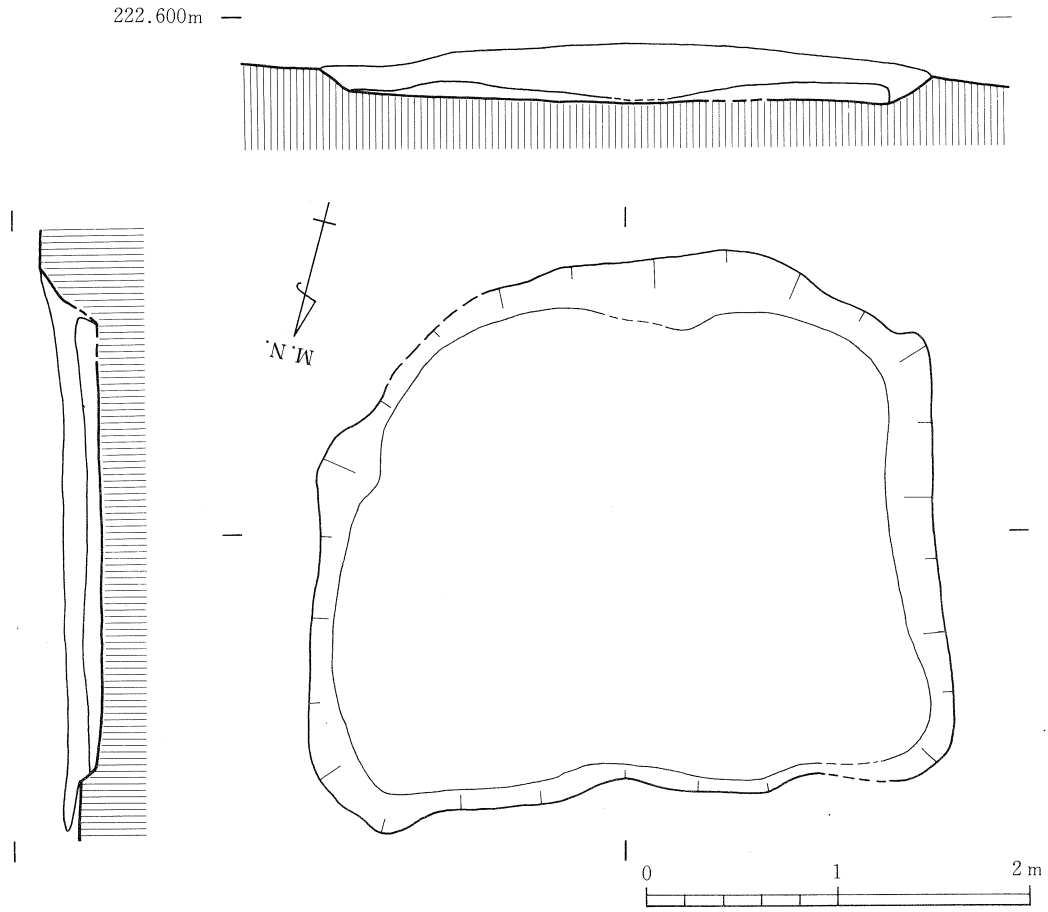
第81図　E地区SC８出土遺物実測図

殆どこの土器である。器面調整は、貝殻条痕文の上をナデ。色調は、内外ともにぶい橙色である。口唇部は横ナデされるが、部分的に貝殻殻表によると思われる浅い押圧刻みが残っている。口縁部には、縦方向の貝殻腹縁連続押圧文、その下に太めの沈線文を２条、さらに下には端を円く閉じた長方形状の沈線文を２段、そして最後に、１条の沈線文を巡らしている。上から２本目の沈線文と最下部の沈線文との間は、長方形状の沈線文の中を除いて、すべて貝殻腹縁の連続刺突文で埋められている。Ｖａ類。２は、口唇部横ナデ、口縁部は縦方向の貝殻腹縁連続押圧文、その下に太めの沈線文が数条施されている。器面調整はナデである。外面暗褐色、内面にぶい橙色を呈する。Ⅱｂ類。３は、器面調整ナデで、口唇部には貝殻によると思われる押圧痕が、口縁部には太めの沈線文が３条見られる。内外とも淡黄色を呈する。４は、外面ナデ、内面貝殻条痕文の上を横ナデしている。口唇部には、貝殻殻表によると思われる浅い押圧刻みが施され、口縁部は、内面側がでこぼこになるほど強い連続刺突文が施されている。その下には、太くて深い沈線文が２条見られる。外面浅黄橙色、内面淡黄色を呈する。

ＳＣ10（第75図、第82図）

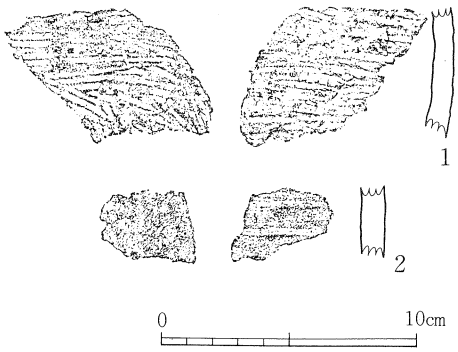
土器密集区の北端付近で輪郭の不明瞭な落ち込みとして確認した。トレンチを入れて輪郭を確認しようと試みたがわからず、わずかな土色と土質の違いをもとに埋土と思われる土を除去したところ、318×269*cm*の隅丸の長方形プラン、検出面からの深さが中央で約20*cm*の壁面の立ち上がりが緩やかな浅い土坑となった。遺物の出土量はごく少ない。

出土遺物は、土坑の時期を示すような特徴的なものが殆ど見られなかったため、２点のみ



第82図　E地区SC10遺構実測図

図化した（第83図）。1は、外面は貝殻条痕文の後、一部ヘラナデと思われる調整がなされ、内面は浅くて不明瞭な貝殻条痕文かあるいはヘラナデ調整かと思われる。外面にはススが付着している。特徴的なのは、胎土に2㎜以下の黄色い降下軽石粒のような物質を多量に含んでいることである。外面浅黄橙色、内面淡黄色を呈する。2は、両面ともに丁寧にナデ調整された土器である。内外ともにぶい赤褐色を呈する。1～2ともに埋土の中から出土した。焼成や調整、胎土や色調など縄文時代早期や前期の遺物とは考えがたく、後期の遺物として報告した。



第83図　E地区SC10出土遺物実測図

(3) 集石遺構

集石遺構はＡ地区で３基、Ｅ地区で27基検出された。

Ａ地区

ＳＩ１

ＳＩ１は長さ172*cm*、幅126*cm*、深さ23*cm*の不定形プランの土坑に、石皿１と磨石１がⅠ層の中位に集石している。埋土はⅠ層が炭化物を含む黒褐色土層（Ｈｕｅ7.5ＹＲ　3/2）、Ⅱ層が炭化物を含まない褐色土層（Ｈｕｅ10ＹＲ　4/6）である。

ＳＩ２（第70図）

ＳＩ２は長さ61*cm*、幅46*cm*、深さ18*cm*の楕円形プランの土坑に、割れている石皿や砂岩の円礫を配置している。石はすべて火を受けて、ひびが入っている。埋土には炭化粒を含んでいるが、焼土は含んでいない。

ＳＩ３（第70図）

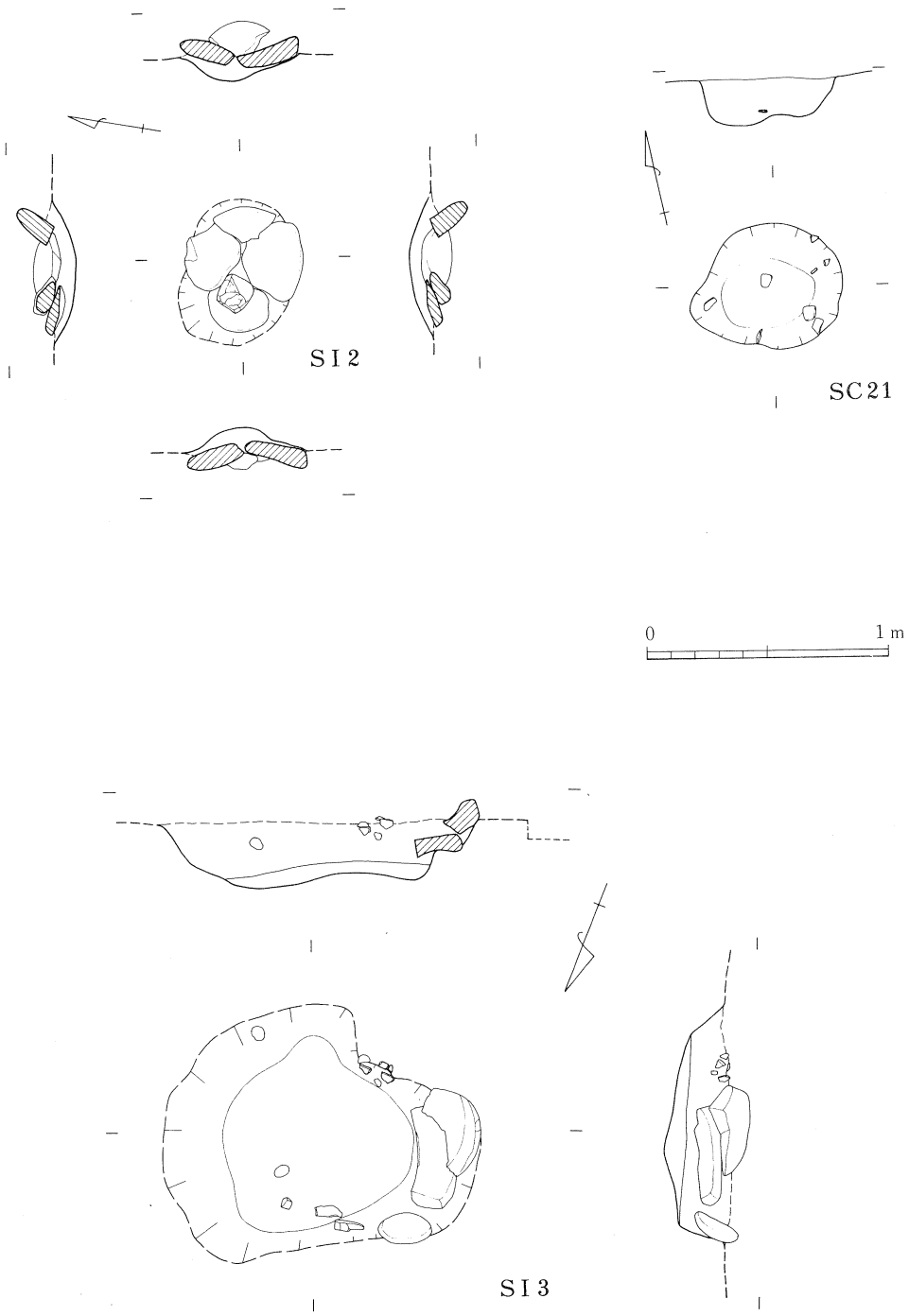
ＳＩ３は長さ132*cm*、幅102*cm*、深さ28*cm*の不定形プランの土坑に、石皿や円礫を配置している。

Ｅ地区

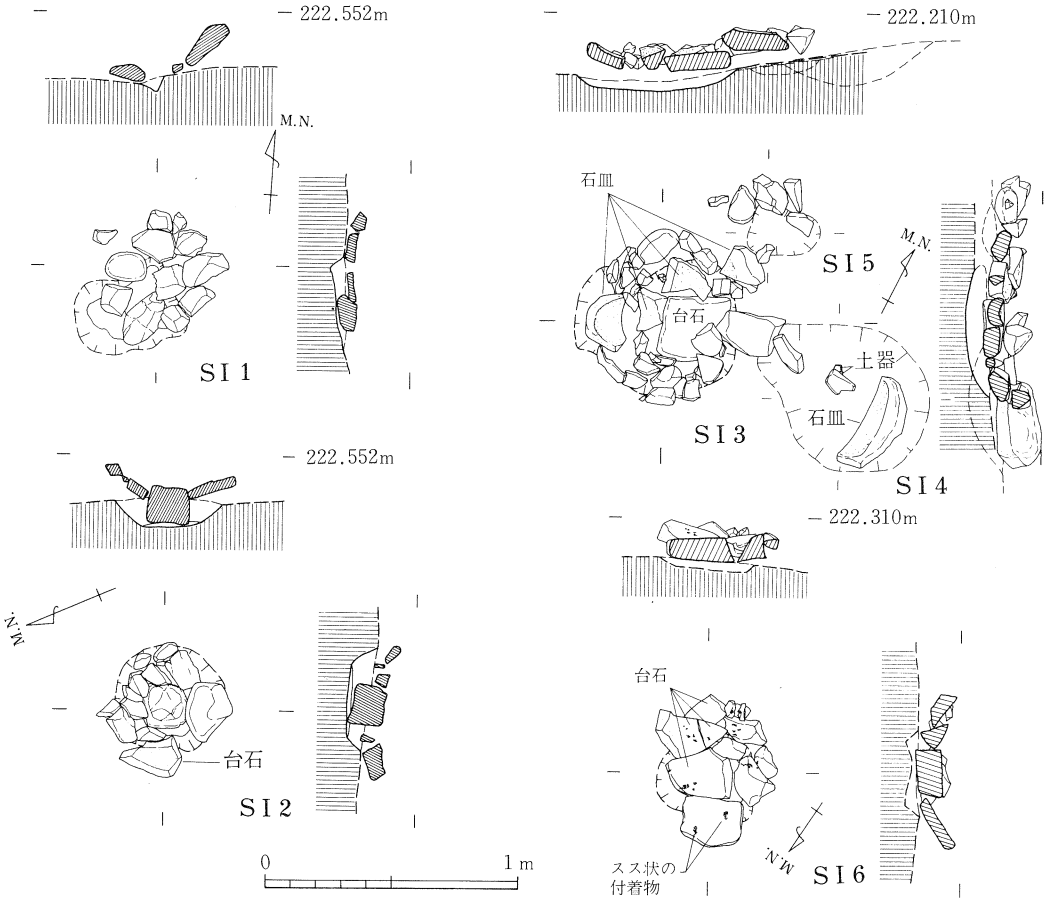
集石遺構は、土器密集区の中央北西端部から約10*m*以内に互いに近接して大小25基、その東端から約10*m*東側に２基の計27基が検出された。地形的には、西向きのややくぼんだ緩斜面上に営まれている。これらは、大部分が加熱されて赤変したり脆くなったりしている大小の焼礫を用いて作られており、その形態上、次の３種類が見られる。１．ほぼ円形に並べたように焼礫が見られたり、石皿や台石状の大きな石を囲むように焼礫が見られるもの。２．この地方の縄文時代早期の一般的な集石遺構に類似して、焼礫が一箇所にかたまって見られるもの。３．少量だが、ある程度焼礫がかたまって見られるものなどである。この焼礫自体は、包含層中にしばしば見られたが、かたまって検出されたものはない。また、集石遺構は、ＳＩ１・２などアカホヤ火山灰層の残りが良いところでは、風化アカホヤ層の下部からアカホヤ火山灰層上面で検出され、そのほかの集石遺構は、遺物包含層下部からごく薄くしか残っていないアカホヤ火山灰層あるいはその下層の上面で検出されている。一方、集石遺構内あるいは直上で出土している遺物は後期前半代の土器であり、従ってこれらの集石遺構は、縄文時代後期のものと考えられる。

ＳＩ１（第85図）

アカホヤ層直上で検出。覆土は風化したアカホヤである。わずかに赤変した比較的大きな石を用いる。遺構の下部に明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物粒を含む柔らかな風化アカホヤ土を除去すると不定形な土坑になった。この土坑と遺構の中心とはずれている。遺物は伴わない。



第84図　A地区SC21・SI2・SI3実測図



第85図　E地区SI 1～6 遺構実測図

SI 2（第85図）

風化アカホヤ層の下部で検出。土器は伴わない。中央に大きめの石を置き、その周囲は偏平な石で囲まれている。いずれの石も赤変している。集石遺構の下部のアカホヤ層上面で掘り込みを確認した。埋土は、微量の炭化物を含んだ黒褐色土である。

第132図８は、遺構中出土の台石と思われるものである。

SI 3～SI 5（第85図）

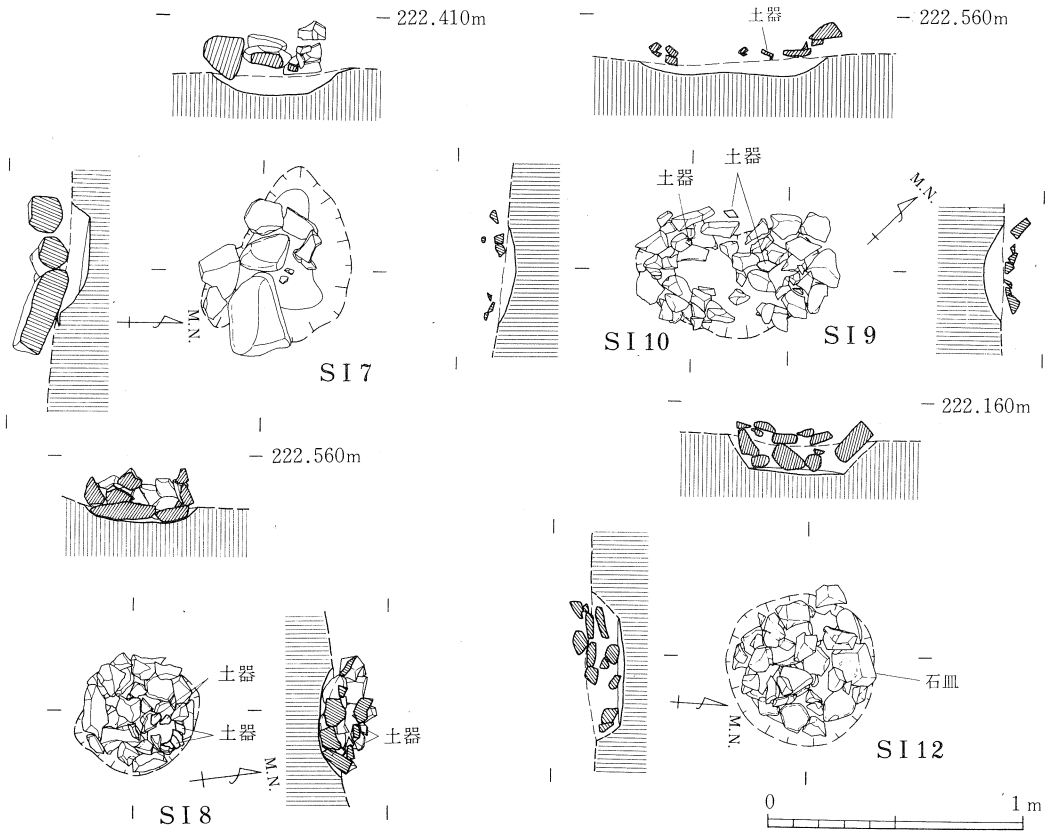
SI 3は、中央に石皿の破片が、そして周囲には大小の石が見られる。SI 4～5は、石の数は少ないが、ある程度のかたまりと見て番号を付けたものである。SI 4にも石皿片が見られる。これらは、いずれも下部に明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物や微量の焼土を含む柔らかな黒褐色土が堆積していて、それを取り除くと不定形の浅い皿状の土坑になった。

遺物は、縄文土器と石器が出土している。第91図１は、SI 3の直上約５*cm*で出土したもので、器面は貝殻条痕文の上をナデ調整し、外面に太めの２条の沈線文が見られる。２は、

ＳＩ３の20数*cm*上で出土したもので、器面調整は、貝殻条痕文の上をナデ、口縁部先端がわずかに丸く肥厚し、外面の短くくびれたあたりには貝殻腹縁の連続刺突文が施されている。１がⅤｃ類、２はⅧｂ類である。３は、ＳＩ４の数*cm*直上で出土したもので、器面は貝殻条痕文の上を横ナデし、外面には、強い凹線気味の横ナデの下に低い突帯の後と思われる剥離痕が見られる。４は、ＳＩ４の落ち込みの中から出土したもので、砂粒を多く含む胴部片である。一方、石器は、ＳＩ３から第130図１の石皿と２の石皿が出土している。１は４個に割れていたもので、２は中央が若干くぼんだ台石状のものである。第131図３は、ＳＩ４出土の石皿である。ＳＩ５は遺物を伴っていない。

ＳＩ６（第85図）

比較的大きめの石で構成されている。中央には第131図４の石皿と思われるものが置かれている。これらの石の上には、液状のものが垂れたような黒いシミが見られる。遺構の下部には明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物を含んだ黒色土を取り除くと浅い土坑になった。



第86図　Ｅ地区ＳＩ７～10・12遺構実測図

ＳＩ７（第86図）

比較的大きめの濃淡の異なる赤変した石で構成される。遺物は伴わない。遺構の下部に明確な掘り込みは確認できなかったが、炭化物を含んだ柔らかな黒色土を除去すると不定形の土坑になった。遺物は伴わない。

ＳＩ８～ＳＩ10（第86図）

土器密集区包含層下部で、互いに近接して検出された。ＳＩ８は、大小の焼石で構成され、外周は偏平な横長の石を浅い円形の掘り込みに立て掛けるように置いてある。掘り込みの埋土は、炭化物を含んだ柔らかな暗褐色土である。石に接して第91図５～７の土器が出土している。５は貝殻条痕文の上をナデ調整し、外面のややくびれたところに貝殻腹縁の刺突文が見られる。口縁部の丸く肥厚した状態からⅧｂ類と思われる。６はナデ調整の厚手の無文土器、７は貝殻条痕文の上をナデ調整した土器である。

ＳＩ９～10は互いに接している。中央部に石が少ないためか、石を円形に並べているように見える。遺構の下部に明確な掘り込みは見られなかったが、土の柔らかな部分を取り除くと浅い皿状の不定形の土坑となった。遺物は、ＳＩ９の中央部から第91図８の網代底の無文土器の底部が、ＳＩ10の石の下から９の太めの沈線文を施した土器が出土している。

ＳＩ11・ＳＩ13（第87図）

互いに近接している。ＳＩ11は、明確な楕円形の掘り込みを持つもので大小の石で構成されている。中央部に比較的偏平な石が置かれ、その上にも小さな石がのっている。大きな石は脆くなっている。ＳＩ13は、中央部に台石状の大きな石（第132図７）が見られ、その周囲は比較的大きめの石で取り囲んだように見られるものである。石は脆くなっているものが多く、台石直下の土は部分的に赤く焼けた焼土となっている。遺構の下部に明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物を含んだ柔らかな土を取り除くと不定形の土坑になった。土器は伴っていない。

ＳＩ12（第86図）

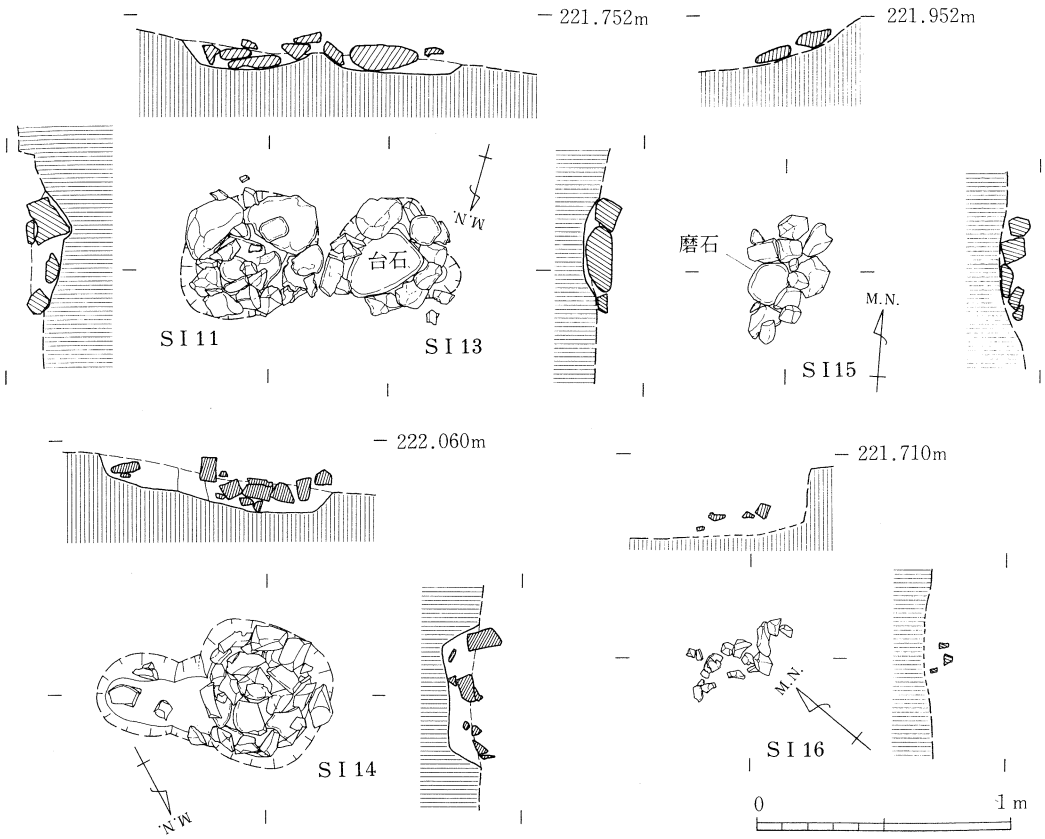
集石遺構の周囲に黒褐色の埋土が見られ、明確な円形の掘り込みが確認できた。この土坑の中には、焼けた大小の石が詰まっており、第132図５の石皿片も混じっていた。

ＳＩ14（第87図）

集石遺構の周囲に黒褐色の埋土が見られ、明確なほぼ円形の掘り込みが確認できた。石は、大小の赤変した石のみを用いている。この遺構の南東側には、円形の掘り込みが続いており、こちらは焼石の数は少ない。埋土はＳＩ14のよりもやや明るい黒褐色である。

ＳＩ15（第87図）

やや大きめの石で構成されている。明確な掘り込みは見られなかったが、間の黄褐色パミス粒を含んだ暗褐色の覆土を取り除くと浅い皿状のくぼみになった。



第87図　E地区SI 11・13～16遺構実測図

遺物は、中央から第133図９の石器が出土している。これは、擦り磨いた面と敲打痕とが見られるもので、磨石・敲石である。

SI 16（第87図）

試掘坑にかかったため、石をいくらか抜き取ったところで検出した。比較的小さな焼石が不定形にかたまっており、また、その下部は撹乱を受けていて土坑などの掘り込みは確認できなかった。遺物も伴っていない。

SI 17～SI 18（第88図）

SI 17は大きめの石で、SI 18はそれよりやや小振りの石で構成され、互いに近接してそれぞれでまとまりを見せている。SI 17の下部には何等の遺構も見られず、SI 18の下部にも微量の焼土や炭化物は見られたものの、遺構は確認できなかった。これらは、アカホヤ層下部の黄褐色パミスの上で検出された。遺物は伴わない。

SI 19（第88図）

遺構の下部に明確な掘り込みは確認できなかったが、積み重なった大小の焼石を取り除くと、ほぼ楕円形の浅い土坑になった。これらの石は脆くなっているものが多い。遺物包含層下部で検出された。遺物は伴っていないが、周辺ではⅧb類やⅨ類の北久根山式精製鉢形土

器片などが出土している。

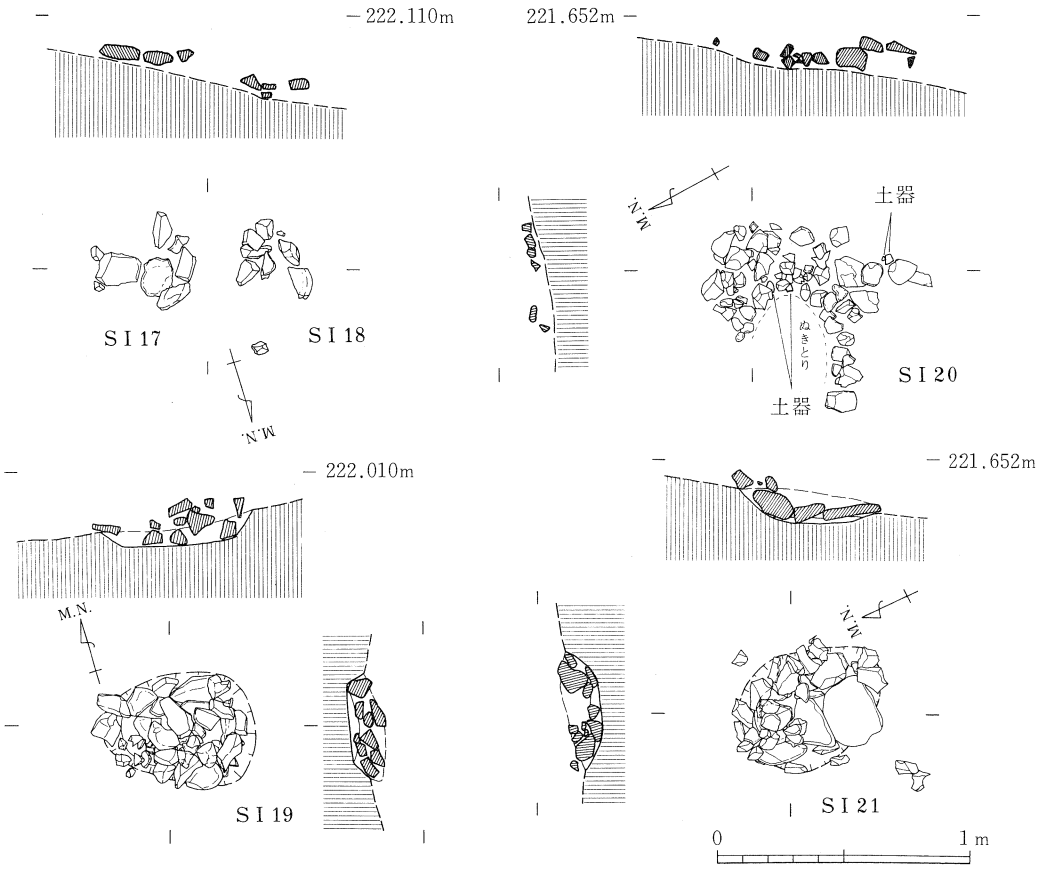
ＳＩ20（第88図）

発掘調査中に誤って石を抜き取ってしまったため、遺構の形態は不定形なものになっている。本来は、大小の焼石が楕円形状に集まっていたものと思われる。石は比較的小型のものが多い。遺構の下部は風化したアカホヤ層で掘り込みは確認できなかった。

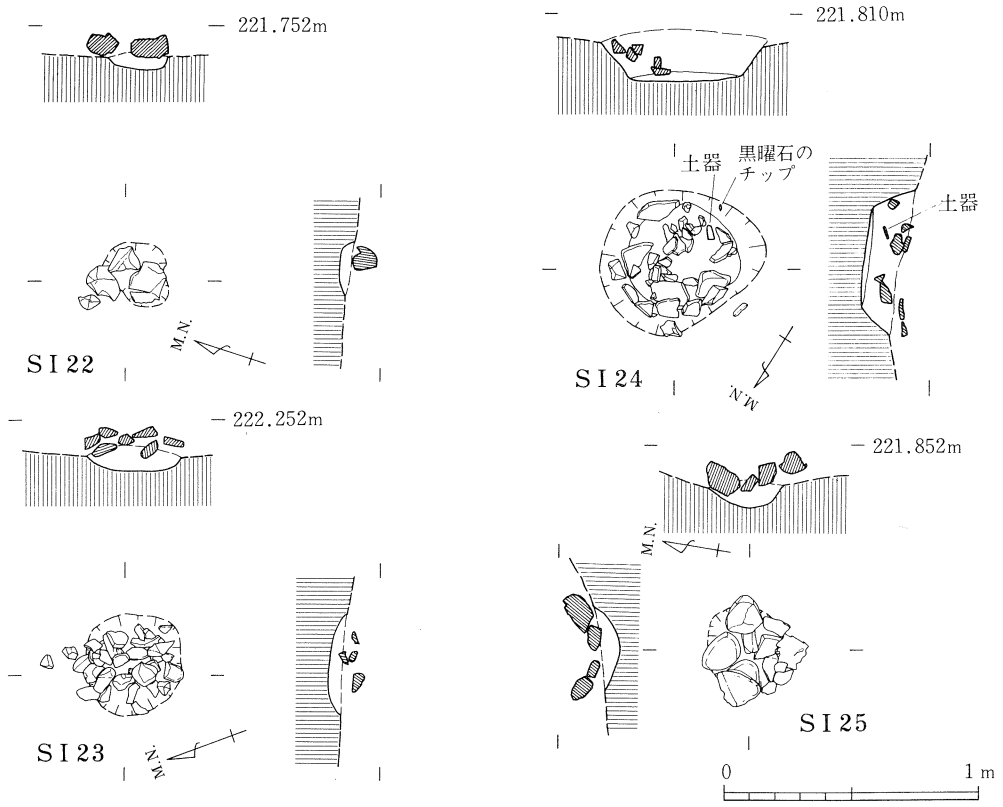
石の間から土器片が出土している。第91図10は、口縁部に縦方向の貝殻腹縁連続押圧文を施し、その下には沈線文が３条見られる。また、口唇部をまたいで粘土の貼付文も見られる。内面は貝殻条痕文の上をナデ、外面はナデである。Ⅱｂ類であろう。11は、外面丁寧な縦ナデ、内面横ナデの無文土器である。12は、内外とも貝殻条痕文の上をナデ調整した無文土器である。

ＳＩ21（第88図）

大小の焼石で構成されている。遺構の周囲に明確な掘り込みが見られた。土坑の埋土は、炭化物を含んだ暗褐色土である。遺物は伴わない。



第88図　Ｅ地区ＳＩ17～21遺構実測図



第89図　E地区SI22～25遺構実測図

SI22（第89図）

大きめの焼石が4個のみである。周囲にはほかに焼石も見られなかったため、集石遺構として扱った。下部に明確な掘り込みは見られなかったが、柔らかな土を取り除くと不定形の浅い土坑になった。遺物は伴わない。

SI23（第89図）

遺構の周囲に明確な掘り込みが確認でき、微量の炭化物を含んだ黒褐色の埋土を取り除くと円形の浅い皿状の土坑になった。遺物は伴なっていない。

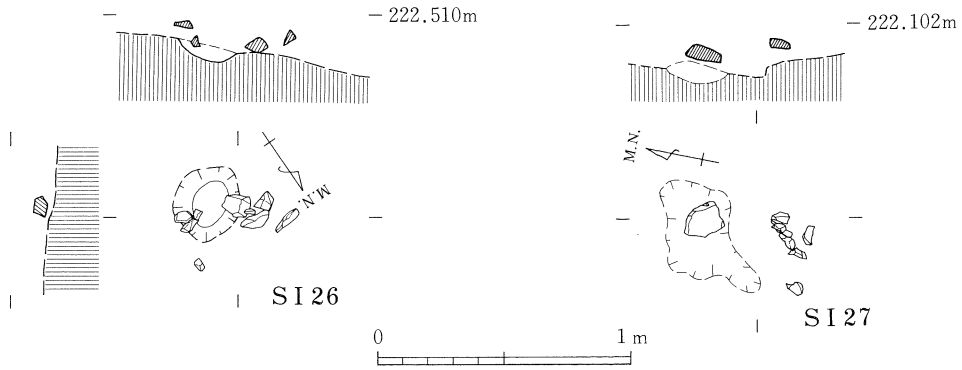
SI24（第89図）

大小の焼石がまばらに見られる明瞭な掘り込みが確認できた。この土坑は、楕円形気味のやや深めのもので、埋土は炭化物を含んだ黒褐色土である。石は脆くなっているものが多い。

土坑の中から黒曜石のチップと土器片が出土している。第91図13は、浅い沈線文が2条見られる胴部片で、ナデ調整されている。

SI25（第89図）

大きめの焼石で構成される。遺構の下部に明確な掘り込みは確認できなかったが、炭化物を含んだ柔らかな暗黄褐色土を取り除くと、円形で椀状の土坑になった。遺物は出土していない。



第90図　E地区SI 26～27遺構実測図

SI 26（第90図）

アカホヤ層下部で焼石の不定形なかたまりとして検出された。遺構の下部には、炭化物を含んだ柔らかな暗褐色土が見られ、それを除去すると、浅い掘り込みになった。遺物は出土していない。

1・2…SI 3　3・4…SI 4　5～7…SI 8　8…SI 9
9…SI 10　10～12…SI 20　13…SI 24

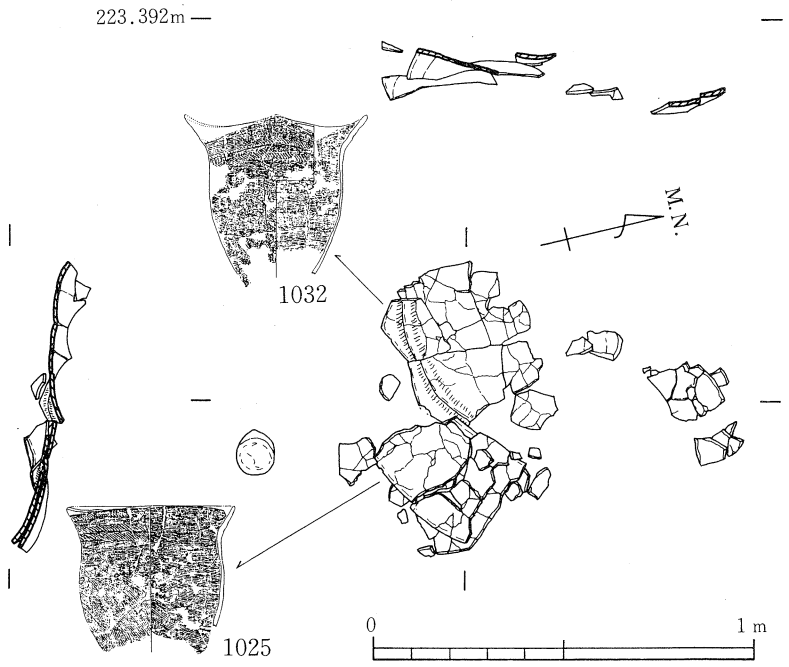
第91図　E地区集石遺構出土土器実測図

ＳＩ27（第90図）

周囲に焼石が見られない中で、大小少量の焼石がかたまっていたため、集石遺構として取り扱った。遺構の下部は、わずかに黒っぽく見えるものの、掘り込みらしきものは確認できなかった。黒っぽい土を取り除くと不定形の浅い土坑となる。遺物は伴わない。

(4) 土器密集区

本遺跡では、Ａ・Ｂ各地区の遺構群の北側の包含層及びＤ地区（Ａ地区の北端部）とそれに続くＥ地区の南東部の包含層で多量の遺物が出土した。中でもＤ地区及びＥ地区の南東部は、土器を中心に特に遺物が集中しており、一次調査では「土器溜り」、二次調査では「土器密集部」として概要報告している。この土器の密集した状態を遺構と見ると、次のような検出状況及び特徴が指摘できる。１．地形的には、Ａ～Ｃ地区などの南側傾斜面に営まれた竪穴住居跡群や土坑群の背後の尾根を隔てた北西斜面上部に位置している。２．湧水の見られる谷間に面している。３．集石遺構の一部やＥ地区ＳＣ４などの上に覆いかぶさっている。４．多量の土器片が積み重なっているが、完形品は殆どない。５．数は少ないが、石器も破損品を中心に見られる。６．Ｅ地区の土器密集区包含層の中央下部付近では、比較的大きな半完形の土器が、セットと考えられる状態で出土している（第92図、土器は1025・1032）。これは、宮崎市平畑遺跡ＸＸⅣ区遺物包含層最下部の一括出土の縄文土器及びその出土状況に類似している。



第92図　Ｅ地区土器密集区下部半完形土器出土状況実測図

(5) 縄文土器

1．出土状況

縄文土器は、A地区の北西部のa・b－6～9、c・d－8・9、e－9の土器密集区及びそれに続くE地区南東部の土器密集区から特に集中して出土しており、次にA地区の南部のi・j－2～7のSA1・2・3周辺に集中して出土している。B地区では、北部のe～g－31～33に少し集中している。逆にC地区ではほとんど出土していない。

2．分類（第93図～第125図）

縄文土器は、まず、深鉢形土器・浅鉢形土器などの口縁部形態や文様、その他の諸特徴をもとに分類と説明を行い、その後、脚台付浅鉢・底部の順に説明することにしたい。

Ⅰ類　口縁部外面にヘラ状工具による太い連続押圧文、その下に浅く太い凹線文を施すもの（738）。器面調整は、ナデである。

Ⅱ類　口縁部外面に連続押圧（刺突）文、その下に沈線文を施すものである（739～742）。器形は直口またはやや外反する深鉢形土器で、器面調整には貝殻条痕文が多く見られる。施文の特徴によって次の2類に細分した。

a．口唇部に指で押したような押圧刻みを持ち、口縁部は竹管状工具による太めの連続刺突文、その下に1条の沈線文を施すもの。これらの文様は深く、内面側に浮き出している（739）。

b．口縁部にヘラ状工具または貝殻腹縁による連続押圧文、その下に2～4条の沈線文を施すもので、押圧文は浅く細い（740～742）。740は、口唇部に貝殻殻表によるごく浅い連続押圧痕が見られる。

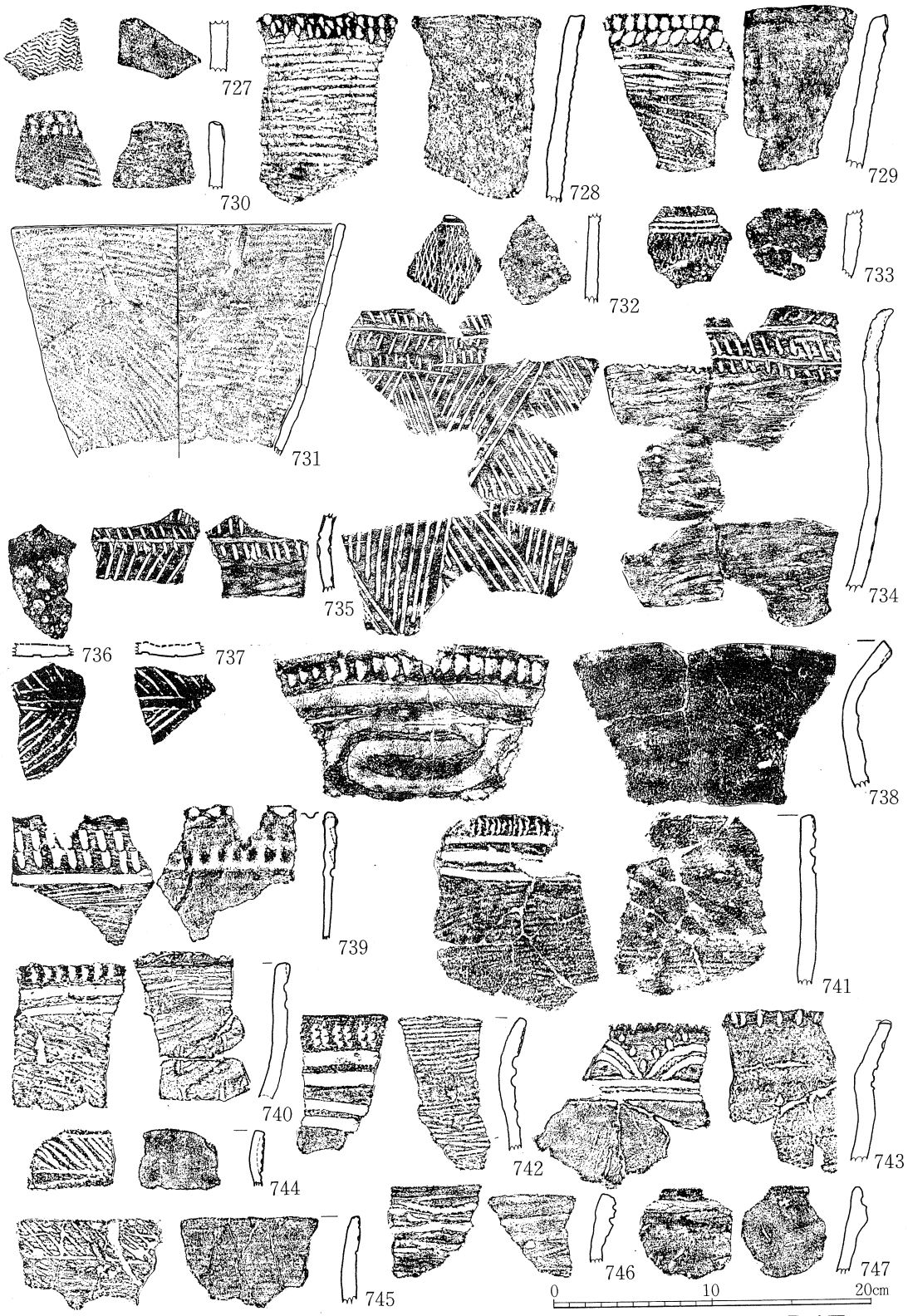
Ⅲ類　口縁部をわずかに肥厚させて文様帯とするもの（744～774）で、Ⅶ類との違いは口縁部断面を三角形に肥厚させるものが少ないこと、文様帯下部の段があまりはっきりせずにしまりがないこと、口縁部は粘土帯を張り付けて肥厚させていると考えられることなどである。766～767は無文土器であるが、口縁部形態からこの類にいれた。

a．口縁部文様帯の下部を沈線文で区切り、その上は斜沈線を施すもの（744～745）。

b．二枚貝腹縁または竹管状工具・ヘラ状工具などによる沈線文・短沈線文・刺突文・押引き文などを施すもの（746～765・768～774）がある。

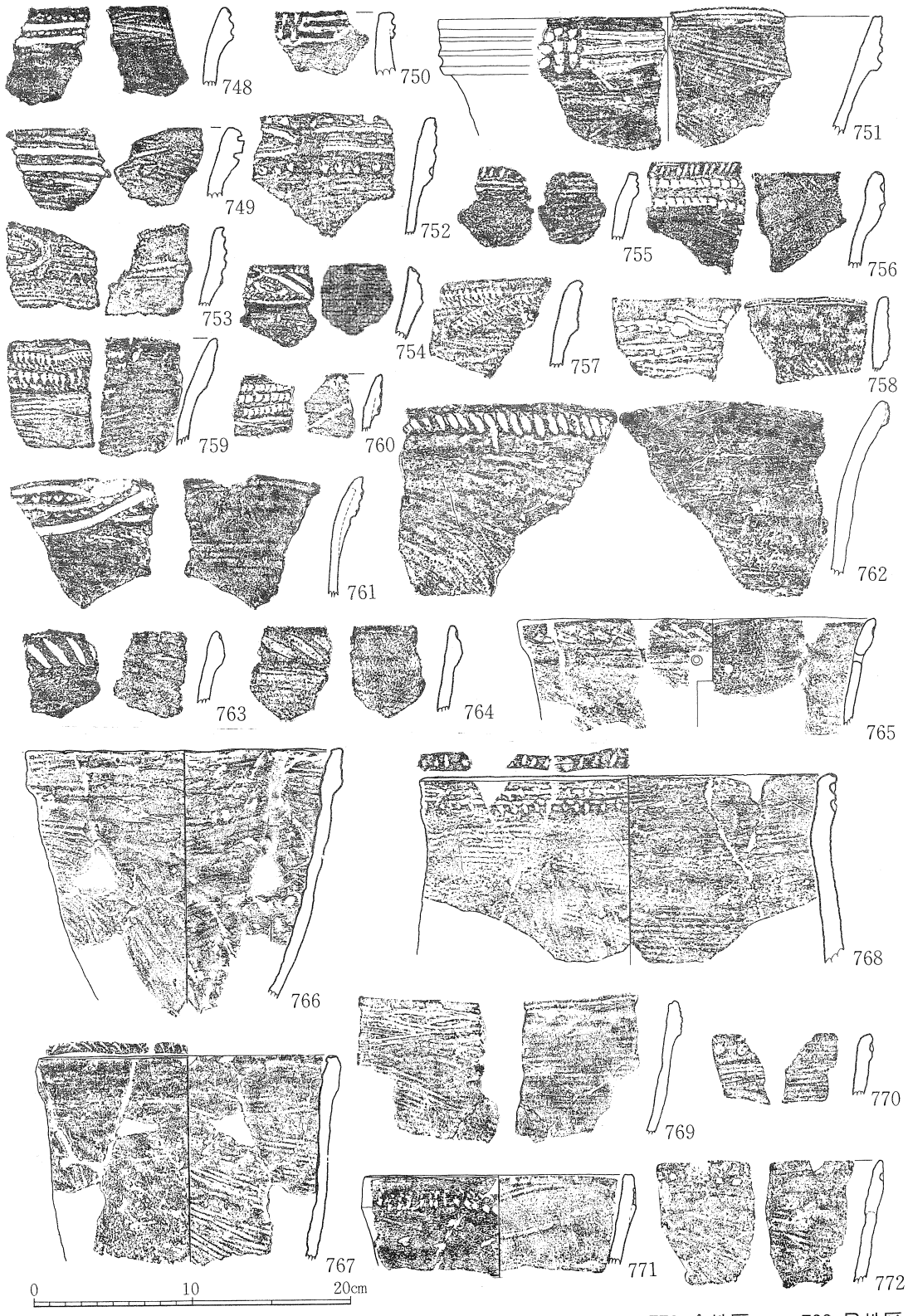
Ⅳ類　口縁部文様帯が厚く肥厚し、大部分が段を有している。文様は、沈線文と刺突文・押圧刻みのみを組み合わせ、最終的な器面調整は殆どナデである（775～789・859～860・1132）。平口縁のほかに波状口縁も見られ、口唇部に沈線文を施すものと無いものがある。また、このうち、沈線文間に連続刺突文を施すもの（782・784・786・789）は磨消縄文土器の影響を受けたものであろう。文様帯の特徴によって2類に分けた。

a．口縁部文様帯と胴部文様帯との間に若干の無文帯を有するもの（775～784・859）。



第93図　縄文土器実測図（33）

728～730・746～747　A地区　　727・732～733　B地区
744　D地区　　731・734～743・745　E地区



第94図　縄文土器実測図（34）

748・752・754～758・762～765・768～770　A地区
749～751・753・759～761・767・771～772　E地区
766　B地区

第95図　縄文土器実測図（35）　774～780・786・789・791～792 A地区　782・785 B地区　773・783 D地区　781・784・787～788・790 E地区

b・口縁部から胴部にかけて文様が続くもの（785〜789・860・1132）がある。

Ⅴ類　沈線文または平行沈線文を主文様として用いる一群である（790〜836）。口縁部はやや外反するものが殆どで、強く外反するものは少ない。833〜836はこの類の胴部片である。文様によって次の３類に区分した。

a．２本の沈線文間に連続刺突文を施すもの（790〜795）で、磨消縄文土器の影響を受けていると思われる。平口縁と波状口縁がある。このうち、795は他と異なり、貝殻腹縁ではなく棒状工具による刺突文を施す。また、794は上部の沈線文間にのみ刺突文が施され、Ｅ地区ＳＣ８出土土器の第81図１はⅡｂ類とこの類との中間的な様相の土器である。

b・口縁上部に連続刺突文、その下に沈線文を施すものである（796〜802）。平口縁と波状口縁があり、波頂部に刻みを持つものもある。

c．沈線文を主文様とするもの（803〜832）で、波状口縁と平口縁が見られる。波状口縁の土器（803〜813）は波頂部に刻みを持つものが多く、平口縁の土器は口唇部に刻みのあるもの（814〜821）と無いもの（822〜832）がある。このうち、812〜813は口縁部内面側に屈曲を有するもので、831〜832は口縁部が強く外反するものである。

Ⅵ類　口縁部の内面上部あるいは口唇部に施文される土器の一群である（837〜859・861〜866）。平口縁と波状口縁が見られる。これらは、施文部位によって次のように細分できよう。

a．口縁部内面上部にのみ文様があるもの（837〜846・848〜852・863）。
内面は段をなして文様帯を作るものと段のないものがあり、口唇部付近は肥厚するものとしないものがある。しかし、いずれも前者が多い。837〜838は同一個体である。

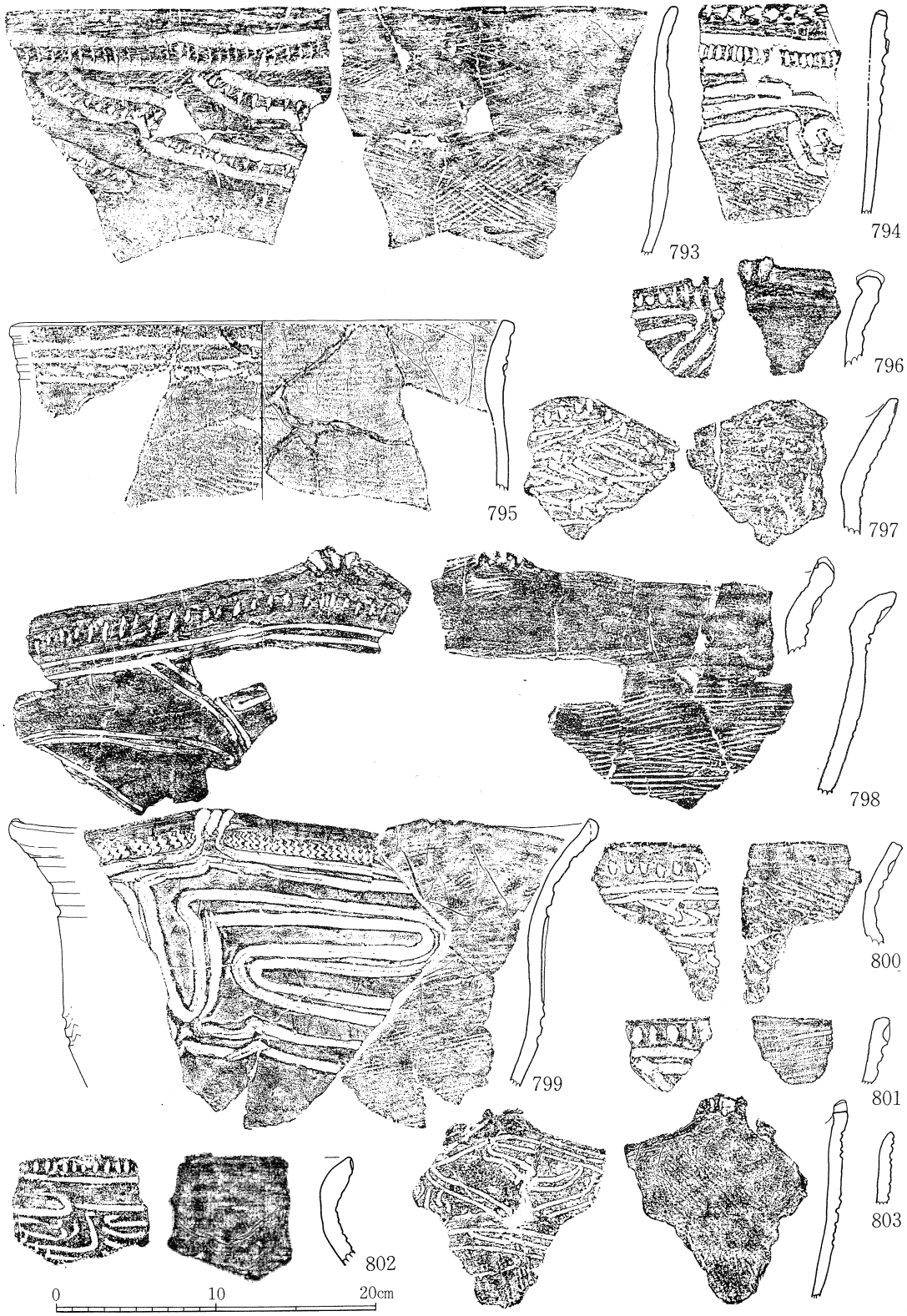
b．口縁部内面上部及び外面口唇部に文様があるもの（847・853〜856）。854〜856は同一個体であるが、波頂部付近の855は内面に段をなさず、854・856には段がある。また、この854・856は段の下にも文様が広がるものである。

c．口唇部に施文されるもの（858）。この類は殆ど出土していない。

d1．ほかの類のもので内面上部にも文様のあるもの（859・861〜862・864・866）。859はⅣａ類、864はⅦａ類の特徴を持つものである。

d2．ほかの類のもので口唇部にも文様のあるもの（857・865）。

Ⅶ類　口縁部を肥厚させ、断面が三角形または逆「く」字形に成形されるもの（867〜1024）。いわゆる「市来式土器」である。文様には、貝殻腹縁の連続刺突文や竹管状工具による爪形あるいは「Ｄ」字形の連続刺突文や単独の刺突文、沈線文や凹線文などが見られ、口縁部文様帯やあるいはその下部の胴上部にまで施文されたものがある。文様は、単一文の繰り返しや単純な組み合わせのものが多い。平口縁と波状口縁があるが、一般に波状口縁の方がやや装飾的である。口縁部文様帯の幅や施文の特徴、口縁部断面の形態などによって大

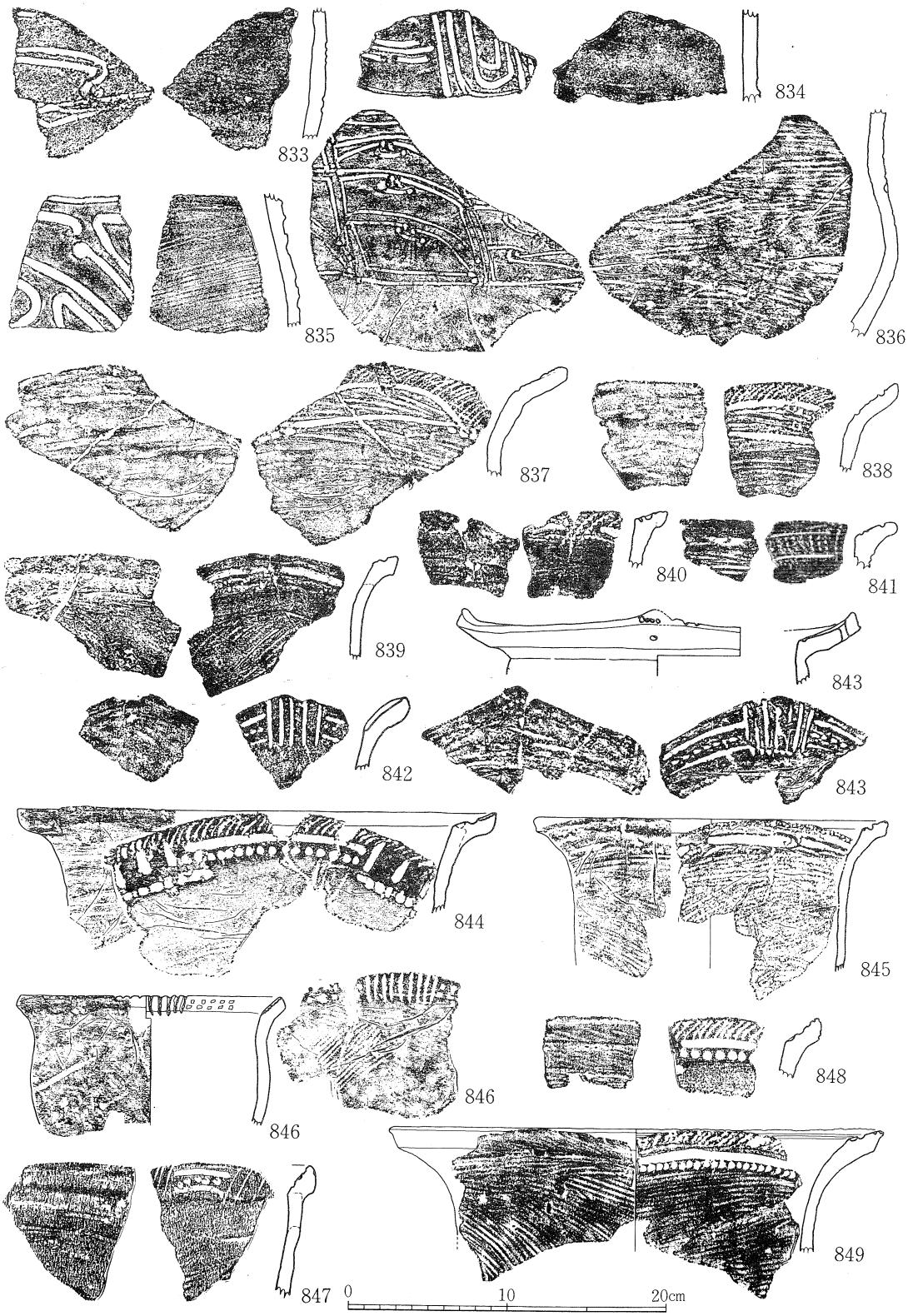


第96図　縄文土器実測図（36）

793・796～798・803　A地区　　800～801　B地区
795・802　D地区　　794・799　E地区

第97図　縄文土器実測図（37）

804～805・810～816・820・822～826・828～829　A地区
807～809・817～819・830　B地区　　821　D地区
806・827・831～832　E地区



第98図　縄文土器実測図（38）

834～835・837～838・840～842・848　A地区
833・836・839・843　B地区　　845　D地区
844・846～847・849　E地区

第99図　縄文土器実測図（39）　851～855・857～858・861～865・867・869～870・874 A地区
856・871～872 D地区　850・859～860・866・868・873 E地区

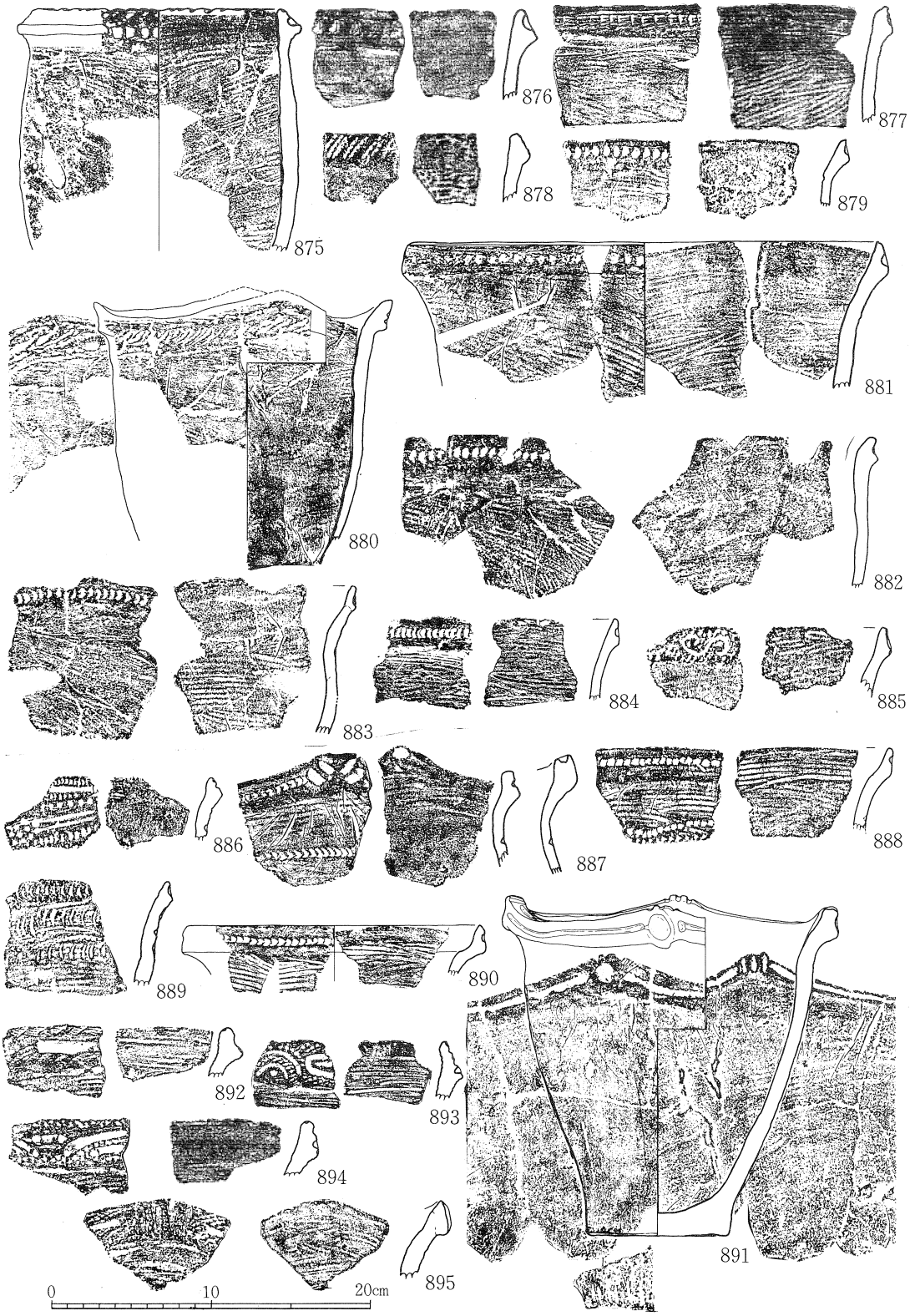
まかに次の４類に分けて掲載した。

ａ．864・867～891・1166～1167。口唇部をわずかに拡張させたような、口縁部文様帯幅の比較的狭いもので、文様は「Ｄ」字形連続刺突文などの単純なものが多い。波状口縁土器においても波頂部の文様は簡素なものである。886～889のように口縁部文様帯の下の胴部にも文様が見られるものがある。1166～1167は、無文土器で口縁部の肥厚はわずかであるが、全体のプロポーションからこの類に入れた。

ｂ．892～982・1173・1176～1177・1181。ａより口縁部文様帯幅がやや広く次のｃよりは狭いものをまとめた。892～923は、口縁部文様帯の沈線文間またはその上下に、貝殻腹縁や棒状工具による連続刺突文を充填させたもので、充填縄文を施した口縁部のイメージがある。924～970は、前者に比べてやや単純かつ簡素な文様を持つ。ａで見られた「Ｄ」字形連続刺突文のほかに貝殻腹縁の単純な連続刺突文も見られる。しかし、波状口縁土器の波頂部においては、文様帯幅がａより広い分だけ、若干複雑な文様のものが見られる。また、971～982は、口縁部文様帯の下にも文様が施されるもので、特に979～980は丁寧な施文の精製品と思われるものである。この類では、908・921・944・978～982のように、口縁部断面が逆「く」字形に屈曲するものが、少量だが見られる。1173・1176～1177・1181は、無文土器であるが、口縁部断面の形態からこの類のものと思われる。

ｃ．983～1011・1174～1175・1179～1180。口縁部文様帯幅がⅦ類の中で最も広いものである。口縁部文様帯下部の肥厚部分は明瞭で著しく張り出す。また、その内面が屈曲し、口縁部断面が顕著な逆「く」字形を呈するものが目立って多い。口縁部文様帯幅が広いにもかかわらず、平口縁土器にはそれほど文様の複雑さや華美さは見られない。ｂに比べると浅い凹線文が多用され、間延びした感のある文様構成である。しかし、波状口縁土器の波頂部においては、端部を刺突で止めた凹線文（太めの沈線文）と貝殻腹縁の連続刺突文とを組み合わせて、1005・1011などのように、横方向の短凹線文の左右に斜方向の短凹線文、さらにその左右に横方向の凹線文を施し、これらの上下には貝殻腹縁の連続刺突文を施すという文様のパターン化が見られる。1003は口縁部文様帯の肥厚部分に、1005～1011は、口縁部文様帯及びその下部の胴部と頸部のくびれ付近にも施文されるものである。また、1174～1175・1179～1180は無文土器であるが、口縁部断面の形態からこの類に入れた。

ｄ．1012～1024。口縁部文様帯下部の肥厚が強調されず、形骸化したような低い段になり、口縁部断面の逆「く」字形の屈曲も間延びし、その下にくびれが生じない。その結果、肥厚させたり、あるいは屈曲させることによって保たれた従来の口縁部文様帯がその意味を薄れさせてしまっている土器の一群である。文様は、肥厚部分の上下にｃで見られたパターン化された文様や貝殻腹縁の単純な連続刺突文を施している。外面文様帯中央の段の上部が比較的狭いものと広いものの二者が見られる。



第100図　縄文土器実測図（40）

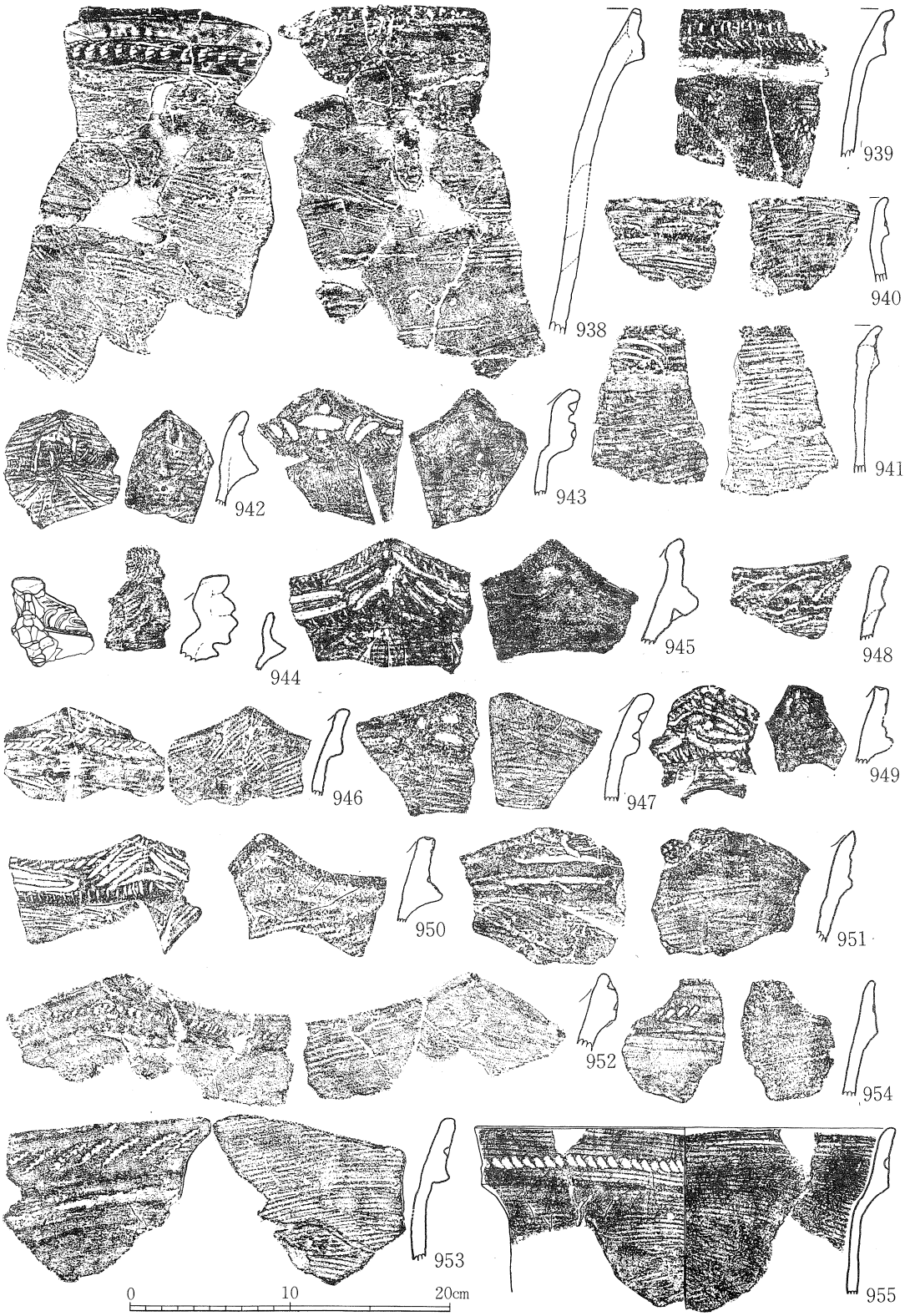
875～877・881・889・892～895　A地区
878～879・882・886・891　B地区
880・883・887～888　D地区　　884～885・890　E地区

第101図　縄文土器実測図（41）

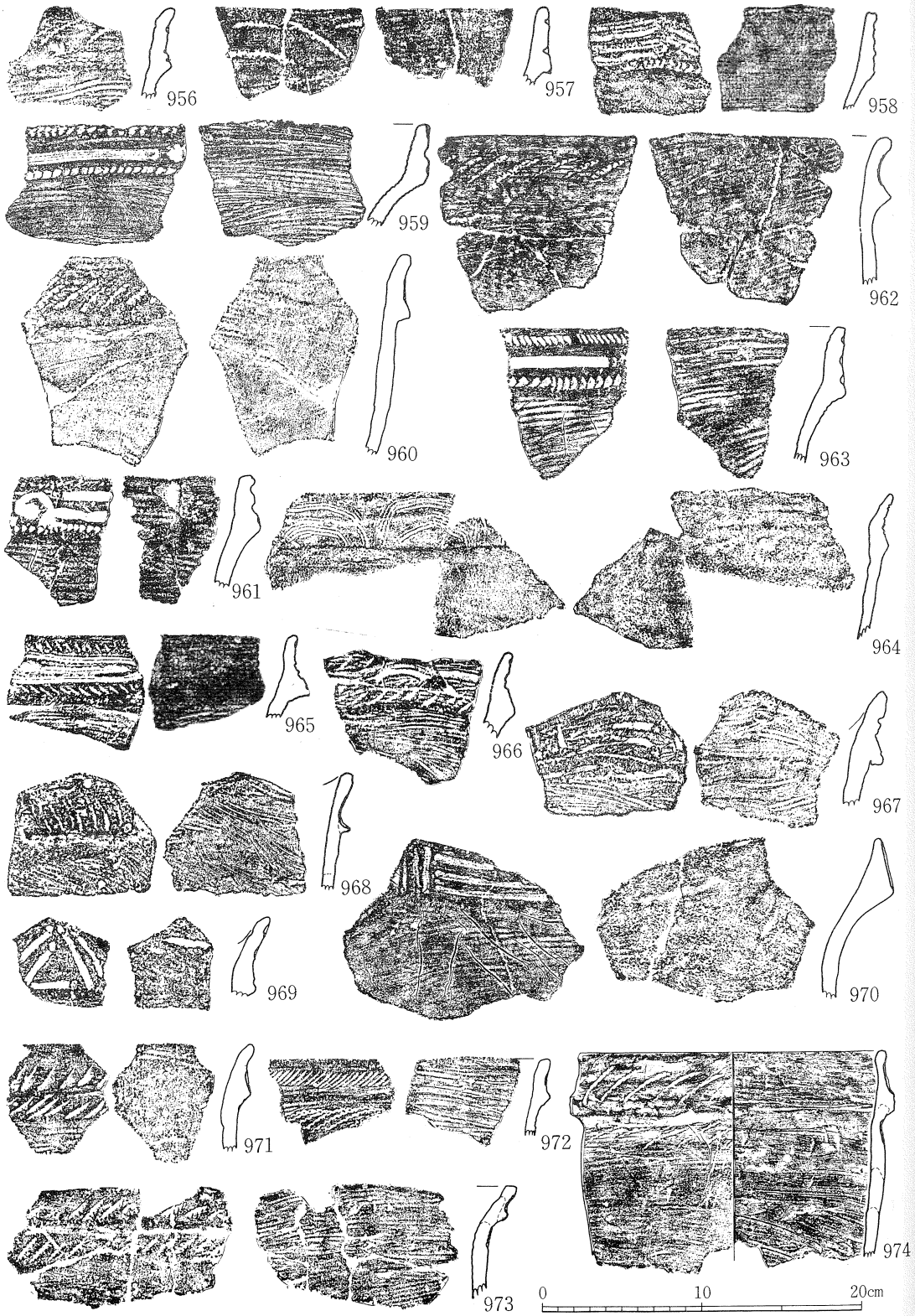
896～910・917～918 A地区　911～912 B地区
913～916 E地区

第102図　縄文土器実測図（42）

919～921・923～931　A地区　　922・932　B地区
933～934　D地区　　935～937　E地区



第103図　縄文土器実測図（43）　942～948・951・953～955 A地区　938～941・949～950・952 E地区



第104図　縄文土器実測図（44）　956～959・965～966 A地区　960～961・967・969～971 B地区　962～964・968・972～974 E地区